

アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』 (『綴織』)第5巻：全訳

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	66
ページ	57-148
発行年	2014-10-31
その他のタイトル	Clemente Alessandrino, Gli Stromati : libro V (traduzione giapponese ; edizione riveduta)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123572

アレクサンドリアのクレメンス
『ストロマテイス』（『綴織』）第5巻
—全訳—
【改訂版】

秋 山 学

序.

初期ギリシア教父の一人、アレクサンドリアのクレメンス（150 – 215）の著作をめぐり、筆者は本学の紀要を借りてその全訳作業を進めてきた。すでに『プロトレプティコス』（「ギリシア人への勧告」；全1巻）、『パイダゴゴス』（「訓導者」；全3巻）に関しては訳出を終えている¹。クレメンスの主著に当たる『ストロマテイス』（「綴織」；全8巻）については、その第7巻まで2013年度内に訳出し終えた²。ただこのうち第5巻は、すでに1995年2月の段階で、平凡社より刊行された『中世思想原典集成』第1巻「初期ギリシア教父」中に、拙訳によるものが収められているため³、本学紀要に拙訳を載せることを後回しにしてきた。

ところで筆者は、2014年5月29日より31日まで、チェコ共和国東部の古都オロモウツ市にあるパラツキー大学キリル・メトディオス神学部にて開催されたアレクサンドリアのクレメンス国際学会第2回大会において、「アレクサンドリアのクレメンスによる聖書解釈における〈しるし〉の意味」と題する発表をイタリア語により行う機会に恵まれた⁴。同学会は、2010年に発足したばかりの新しい学会であるが、これまでギリシア教父関係の学会といえば、オリゲネス学会（2013年8月にデンマークのオーフス大学において第11回大会を開催）、あるいはニュッサのグレゴリオス学会（2014年9月にローマのサンタ・クロッチェ大学において第13回大会を開催）あたりしか知られていなかったのに対し、アレクサンドリアのクレメンスについても国際的な研究者の交流が行われることになったものであり、クレメンスの邦訳作業に携わってきた筆者としては感に堪えないものがある。本2014年度の大会では計15本の

口頭発表が行われたが、筆者はアジア圏から唯一の発表者であった。

同大会における筆者の発表については、同大会の最終日の総括時に、『ストロマテイス』第5巻の詳細なテキストと注解の執筆者として知られるフランスのアラン・ル・ブリュエック教授から高く評価していただいた。それと同時に、ブリュエック教授と直接の親交を結べたことでもあり、ほぼ20年の時を隔てて、再度第5巻の訳出に取り組み、あちこちに見られた誤りをも訂正すべき時機が熟したものと考えようになった。また筑波大学の紀要類に関しては、同附属図書館が、わが国において電子化（リポジトリ）の作業を最も先端的に進めている機関でもあり、第5巻の新しい改訳版を紀要に発表することによって、文字通りクレメンスの全著作を電子版で閲覧できるように努めることに意義を見出せようとも考えた。もっとも、まだ随所に誤りは散見されるため、教文館版の拙訳『ストロマテイス』全巻刊行の時点までに更なる改善と注の充実を図るつもりである。

邦訳に際し、底本としては、これまでの方針を踏襲し、オットー・シュテターリン（Otto Stählin, 1868 – 1949）の校訂になる校訂版テキスト（*Stromata Buch I-VI / Clemens Alexandrinus; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig: Hinrichs, 1906; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte, Bd. 2*）を用い、近代語訳としては、イタリア語訳（Clemente Alessandrino, *Gli Stromati: Note di vera filosofia, Introduzione, traduzione e note di Giovanni Pini, Milano 1985*）を参照した。各章の冒頭に掲げた内容小見出しは、ミーニュ版のラテン語訳から適宜採用したものである。

I. 信仰について。

1.1) 覚知者に関する考察については、駆け足ではあったが以上としたい。そこで次に進むことにし、再び信仰に関して考察しなければならない（『ストロマテイス』2.2.4.2参照）。というのも、われわれの信仰は子に関してであり、覚知（gnōsis）は父に関してであるとして区別する人々がいるからである。2) しかしながら彼らは、次のことを忘れている。すなわち子に関しては、子たること、子が（この世に）到来したことについて、またそれがどの様にしてであるか、何のためであるか、さらにその受難はいかなるものであったかについて

は、真なる信仰を持たねばならない。もっとも、神の子とは誰であるのかということに関しては、知ることが求められる。3) 今や既に、信仰の伴わない覚知も、覚知の伴わない信仰も有り得ない。そして子のない父もない。というのも父であることは、同時に子の父であることを表すからである。しかし子は、父に関しての真なる師である。4) そして子を信ずるためには、父を知らねばならない。子もまた父に向かっているからである（マテ3,24；ヨハ1,1）。また逆に父を覚知するためには子を信じなければならない。なぜなら教えを授けるのは神の子だからである（ヨハ1,18）。というのも信仰を通して覚知に到るように、子を通して父に到るからである。けれども、子と父に関する覚知、少なくとも知的規準に沿った形での覚知とは、真理を通しての真理の把握と理解である（ヨハ14,6－7）。5) それゆえ、われわれは信じられないことの信仰者であり、かつ知られえないことの覚知者でもある。すなわち、すべての人々には知られることも信じられることもなく、少数の人々によって信じられ知られていることの覚知者である。実にわれわれは、著作を言葉によってではなく、観想そのものに頼って記述するような覚知者なのである。

2,1) 「聴く人々の耳に語り掛ける人々は幸いである」（シラ25,9）。しかるに靈魂の耳とは信仰である。そしてこの信仰をほのめかしつつ、主はこう語っている。「聴く耳のある者は聞くがよい」（マタイ11,15）。これは、信ずることによって、主が語ることを語られる通りに理解するためである。2) それはさておき、最も古代の詩人であるホメロスもまた「理解する」と述べる代わりに「聞く」という語を用いて、すなわち類の代わりに種を用いてこう記している。「そのことは、とりわけ彼ら自身が聞く」（ホロス『オデュッセイア』6.185）。つまり、彼ら二人の共鳴・交響は相まって、全体として一つの目的に向かい、救いをもたらすというのである。3) 次のように語っている使徒がわれわれの確実な証人である。「わたしはあなたがたに会うことを切に望んでいる。それはあなたがたを励まし、霊的な恵みをいくばくなりとも分かち合いたいからである。それは、あなたがたとわたしの間に相互に働く信仰によって、あなたがたの間でわたしが励まされるためである」（ローマ1,11－12）。さらに続けて使徒はこう言っている。「神の義は信仰から信仰に向かい、信仰のうちに明らかにされる」（ローマ1,11）。4) こうして彼は、二つの信仰を告げながら、実は一つの信仰、すなわち成長と完成とを受容する信仰を述べているのである。5) というのも普遍的な信仰は、いわば礎のように基盤に据えられるからである。実際、癒しを切望し、信仰によって駆り立てられた人に、主はこう語りかける。「あ

なたの信仰があなたを救った」(マタイ9,22)。6) それに対してもう一方の信仰、選り抜かれ第一の信仰の上に建つものは、信ずる者とともに完成され、学びによって増し加えられ、ロゴスの掟を完遂することによって先の信仰と共に働きをなす。その例は使徒たちである。彼らの信仰は山をも動かし(マタイ17,20)、木々を移し変える(ルカ17,6)と語られている。3.1) ここからこの力の偉大さに気づき、彼らは言わば「芥子種のように」(マタイ17,20) 靈魂を有益に刺激し、靈魂の中で大いに成育する信仰を自らに加えることを、そしてその信仰の中で、崇高な事柄に関する諸々のロゴスがその上に巢をつくることを求めたのである。2) というのもバシレイデスの考えるように、もしある人が本性的に神を知りうるとすれば、その人は卓越した思惟を「信仰」あるいは「神の国」と呼び、(欠落部分)...、創造主の傍に存在する価値を有する被造物と解釈することであろう。すなわち彼は信仰を、本質であって能力ではなく、また本性かつ実体であり、被造物の凌駕され得ぬ限りなき美ではあるが、自由意志を用いる靈魂の理性的な同意ではないと述べることであろう。3) このようなわけで、ヴァレンティノスが考えるように、もし人が本性的に救われているならば、またバシレイデスの考えるように、もし人が本性的に信心深く選ばれているならば、旧約ばかりではなく新約の掟は虚しきものとなる。そして救い主の到来なくして、時の経つうちに本性が輝きを放ちうるということも起こりえよう。4) だがもし彼らが主の来臨を不可欠なものだと述べるのであれば、彼らにとって本性の特質は消え去っている。つまりそれは選ばれた人々が学び、浄め、善行によって救われるのであって、決して本性的な救いではない。4.1) であるからアブラハムが、マムレの櫪の木の下で「あなたとあなたの子孫にこの土地を与えよう」(創世18,1)と告げる主の声を聞いて信じたとき、彼は選ばれた者であったのだろうか、それとも否か。もし選ばれた者でなかったとすれば、あたかも本性的にであるかのように直ちに信じ得たのはどうしてであろうか。一方もし彼が選ばれた者であったとすれば、異端派の論拠は崩れ、主の来臨以前にも、選びあるいは救いすらも見いだされたということになる。「なぜならアブラハムは義と認められた」(創世15,6; ロマ7,4,3)からである。2) というのも、もしある人がマルキオンに従って「造物主(デミウルゴス)は、自分を信じる人に対して、自分固有の救済を与えることで救いをもたらす」と主張するならば、善なる神の力は過少に評価されることになる。なぜなら善神の力は、彼らによって崇められている造物主の後で、遅ればせながら自らも救いを与えようとすることになるからである。しかもこの造物主に学びあるいは

倣うことによって、3) だがたとえかの善なる神が、彼らの述べるこのような仕方では救いをもたらすとしても、それは自分に属するものたちを救うのでも、あるいは被造物を創造した者の意向に従って救いを手がけるのでもなく、暴力あるいは策略によるものとなることであろう。4) このような者、かくまで救いを延ばす者がなお「善なる」神と言えるであろうか。たとえ場が異なり、全能者の座が善なる神の座の下位にあろうと、救いをもたらす者の意図は善に先立つものであって、遅れるものではないであろう。

5.1) 以上述べたような理由から、不信なる者どもが思慮を欠くものでもあるということがわれわれにとって明らかとなった。なぜなら「彼らの道は曲がり、彼らは平和を知らない」（イザヤ59,8）と預言者が語っているからである。また神感を受けたパウロは「愚かで無知な議論を避けよ、争いを生むからだ」（2テモテ2,23）と勧めている。アイスキュロスもこう叫んでいる。

「無益な無駄骨は折らぬがよい」（アイスキュロス『縛られたプロメテウス』44）。

2) というのもわれわれは、信仰と歩みを同じくする探求、信仰の礎の上に偉大なる真理に対する覚知を築き上げる探求こそが、最良のものであるということをよく知っているからである。3) しかしわれわれは、明白なることを探求することはなく（例えば昼のあいだに今昼であるかどうかを問うことなど）、また明らかでない上に決して明白とはなりえないことをも探求することはなく（例えば「星の数は偶数か奇数か」という問いなど）、あるいは反駁可能な問いをも探求することはない（「反駁可能な」とは、逆の理論を試みる者にとっても等しい論拠を立てることができる問いを言う。例えば「胎内にある動物は動物か否か」〔ストロマテイス8.4.9.7参照〕という問いなど）。だが第四の問い方がある。それはこれらのうちの他の部分から、否定しえぬ確固たる論拠が提示される場合である。4) かくしてもし、探求の発端があらゆる可能性において限定されるなら、信仰が確立される。というのもわれわれは反対者に対して、神が語り、探求の各対象に関し聖書に基づいて提示される反駁しえない事柄を示しうるからである。6.1) であるから、それでもなお神を信じず、神に関しても人間に関してと同様の証明を要求するほどに不敬なる者が誰かあるだろうか。さて探求のうち、あるものは感覚を要求する。例えば「火は熱いか」とか「雪は白いか」というような問いが立てられるような場合である。また中には、勧告や叱責を必要とするようなもの、例えばアリストテレスが述べる「両親は尊敬すべきか」というような問いもある（アリストテレス『ビカ』1.11）。あるいは懲罰に値するようなものもある。例えば摂理が存在するかどうかに関して、実証を要

求するような場合である。2) 摂理は存在する。それゆえあらゆる預言、あるいは救い主に関する経綸が摂理に従って生じたものではないと考えるならば、それは不敬である。このような事柄に関しては、おそらく証明を試みる必要もなかろう。神的な摂理は、すべて目に見えることの光景、詩的技巧や知恵に満ちた詩句、あるいは規律に従って生じた明らかとなることどもから明確となるから。3) さらに、われわれに存在と生命とを分かち与えた方は、ロゴスをも付与した。これはわれわれに対して、理性的にかつ善く生きることを望んでのことなのである。というのも万物の父なる方の言葉は、単に発せられるだけの言葉ではなく、知恵であり、いとも明白な神の慈愛であり、全能なる神の力であり、真に神的なるものだからである。これに同意しない者にとっても、今述べたことは理解しうることであって、それはすべてを支配する(神の)意図なのである。

7.1) しかしながらある者は不信仰、またある者は論争的という具合であって、すべての者が善の完全性に到達しているわけではない。なぜならわれわれは、自由意志なくしてその完成に辿り着くことはできないし、またすべての事柄がわれわれの思慮のうちに置かれているわけでもないからである。例えば起り得る結果などがそうである。2) というのも「われわれは恵みによって救われている」(1コリ2,5) のであるが、決して善き業なくしてというわけではなく、われわれは善に向かうように定められているのであるから、善に向けて努力を怠ってはならないのである。3) またその一方で、美しきことを追い求める揺るがぬ健全な思慮をも獲得せねばならない。そのためにはとりわけ、われわれは神的な恩恵と正しき教え、汚れなき不屈の心、そして父が自らの許へ引き寄せて下さることを必要とするのである。4) というのもわれわれは土でできた肉体をまとしており、感覚しうるものに関しては肉体を通じて把握するが、思惟されるものに関しては論理的な能力をもって捉えるからである(7^oラト『ファイトン』81E2; 81C7; 79D1)。5) だからもし人が感覚的にすべてを把握しようと企てるならば、真理には遠く及ばずに失敗する。実に使徒も、霊的な意味に従って、神に関する覚知について記している。「というのもわれわれは現在では鏡を通すようにして見ているが、そのときには顔と顔を合わせて見るようになるであろう」(1コリ13,12)。6) なぜなら真理の観照は、わずかの人々にしか許されていないからである。実にプラトンも『エピノミス』の中でこう述べている。「浄福に達することも、幸いな身となることも、少数の人々を別とすれば、人間どもの力ではできないとわたしは主張する。だが正確に述

べるなら、これは人間どもがこの世にいる限りでの話である。ところが、この世を立ち去った後には、人間にはすべてを手にすることができるという美しい望みがある」（プラトン『エピノミス』973c3－6）。7) これと同様のことは、モーセによって記された書でも意図されている。「何人も、わたしの顔を見て、生きていることはできないであろう」（出エジプト33,20）。なぜならこの世の生命に留まっているあいだは、何人も神をはっきりと捉えることはできないということは明らかだからである。しかし「こころの清い人々は神を見るであろう」（マタイ5,8）、完徳の極みに達した際には、8) というのも、靈魂は諸存在を把握しうるには非力であり、われわれは神的な師を必要としたからである。かくして救い主、善の獲得のための師また導き手、偉大なる先見の語り得ぬしが遣わされたのである。8.1) 「学者はどこにいる？ この世の論客はどこにいる？

神は世の知恵を愚かなものとされたではないか」（1コリント1,20）と使徒（パウロ）は言っている。また彼は「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする」（1コリント1,19）とも述べている。ここで語られているのは、明らかに見せかけの賢者、争いを好む者のことである。2) 実に、かのエレミヤは非常に美しくこう語っている。「主がこう語る。＜道の傍らに立ち、永遠の路を尋ねよ、真なる道とはいかなるものかと。そしてその道を歩め。そうすればあなたは自らの靈魂に浄めを見いだすであろう＞と」（エレミヤ6,16）。3) 彼は語る、「尋ねよ、そうすればあなたがたは、知者たちから争いもいさかきもなく知ることができよう」と。われわれは、ひとたび真理を学ぶならば、それによって真っ直ぐな道を引き返すことなく歩み、ついには求めているものに邂逅しうることであろう。4) 実に、かのローマ人の王（ヌマという名であった）が、ピュタゴラス派として、すべての人々のうち最初に「信仰と平和の神殿」を建立したのもっともなことであった。5) さて「アブラアムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（創世15,6）。彼は、大気下の現象をめぐる崇高な愛智、および天の下を動くものに関するより高められた愛智の業にいそしんでいる間は「アブラム」と呼ばれていた。これは「高められた父」という意味に解される。6) しかしその後、彼は天を見上げた（創世15,5）。それはある人々が理解しているように、子を風（pneuma）のうちに見たためかもしれない、あるいは栄光に包まれた天使を、あるいはまた他の仕方でも、被造物やそれら被造物のうちなるあらゆる秩序に優る神を知ったためかもしれないが、彼はア（A）の一文字をさらに得て、唯一なる神への覚知を獲得し、「アブラアム」と名付けられた（創世17,5）。すなわち自然学者か

ら知者に、また神を愛する者になったのである。7) ここでは次のように解釈される。すなわちアブラアムとは「響きの選ばれた父」である。なぜなら生じた言葉は響き、言葉の父とは知性であり、真摯な者の知性が選ばれるからである。

9.1) ここでわたしとしては、かのアクラガスの詩人（エンペドクレス）が次のように信仰を賞賛しているのを、大いに讃えておかねばなるまい。

「おお友よ、わたしは知っている。わたしが述べ明かそう
とする物語のうちにある真理を。だがそれが人々のものとなるには
大きな困難を伴う。信仰の衝動は心にとって厭わしきものゆえ」

（エンペドクレス断片 114 ティールス・クランツ）。

2) それゆえにかの使徒も次のように勧告している。「われわれの信仰が」、信ずるようと福音を告げる「人々の知恵のうちにあるのではなく」、「神の力のうちにあるように」（1 コリント 2,5）。その力とは、ただそれだけで、証明を必要とすることなく、純粋な信仰を通して救うことのできる力である。3) なぜならその力とは「名声を得ている人々の中で最も信頼できる人が、守る術を知っている」ものだからであり、また「正義は、偽りの作り手また証言者を捉えるであろう」とかのエフェソスの人（ヘラクレイトス）が言っているからである（ヘラクレイトス断片 28 ティールス・クランツ）。4) つまり彼もユダヤの哲学から学んで、悪しき人々に対する火による浄めを知っていたのである。この浄めとは、後にストア派が「大炎上」と呼んだものである。また彼によれば、この人々は、個々人が何らかのあり方で復活するということを教説として定めたのだという（ヘラクレイトス断片 66 ティールス・クランツ；アルム『古期ストア哲学者断片集』630）。つまり彼らは「復活」ということを、ほのめかして語ったわけである。5) 一方プラトンは、大地がある一定の期間をおいて火と水で浄められるということを次のように述べている。「人類の滅亡ということは、いろいろの形でこれまでも多々あったことでもあり、今後もあるだろうが、その最大のもは火と水によって引き起こされるのであって、ほかに無数の他の原因によるものもあるが、こちらはさほど大きなものではない」（プラトン『ティマイオス』22c1-3）。6) またその少し後でこう付け加えている。「その真実のところは、大地をめぐって天を運行するものの軌道の逸脱と、長期間をおいて間々起こる、大火による地上の事物の滅亡のことに他ならない」（プラトン『ティマイオス』22d1-3）。7) さらに彼は洪水に関してこう述べている。「また、神々が洪水を起こして大地を水で浄めるような場合には、山に住む牛飼いや羊飼いが助かるのに引きかえ、あなた方の

地方の都市に住む人々は、河流によって海へと押し流される」（プラトン『ティマイオス』22d7 – e1）。

10.1) さてわれわれは『ストロマテイス』第1巻において、ギリシアの哲学者たちが剽窃者と呼ばれうるということを示した（『ストロマテイス』1.17.87.2）。すなわち、彼らはモーセおよび預言者たちの書から、自分たちの教説の極めて主要な部分を、謝意を表することもなく取り入れたと思われるのである。2) さらにここで次のことをも付け加えたい。それは、天上界での遺産を相続する任に当たった天使たちが快楽に堕ち、彼らの知るところとなった限りの語ってはならない事柄を女性たちに口外したということである。その他の天使たちは、むしろ主の来臨のためにそれを黙秘した。ここから摂理の教えと天上的なことどもの啓示が発出したのである。3) 他面、預言はギリシアの詩人たちに伝えられ、教えに関して論ずることが哲学者たちの間で生じた。それは、一方で彼らが推測に基づいて取り組んでいる際には真理を証しするものとなり、他方、預言の寓意に隠された意味を理解しない際には誤ったものとなった。この点に関しても、不可欠な事項に触れた際には簡単に注記したいと考えている。

11.1) さて信仰とは、活力に欠けた孤独なものであるべきではなく、探求とともに輝きを放つべきものであるとわれわれは主張する。なぜならわたしは、人がまったく探求を止めることを決して認めないからである。というのも主が「求めよ、そうすれば見出すであろう」（マタイ7,7）と言っているからである。

- 2) 「探しているなら捉えられる、
だがなおざりにすれば逃れ去る」

（ソフォクレス『オイディプス王』110 – 111）

とソフォクレスは言っている。3) 同様のことは喜劇作家メナンドロスも語っている。

「最も知恵ある人々は言っている、
〈すべて探求には注意深さが要だ〉と」（メナンドロス断片164ケテ）。

4) しかしながら靈魂の洞察力は発見に向かうのが必然であり、また障害となっているものは浄め尽くされねばならない。すなわち闘争心、嫉妬、また人間世界において最も悪しきものである不和などは、完全に滅ぼされるまで打ち碎かれるべきなのである。

- 5) なぜならフリウースのティモンがいつも美しくこう記しているからである。

「人間にとっての災禍エリス（不和の女神）が、
虚しき叫びを挙げながら闊歩する。人を殺める争いの女神の、

姉妹また仕え女たる女神が、彼女は盲目のうちに、万物の中を
 転げ回ったかと思うと、人間の頭に己が身を据え、
 人を希望に向かわしめる」(ティモン断片 21 デイリス・クラツ)。

6) そのすこし後に、彼は続けてこう述べている。

「誰がこの人々を、忌まわしき不和のうちに争うようにと
 仕向けたのか、喧騒と歩みをともしする〈騒ぎ〉だ。
 なぜなら沈黙する彼らに憤って、騒ぎは人々の上に
 饒舌な病いをあおりたて、幾多の人々が滅びるからだ」

(ティモン断片 22 デイリス・クラツ)。

以上は「偽りの言葉」「角」(虚偽論法の一つ)、また「忘却」「罅言」、はた
 また「嘘」「欺瞞」あるいは「曖昧」「詭弁」に関しても言えることである。

12.1) しかしながら神に関しての探求は、不和に向かわず発見へと赴くもの
 であれば救いにつながる。なぜならダビデの書にこう記されているからである。
 「貧しき人々は食して満ち足り、主をたずね求める人々は主を讃えるであ
 ろう。彼らの心はとこしえに永らえるであろう」(詩編 21,27)。2) というのも、
 真なる探求に則って主を讃える人々は、神からの賜物、すなわち覚知に満ち足
 り、彼らの靈魂は、子を通して父が知られるが故に生命を有するからである。
 ここで靈魂は生命を豊かに与えるものであり、寓意をもって〈心〉と呼ばれて
 いるわけである。3) とところで、総じて物を言い書く人々のすべてに対して、
 そうむやみに耳を貸すべきではない。というのも多くの人々の手で耳を扱われ
 た杯は汚れ、その耳をすり減らし失って、ついには杯本体すらも壊されてしま
 うからである。4) ちょうど同じように、多くのたわごとによって信仰の汚れ
 なき聴覚を汚した者どもは、とうとう最後には真理に対して聴覚を失い、役立
 たずとなって地に倒れ伏すのである(マタイ 11,27)。13.1) であるから、われわ
 れが子供たちに、両親には耳を傾け、また愛するようにと勧告するのも故なき
 ことではない。すなわちこれは、従順を通して愛の自覚が生まれるようにとい
 うことを寓意的に表現したものである。愛を表す者に知られる神は「愛」
 であり(1ヨハネ 4,16)、学びを通して信ずる人々に自らを委ねる神は「信実な
 方」だからである(1コリント 1,9; 10,13)。2) われわれもまた、神的な愛を通し
 てこの神と親しく交わる必要がある。それは類似のものを通して類似のものを
 観想する境地に到るためであり、われわれに従う子供たちのように、真理のロ
 ゴスに偽ることなく浄らかな心で耳を傾けるべきだからである(2テモテ 2,15)。
 3) これは実に、エピダウロスの神殿の入口に、誰であろうか、銘として彫り

つけた人物が寓意的に表現しようとしたことなのである。

「芳香を放つ神殿の内部に入るには、
汚れなきものでなければならない。
汚れのなさとは聖なることどもを思惟することである」

（『パテイク・ギリシア詞華集』 附篇 99）。

4) 主は言っている。「あなたがたもこの子供たちのようにならなければ、あなたがたは天国に入ることはできない」（マタイ 18,3）。すなわちここで、神の神殿は三つの礎石、すなわち信仰、希望、愛の上に建てられるものとして描かれているのである（1 コリント 13,13）。

II. 希望について。

14.1) 信仰に関しては、ギリシア人による著作から十分な証言を提示し終えた。けれどもそれが過度にわたり、希望あるいは愛に関しても最大限に詳述したいと思うようにならないためには、次のことのみを述べれば十分であろう。まず『クリトン』においてソクラテスは「生きる」ことの代わりに「善く生きかつ善く死ぬ」ことを重視し、来たるべき別の生命に対して何らかの希望を抱こうと考えている（プラトン『クリトン』 48B5-6）。2) プラトンは『ファイドロス』篇においても、靈魂は自ら本来の姿をとるときにのみ、真なる知恵と、人間の力を越えることに与りうるとし、それはこの世での愛（erōs）が天に向けて靈魂を飛翔させ、哲学者の愛によって希望の極みに到達した本性が、新たな永遠の生命の始まりを得るときであると述べている（プラトン『ファイトロス』 248,249）。

15.1) また同じプラトンは『饗宴』の中で、およそ次のようなことを語っている。「すべての人間には、自分と同類のものを産むことへの本性的な愛（erōs）が備わっている。つまり人間が産みたいと思うのは人間のみであり、真摯な者が誕生させたいと思うのも、自分と似た者である」（プラトン『饗宴』 206C—208B）。2) けれども彼が『テアイテトス』篇の中で語っているように、真摯な者と言えども、自分の許へやって来た若者たちを教育し、産み、人間として完成させるだけの完全な徳を備えていないならば、これを行うことは不可能である（プラトン『テアイテトス』 150B—C）。3) ある者は人間を肉体的に産み、またある者は靈魂に従って産む。ユダヤの哲学者たちにおいても「言葉で教え導き、照らし出す」ことは「産む」と言われる（1ペトロ 1,3；1,23）。かの偉大なる使徒も、ある箇所ですら「わたしはあなたがたをイエス・キリストのうちに産んだ」

と語っている (1 コリント 4,15). 4) 一方エンペドクレスも、友愛 (philotēs) とは結合をもたらす一種の愛 (agapē) であると考え (エンペドクレス断片 17,7 デイールス・クランツ)、これを諸々の始源のうちに数えあげてこう語っている。

「彼女 (友愛) を汝は知性をもって観よ、
驚きの眼で座してはならぬ」

(エンペドクレス断片 17,21 デイールス・クランツ)。

5) エンペドクレスばかりではなく、パルメニデスもまた、その詩のなかで「希望」について次のように謎めいた言葉で語っている。

「現に在るものばかりでなく、去りゆくものをも、
知性をもってしかと観よ。なぜならかくあることができるものから、
いま在るものも、宇宙の到るところに様々なあり方で散乱している
ものも、あるいは集中成立しているものも、切り離すことはできない
のだから」 (パルメニデス断片 4 デイールス・クランツ)。

Ⅲ. 信仰と希望が目指すものは、知性を通してのみ認識されること。

16.1) 希望する者は、信ずる者と同様、思惟される事柄、予期される事柄を知性によって見る。であるから、われわれが何かある事柄を「正しい」あるいは「美しい」さらには「真理である」と述べるとしよう。すると、それらのものに関してわれわれは、眼によってではなくただ知性のみによって知りうるのである (プラトン『ファイドン』 65D - 66A)。一方神のロゴスは「わたしは真理である」(ヨハネ 14,6) と述べている。それゆえロゴスは知性によって観想される。

2) さてプラトンの書にはこう述べられている。「あなたは誰を真なる哲学者だとするのか。わたしは言う、真理を観想することを愛する者だ」(プラトン『国家』 475E4 - 5)。3) 一方『ファイドロス』篇の中でプラトンは、真理について、これをアイデアとして語ることで明らかにするであろう.. 〈欠落部分〉... しかるにアイデアとは神の思惟であり、これをユダヤ人は神のロゴスであると述べる。4) テキストの上ではこうなっている。「人は、特に他ならぬ真理について話そうとするとき、真実ありのままを語る勇気を持たなければならない。まことに、かの色なく、形なく、触れることもできぬ〈実体〉は、ただ靈魂の導き手である理性のみによって観想されるものだからである」(プラトン『ファイドロス』 248,249)。5) このロゴスは進み出て創造をおこない、さらには自らをも生むものとなる。それはロゴスが目にも見えるものとなるべく肉体となったとき

である（ヨハネ1,14）。6）であるから正しき者は、愛に満ちた発見を追い求めるであろう。そして努め励むうち、ついにその発見に到る。なぜなら主が「叩く者には開かれるであろう」（マタイ7,8）、「求めよ、そうすればあなたがたに与えられるであろう」（マタイ7,7）と述べているからである。7）（天の）王国を略奪する「襲撃者ども」（マタイ11,12）は、論争の言葉ではなく、正しき生の継続と、止むことのない祈り（1テサロニケ5,17）でもって昔の過ちによる汚点を拭い去り、（天国を）強奪すると言われるからである。

8）「悪しきことはいくらでも、しかもたやすく手に入る」

（バシトス『農と暦日』287）。

しかし、「逆に、労苦する者には神が援助する」（イウリピデス断片432ナウク）。

「なぜならムーサたちの得難い賜物は、

誰の手にも入りうるようにと

道の中央に置かれているものではないのだから」

（バルク『ギリシア抒情詩人作品集』第4版作者不詳断片86B）。

17.1) 実に、ロゴスに従って歩みをなす者にとって最初の学びとは、（自らが）無知であるということに気付くことである。無知であることから出発し、人は探求をおこなう。探求をおこなううちに彼は師を見いだす。見いだすと同時に信じ、信じることによって希望を抱き、そこから愛して愛の対象に似るものとなる。これこそ、愛し始めたものを追求するということなのである。2) ソクラテスがアルキピアデスに示したのは、およそそのような方法であった。アルキピアデスはこう尋ねている。「〈正と不正に関して、わたしは他の方法で知ったのかも知れない、とあなたは考えないのか〉。〈それは考えるよ、君がそれを発見したかも知れないという場合だ〉。〈実に、わたしが発見したかも知れないとは考えないのか〉。〈いや、その可能性は大いにあると思う。もし君がそれを捜し求めたとすれば〉。〈それなら、わたしが捜し求めたかも知れないとは考えないのか〉。〈もちろんそれは考える、もし君が、自分はそのことを知らないと思うことがあったとすれば〉」（プラトン『アルキピアデス1』109E2-7）。3) かの思慮ある乙女たちのともしびが、無知の深い闇にあって夜のうちに灯されたのも、これと同様の方法であった（マタイ25,1-13）。聖書はこの無知を「夜」という言葉で寓意的に表現している。思慮ある靈魂は、乙女たちのように清純で、自分たち自身が世の無知のただ中に置かれているということを知り、光を灯して理性を目覚めさせ（マタイ25,7）、闇を照らして無知を追い払い、真理を探求して師の顕現を待つのである。4) 「わたしは言った、〈大衆は、哲学者

たり得ない」と(プラトン『国家』494A3)。プラトンはこう語る。「バッコスの杖を持つ人は多い。だが真実のバッコスのしもべは少ない」(プラトン『ファイドン』69C8-9)。5) なぜなら「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」(マタイ22,14)からである。また使徒が言っているように「覚知がすべての人々に備わっているというわけではない」(1コリント8,7)のである。「われわれが道に外れた悪しき子どもから逃れられるように祈って欲しい。すべての人々に信仰があるわけではないのだから」(2テモテ3,2)。6) またストア派の哲学者クレアンテスの詩は、同様の事柄を次のように記している。

「評判を気にかけるべきではない。あなたがすぐにも
知者となることを望むのであれば。また、大衆の
無定見にして無恥なる評価を恐れてはならない。なぜなら
愚衆の判断には、思慮も正しさも美しさも伴っていないのだから。
むしろあなたは、実に僅かな人々にしかそれを見出さないだろう」

(『古期ストア哲学者断片集』559)。

18.1) また、かの喜劇作家が簡潔に語って教訓を垂れているのは、次の箇所である。

「大騒ぎして美を判断するのは恥ずべきこと」

(『アッティカ喜劇詩人断片集』作者不詳断片518)。

2) つまり彼らは、われわれに語り掛けるかの麗しき「知恵」の声を耳にしていたのであろう。「良識を欠く者たちとは時を過ぎすな。思慮に富む人たちとは、長くいるようにせよ」(シラ27,12)。3) またこうも言われている。「知恵ある人は知識を隠す」(箴言10,14)。なぜなら愚衆は真理の保証として論証を求め、信仰によって得られるだけの救いには満足しないからである。

4) 「実に、悪しき子どもは支配者たちに信を置かぬことだけを心に懸けている。
だがわれわれのムーサによる教えが命じているように、
腹わたに刻み込まれた言葉を知るがよい」

(エンパドクレス断片4テイルス・クランツ)。

つまりエンパドクレスはここで、不信を通すことによって、真実なることをも支配しようとするのが悪しき子どもの常だと言っているのである。5) しかるにわれわれの説が栄誉あり、信ずるに相応しいものであるということを、ギリシア人たちはむしろ、言葉に随き従う子どもを通し、言葉をより詳しく探求することによって知っていたことであろう。われわれは類似したものを、類似物

を通して学び取る。かのソロモンも「愚か者にはその愚かさに応じて返答せよ」（箴言 26.5）と述べている。6）それゆえ知恵を求める人々には、その知恵が自らの許にあることを理解させた上で、それぞれに固有のものが提示されるべきである。そうすれば彼らは、自分たち固有のものを通して、容易にかつ相應しい仕方で真理の信仰に到達することであろう。7）「わたしはすべての人々に対してすべてとなった。すべての人々を得るためである」（1 コリント 9,22）と語られている。なぜなら神的な恵みの雨は、正しき者にも不正な者にも注がれるからである（マタイ 5,45）。8）「神とはユダヤ人たちだけのものであろうか。異邦人たちのものでもないだろうか。そう、もし神が一人であるなら、それは異邦人のものでもあるはずだ」（ロ-マ 3,29 - 30）と、かの高貴な使徒（パウロ）は叫んでいる。

IV. ギリシア以外の著作家においても キリスト教の著作家においても、 神的な事柄は覆いを通じて伝えられるのが通例であること。

19.1) しかるに彼ら（ギリシア人たち）は善を正しく信じようとはせず、また救いのための覚知をも信じようとはしない。それ故われわれは、彼ら（の許に伝えられている）ものをわれわれに固有の財産と考える。なぜならすべては神のものであり、とりわけ美しきものごとにはわれわれの手を通してギリシア人の許へ到ったのであるから。それゆえわれわれは、それらのものごとが自然なかたちで語り掛けるとおりに扱ってゆくことにしたい（マルコ 4,33）。というのも幾多の愚衆はそれら思惟されるもの・正しきものを、真理にはかかってではなく、めいめいが感ずるままに判断するからである。2) 人の喜びとなるのは、自らと異なるものではなく、むしろ自らと似たものであろう。なぜなら盲目で耳も聞かえない者は、理解力も有さず、また観想を愛する靈魂の恐れを知らぬ鋭い視覚も持たない（プラトン『国家』 475E5）。その視覚とは救い主のみが付与しうるものだからである（プラトン『国家』 518C1 - 2）。その人は、秘儀への参入を許されず舞踊の心得を持たぬものの如く、未だに清められておらず汚れなき真理に値することのない、調和と秩序を欠いた質料的な者であって、なお神的な合唱隊の外に立たざるを得ない者なのである（プラトン『ファイドロス』 247A7 - 8）。3) というのもわれわれが霊的な事柄を判断するのは、霊的なものによるからである（1 コリント 2,13）。このようなわけで、古来隠蔽による方法が用いら

れた。これは真に神的な方法であり、真理の聖域のうちにおさめられた、われわれにとって最も必須な方法であって、極めて聖なる言葉なのである。これをエジプト人たちは彼らの間で「聖域」と呼ばれる事柄を通して、一方へブライ人たちは「垂れ幕」を通してほのめかしたのであった（*アブライ* 9,3）。4）そこには彼らのうちの聖化された者たち、すなわち神に献身した人々のみに進み行くことが許される。彼らは情動の欲求に抗して、神的なるもののみへの愛によって割礼を受けている（*コサ* 2,11）。というのも、浄らかなものに手を触れる行為は不浄なる者には許されていない。これにはプラトンも同意しているからである（プラトン『*ファイドン*』67B1－2）。20.1）ここから、預言あるいは神託は、謎をもって語られること、また神秘が誰彼となく人に明かされるものではなく、何らかの浄めあるいは戒めを以て示されるということが明らかとなった。

- 2) 「その頃のムーサは、利得に迷ったり、報償をもらって
手先の細工に勤しむことなど、絶えてなかったのだ。
また、声甘いテルプシコラの優しい調べの歌声が、
面に銀を装って売買されることもなかったのだ」

（ピソダロス『*イストミア祝勝歌*』2.5－8）。

3) さてエジプト人たちの間で教育を受けた人々は、まずエジプト人のすべての書物における方法、すなわち「表字法」と呼ばれるものを学んだ。次いで神聖書記官たちが用いた「神官文字」と呼ばれるものを、そして最後に完全な「象形文字法」と呼ばれるものを学んだのである。これは、ある部分ではいくつかの字母によって物事をその本来の意味において表現し、またある部分では象徴的に表現する方法である。象徴的な表現形式には次の三種がある。まず、模倣によって物事をその本来の意味において表現する方法。次に言わば比喩的に記す方法。そして何らかの謎めいた表現によって寓意的に表現する方法である。

4) 例えば、彼らは太陽を書こうとする際に円を描く。また月の形は三日月型にする。これは種の本来の意味における用法である。

5) また比喩的な用法として、彼らは、類縁性を通じてものごとを移し替えたり置き換えたりし、また完全に変化を設けたりする。あるいは多彩な方法でその形を変えて彫るという方法を採用することもある。21.1) 実に彼らはこのようにして、自分たちの王に対する賛辞を、神々を語る神話に託しつつ、浮き彫り細工を通して彫り込んだのであった。

- 2) さて、謎めいた表現による第三の例は次のようなものだと言える。まず

太陽以外の星に関しては、彼らはその蛇行する行路ゆえに、蛇の体になぞらえている。それに対して彼らは太陽をスカラベ（コガネムシ）にたとえる。それはこの虫が牛の糞を転がすため、顔の前に円周の形を描くからである。3) またこの生物は半年間を地上で、残りの半年を地下で過ごし、糞を球形にして地を肥沃にすると言われている。因みに雌のコガネムシというものは存在しないと言われる。

4) 言ってみれば、すべて神学をおこなった非ギリシア人およびギリシア人は、ものごとの諸原因を隠したままにしておき、真理を、謎めいた言葉、象徴、寓喩、隠喩、あるいはそういった類の表現によって提示したのである。例えばギリシア人における神託もそうであり、ここではピュティアのアポロンが「遠回しの」(Loxias) と呼ばれている。

22.1) 実にギリシア人の間で知者と呼ばれる人々の箴言も、短い表現でもって重要なものごとの本質を明示するものであった。例えば言うまでもなく「時間を惜しめ」といったような表現がこれにあたる。これは、この世の人生が短く、今の時間を無為に浪費すべきではないということを言い表すためでもあろうし、あるいはまた逆に、たとえあなたが長い年月を生きようとも、あなたの許に必要物が尽きることはないように日々の出費を節約せよということでもあろう。23.1) 同様に「汝自身を知れ」という句は多くのことを意味している。すなわちまず、あなたは死すべき身であり人間として生まれたのだということであろう。あるいは、名声や富ということは、人生における他の素晴らしさに比較すれば、何ら取るに足りない事柄であるということでもあろう。また逆に、あなたが富あり名声もつ者であっても、だからといって永続する美点で高められていることにはならないということかも知れない。あるいはまたここで知者は、あなたが何に生まれてきたのか、何の像であるのか、あなたの実体は何か、創られたあり方はどのようなものか、神的なものへの親縁性とは何かといった類のことを「知れ」と言っているのかも知れない。2) だが霊は、預言者イザヤを通してこうも語っている。「暗闇に置かれた宝、隠された宝をあなたに与える」(イザヤ45,3)。神の宝物と尽きることはない富(ルカ12,33)、それは捉えがたい知恵のことである。

24.1) だが彼らばかりではなく、預言者たちから神学を学んだ詩人たちは、隠された意味を用いて多くのことを象徴的に表現した。それは例えばオルフェウス、リノス、ムサイオス、ホメロスまたヘシオドス、それにこの類の賢人たちである。2) 彼らにあって「垂れ幕」とは、大衆に対する靈魂の詩的な導き

を意味する。夢や徴がすべて人間にとってわかりにくいのは、神が意地悪をしているからではなくて（なぜなら神がそのような邪心に駆られるなどと考えるのは許されないことゆえ）、ものごとを知りたいという心が謎の意味を探って沈潜し、真実の発見へと到るためである。3) このことについては、悲劇詩人ソフォクレスも確か次のように言っている。

「神とは、次のようなものだということをわたしは知っている。
すなわち、知者たちには神慮を常に謎めいた仕方語り、
愚者に対しては、無能な、言葉の足らぬ教師なのだ」

(ソフォクレス典拠不詳断片 704)。

ここで「無能な」という語は「つまらない」という語彙の代わりに用いられているのである。25.1) 実に、総じて聖書全体が、われわれに対して譬えをもって語られているということが『詩編』に記されている。「わたしの民よ、わたしの律法を聞き、わたしの口の言葉にあなたがたの耳を傾けよ。わたしは口を開いて譬えのうちに語り、いにしえからのことどもを告げ知らせよう」(詩編 77,1 - 2)。2) また、かの高貴な使徒はこれに類したことを次のように述べている。「われわれは信仰に成熟した人たちの間では知恵を語る。それは、この世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもないのだ。われわれが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわれわれに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めていたものである。この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しなかった。もし理解していたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったであろう」(1コリント 2,6 - 8)。3) とところで(ギリシアの)哲学者たちは、主の来臨のうちにこれを侮蔑する機会を持たなかった。であるから、使徒がユダヤ人の知恵者たちの迷妄を打破する可能性のみが残されることになった。4) そういうわけで、パウロはこう付け加えている。「われわれは〈目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された〉と記されている通りに告げ知らせているのだ。なぜならわれわれには、神が霊を通してそのことを明らかにされたからだ。霊は一切のことを、神の深みさえも究める」(1コリント 2,9 - 10)。5) すなわち彼は、神から与えられる聖なる霊、つまりキリストの知性(1コリント 2,16)の弟子たちが、霊的でありまた覚知に富むということを知っていたのである。「魂的な(psychikos)な人は神の霊に属する事柄を受け入れない。その人にとってそれは愚かなことだからである」(1コリント 2,14)。26.1) さらにかの使徒(パウロ)は、覚知の上での完成を識別する

ために、普遍的な信仰をある箇所では「礎石」と呼び（1コリト3,10－12）、またある箇所では「乳」と名付けている（1コリト3,2）。彼は次のように記している。「兄弟たちよ、わたしはあなたがたには、霊の人に対するように語ることはできず、肉の人、つまりキリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語った。わたしはあなたがたに乳を飲ませて、固い食物は与えなかった。まだ固い物を口にすることができなかったからだ。いや、今でもできない。相変わらず肉の人だからだ。お互いの間に妬みや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということにならないだろうか」（1コリト3,1－3）。2）これらは人間のうち罪人によってなされた選択である。しかるにそれらと交渉をもたない人々は、神的な事柄を思索し知識の食物に与かっている。3）「わたしは、神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように土台を据えた。そして、他の人がその上に金や銀、宝石の類で家を建てている」（1コリト3,10）。4）覚知に基づいたこれらの建物は、イエス・キリストへの信仰という土台の上に建てられるのに対して、「わら」また「木」「草」（1コリト3,12）とは異端による付加物を指す。「各々の仕事が進んでいくのであるかに関しては、火が吟味する」（1コリト3,13）。5）この覚知による建物をほのめかしつつ、彼は『ローマ人への手紙』でもこう記している。「私はあなたがたにぜひ会いたい。それは霊の賜物をいくらかでも分け与えて、あなたがたを力づけたいからである」（ロマ1,11）。すなわち、このような種々の賜物を書簡でははっきりと書き記すのは、使徒にとって不可能だったのである。

V. ピュタゴラスの象徴について。

27.1) さてピュタゴラス派による象徴は、ユダヤの哲学に極めて神秘的なあり方で依存している。

まず、かのサモスの人（ピュタゴラス）は「燕を家には迎え入れない」ことを勧めている（ムラッ『ピュタゴラス派の象徴』7）。すなわちこれは、多弁で饒舌、口数の多い人物は、自らが関わっている事柄に関して忍耐することも、受け容れることもできないため、仲間には受け入れるなどということである。2）聖書にもこう記されている。「燕も鳩も、野の雀も、自分たちの渡るときを知っている」（エレイヤ8,7）。つまり戯言とともに暮らしてはならないのである。3）またお喋りな「鳩」（trygon）とは恩知らずな中傷の多弁を意味するため、家から追い出されて当然である。

「あちこちから私のそばに来て、多弁を弄する (tryzein) のは
やめてくれ」(ホロス『イリアス』9.311).

4) 一方「燕」とは、パンディオンの逸話(ウイデ^イウス『変身物語』6.426以下)を想起させ、忌み嫌われるべきものである。それは一般に燕にことかけて語られる情動の故であり、テーレウスが身に被ったり、悪行に及んだりしたと言われていることは、この情動の故に起こったものだからである。実際燕は、調べもうるわしき蟬をも追い払う。ここからロゴスを迫害する者は、追放されるのが正当だということになる。5) 実際、

「オリュンポスを見下ろす、笏をお持ちのヘラにかけて、
わたしの舌には安全な金蔵がある」

(ハルク『ギリシア抒情詩人作品集』第4版作者不詳断片87)

とある詩は語っている。6) アISKYロスもこう歌っている。

「しかし、わたしにも舌の上にはその鍵、守り手がある」

(AISKYロス, 典拠不詳断片316)。

7) またピュタゴラスはこう命じている。「壺を火から取り上げたならば、灰にその跡を残さず、かき消すように」、そして「寝台から起き上がった者は、掛け布団をはらっておくように」(ムラッ『ピュタゴラス派の象徴』10,33)。8) ここで彼がほのめかしているのは、傲岸を抹殺すべきだということだけではなく、怒りの跡形さえも残してはならないということである。というのも、いったん怒りの爆発が止んだならば、感情を建て直し、悪の記憶をもすべて拭い去るべきだからである。9) 聖書にはこう記されている。「太陽が沈むまで怒ったままでいてはならない」(エフェソ4,26)。そして「(隣人のものを) 欲すること (epithymein) があってはならない」(出エジプト20,17)と命じたモーセは、悪の記憶をすべて拭い去ったのである。10) なぜなら激昂 (thymos) とは、平時は温厚な靈魂が持つ欲求 (epithymia) の衝動であると考えられるからである。というのも激昂は、非理性的に復讐へと駆り立てられるものだからである。28.1) 同様に、寝台が揺すられることが推奨される。これは夢精や白昼夢を避け、夜間の快樂に思いを致すことがないようにするためである。2) しかし次の言葉はおそらく、闇多き幻想を真理の光と注ぎ合わせねばならないということを寓意的に表現したものであろう。ダビデは述べる、「怒って、罪を離れよ」(詩編4,5)。すなわちここで彼は、幻想に妥協することを戒め、怒りを自らのものとすることで、業に訴えることを避けるべきであると教えているのである。

3) また「陸地の上では航海しないこと」（ムラッハ『ピュタゴラス派の象徴』68）という成句はピュタゴラス的な象徴表現である。これは、税金やそれに類似した契約金は、混乱をもたらす不確定なものであるがゆえに拒むべきであるということを示しているのである。ロゴスが「徴税人は救われるのが困難である」（マタイ19,23）と言っているのはこのためである。

4) またピュタゴラスは「指輪をはめたり、指輪に神々の像を彫りつけたりしないように」と勧告している（ムラッハ『ピュタゴラス派の象徴』27, 28）。これはモーセがはるか以前に、像や複製物はどんなものであれ、彫ったり溶かしたり、型にはめたり書いたりして作ってはならない（出エジプト20,4；レビ26,1；申命4,15－17）と律法にはっきりと定めたのと同様である。これは、われわれが感覚しうるものに愛着を感じることなく、思惟されるものを探究するよにとの意味である。5) なぜなら、われわれが神性を難なく見ることに慣れてしまうと、神性の尊厳はおとしめられることになり、思惟される実体を、質料を通して畏敬するのは、感覚によりその実体に対して不敬をはたらくことになるからである。6) それ故、エジプトの祭司のうちで最も知恵ある人々は、アテナの座を戸外に置くことに決めた。これは、ヘブライ人たちが像を置かない神殿を建てたのと同様である。また、神を崇めるために星辰を含む天の模像を造り、これを崇敬する人々もある。29.1) 聖書はこう述べている。「(神は言った)、人間をわれわれの像として、またわれわれの似姿として創ろう」(創世1,26)。わたしはここで、ピュタゴラス派のエウリュソスによる同様の趣旨の言葉を引くのが適当だと考える。彼は『運命について』の中で、造物主が自らを範型として用い、人間を創ったと述べたあとでこう付け加えている。2) 「その覆いは他の部分に類似しており、言わば同一の質料から成ってはいるが、より優れた術者によって成し遂げられたものの如くである。その術者とは自らを範型として用い、それを完成したのである」(イウリュッス断片1ムラッハ)。3) また総じてピュタゴラスおよびその門下にある人々は、プラトンとならび、他の哲学者たちにまさってかの律法者と関わりを持ったようである。これはその教説から推測しうることである。4) 彼らは、誤らないお告げの言葉に従うことにより(プラトン『法律』792D3)、神の助けに拠って預言者たちの声に一致した。そして真理を部分的にあるいはある観点において捉えた。これは彼らが明確な名辞、事物の明示に相応しい名称をもって真理を崇敬し、真理と親しく関わることによる照らしを受け取っていたからである。5) こういうわけでギリシアの哲学は、ろうそくの芯から発する光に似ている。この光は人間が

「太陽から巧みに盗んだ光」

『アッティカ喜劇詩人断片集』 作者不詳断片 395)

を灯したものだからである。6) そしてひとたびロゴスが告げ知らされると、この聖なる光がすべてを輝き出させることとなった(ヨハネ1,9)。つまり、この盗んだ光は夜のあいだ家の中でのみ有効であったが、昼には火が輝きを放つことになり、夜と言えども完全に、思惟界を照らすかくも強大な太陽によって照らされることとなったのである。

30.1) またピュタゴラスは、モーセによって語られた正義に関する教えを要約し「軛を越えてはならない」と述べている(ムラッ『ピュタゴラス派の象徴』2)。すなわちその意味は、分配に関して等分を越してはならず、正義を重んじよということであって、

- 2) 「正義とは常に、友と友を、
町と町を、友邦と友邦を固く結んでくれる。
正義は人間にとって自然の掟、正義に関して劣る者はいつも
強い者を敵と見なし、憎しみの日々を始めるのである」

(エウリピデス『フェニキの女たち』536 - 540)。

と、詩人(エウリピデス)はその詩的優美さをもって語っている。3) それゆえ主はこう語る。「わたしの軛を負うがよい。わたしの軛は負いやしく、軽いからである」(マタイ11,29;30)。そして第一の位をめぐる争う弟子たちに、単純さと平等を教え、彼らが子供たちのようになるべきことを諭して聞かせたのである。4) 同様にかの使徒もまた「キリストにあっては、奴隷も自由人も、ギリシア人もユダヤ人もない」(ガラテヤ3,28)と記している。なぜならキリストにおける新しき創造は、争いを好まず、貪欲さもなく、正しき平等だからである(2コリント5,17;ガラテヤ6,15)。5) というのも「妬みは神の舞踏隊からは離れて立つ」(プラトン『ファイドロス』247A7-8)からであり、嫉みや苦悩も同様だからである。このために、秘儀の手ほどきを受けた人々は「心を食べる」ことを禁ずる(ムラッ『ピュタゴラス派の象徴』4)。これは、自らの意に反して生じた事柄のために、靈魂を苛んだり蝕んだりして憂鬱や苦痛に浸ってはならないということを教えているのである。実に、かのホメロスが「ただ一人、自らの心を苛みながらさまよった」(ホメロス『イリアス』6,202)と記している男(ベレロフォン)は実に哀れな人であった。

31.1) また福音書と使徒たちは、すべての預言者たちと同じく、二つの道を提示している。すなわち彼らは一方を「狭く細い」道(マタイ7,13)、掟と禁令

によって覆われているものと呼び、もう一方を逆に「滅びに到る、平坦で広い」道、(マタイ7,13)、快樂や怒りによって妨げられることのないものと呼ぶのである。これは「幸いな者、不敬な者の計らいのうちに歩まず、罪人たちの道に立たぬ者」(詩編1,1)と言われている事柄である。2) また、ケオスのプロディコスをめぐる有徳と悪徳の物語(ケソフン『ソクラテスの思い出』1,21-34)もこの意味の連関において捉えられる。ピュタゴラスもまた、「大通りを歩む」ことを躊躇なく禁じている(ムラッハ『ピュタゴラス派の象徴』14)。つまりこれは、根拠もなく確かではない大衆の見解に盲従してはならないということを教えているわけである。

3) またアリストクリトスは、その『ヘラクレオドロスに宛てた反駁の書』の第一巻において、およそ次のような内容の書簡に言及している。「スキュタイの王アトイアスよりビュザンティオンの民衆に、わたしの収益をけなすことはしないで頂きたい。わたしの馬があなたがたの水を飲むことのないように」(アリストクリトス断片4)。つまりこの非ギリシア人は、彼らに対して遠からずもたらされる戦争を、象徴的に表現してみせたのである。4) 同様にかの詩人エウフォリオンもまた、ネストルに次のように語らせている。

「われわれはまだ、シモエイス河でアカイアの馬どもに
水をやったことはない」(カキリケのエウフォリオン断片75マイネ)。

5) それ故にエジプト人も、神に関する教えが謎に満ちたものであり、明瞭ではないものだとすることを表すために、神殿の前にスフィンクスの像を建てた。これはおそらく、神的なものを愛し恐れねばならないということをも示すためであろう。すなわち、敬虔なる人々には優しく慈悲深いものであるから愛さねばならず、不敬なる者どもに対しては容赦なく正しきものであるが故に恐れねばならないわけである。つまりスフィンクスは獣と人間両方の像を寓意的に表しているのである。

VI. ユダヤ人の幕屋とその装飾品における神秘的な意味。

32.1) 謎めいた表現をもって語られている律法あるいは預言の書を、一々考察しては冗長になろう。というのも、ほとんど聖書全体が、このような神託に満ちているからである。そこでわたしとしては、この主題を明示する上で、理性を備えた人に対してはいくつかの例を提示すれば十分であろうと考える。2) 隠された意味を象徴的に表すものとしては、例えば次のものが挙げ

られる。まず、ヘブライ人の間では、旧神殿をめぐる七つの囲壁が、ある特別な意味に関連して語られる。次に（祭司の）足まで届く衣（出エジプト28,4-5）に付けられる装飾品は、天空の現象に関連した様々な象徴を通して、天から発して大地に到る契約を示す（知恵18,24）。3）（神殿・幕屋の）覆い幕や垂れ幕は、水仙色や紫色、あるいは芥子色また亜麻色に彩られるが（出エジプト26,31；26,36）、これは、それら諸要素の本性が神の啓示を内包しているということを寓意的に表したものである。すなわち紫貝は水から、亜麻は大地から取られる。また水仙は暗い色をしているが故に大気になぞらえられ、同様に芥子は炎にたとえられるわけである。33.1）覆い幕と垂れ幕の中間部は祭司たちが入ることを許されている場所であるが（出エジプト30,1-10）、ここはこの宇宙の中央に位置する地球であるとして、その象徴のために香壇が置かれ、そこから芳香が立ち昇る。2）またこの場所は、内側の掛け幕すなわちその中にはただ大祭司のみが定められた日に入ることを許されている場所（出エジプト26,36-37）、どんなヘブライ人でも入れるその外側の前庭との中間部をも形成している。それ故この場所は天と地のちょうど中間であると言われている。また他に、ここは思惟界と感覚界の中央部を象徴すると理解する人々もある。3）かくして、世俗の不信仰を遮る覆い幕が五本の柱の前に張られ、前庭の中にいる人々を遮断する働きをする。4）同様に、実に神秘的な仕方ですつこのパンが主の手によって割かれ、主の言葉に耳を傾けていた群衆のために増やされたのであった（ヨネ6,9）。感覚的な事柄を唯一の存在物として、これに専心する者は多い。5）プラトンも言っている。「誰も外道の者は聞いていないだろうか、よくあたりを見て、気をつけて欲しい。この人々は、自分たちの手でしっかりとつかめるものでなければ、何一つだってあるとは思わず、作用であろうが、生成であろうが、目に見えないものは一切、有の部類に入れることを肯なわない連中なのだから」（プラトン『ティテス』155E4-8）。6）つまり、この類の者どもとは五感のみに専心する人々なのである。けれども神に関する思惟は、聴覚やその類の感覚には入りえないものである。34.1）ここから子は父の顔と言われ（詩編24,6）、五感のために肉をまとった者となり、ロゴスは父の特質の告げ手となった。2）かの美しき使徒は「もしわれわれが霊に生きているのであれば、霊に従って歩みを進めよう」（ガラテヤ5,25）、あるいは「われわれは見せかけではなく、信仰によって歩む」（2コリント5,7）と語っている。3）かくして祭司の職務は覆い幕の内側に隠されることとなり、（覆い幕は）勤めに専念する祭司たちを、外部の者から完全に遮断することになる。4）次に、

至聖なる内陣に到る通路の垂れ幕に移ろう。そこには四本の柱があり（出エジプト27,16）、旧約の聖なる数「4」を表すものとなっている。5）またここには神聖なる四文字の名があり、これは内陣に入る人のみか身につけるものである（出エジプト28,36－38）。それは「ヤハウエ」と書かれた文字であり、「今在りまたこれからも在る者」という意味である（出エジプト3,14）。6）一方ギリシア語においても、神（θεός）は四文字から成っている。7）かくして思惟界に、諸々の情動を治める主となった方のみが到来し、語られえないことに対する覚知のうちに身を投じて、声をもって告げうるすべての名を越えた者へとその身を高めたのであった（フィリ2,9）。8）さらに、燭台が香壇の南側に置かれる（出エジプト26,35）。この燭台でもって、南天球に軌道を有する七つの星の運動が明らかにされているのであろう。9）というのも燭台の枝の両側に三本ずつ枝が生え、それらの枝の上にも蠟燭が置かれているからである。つまり太陽が言わば燭台のように他の惑星の中央に位置し、その上にある星また下にある星に対して、言わば神的な音楽に従ってその光を分かち与えているのである（プラトン『国家』617B6-8. 35.1）けれどもこの金の燭台は、また別の意味でキリストのしるしをほめかした表現となる。それは単にその形状によるばかりではない。むしろ、初めに創られた事物の仕えを通してキリストに信と希望を置き、また目を注ぐ人々に対しては「多くの形で、また多くの仕方で」（イブライ1,1）光が注がれることの故である。2）つまり「エッサイの根から」（イブライ11,1－2）萌え出た杖には「7つの霊」（黙示5,6）が留まり、それらの霊は主の「7つの目」（黙示5,6；ゼカリヤ4,10）であると言われるからである。3）また燭台の北側には机が置かれ、その上にはパンが並べられる（民数4,7）。なぜなら北から吹く風が最も滋養を運ぶものだからである。4）これは、言わば一つの体（イフェソ4,4）、一つの集いへと息吹を合わせる教会の座を示しているものなのかも知れない。5）さて聖なる櫃をめぐる述べられている事柄は、大衆からは隠され閉ざされた思惟界のことどもを告げるものである。6）実にかの純金でできた贖いの座（出エジプト25,17）に関しては、（それを見張るケルビムの）各々が六つの翼を持っている（イブライ6,2）。それはある人々が考えるように二つの熊（大熊座、小熊座）を表したものであるのか、あるいはむしろ二つの半球を表しているものであろう。一方「ケルビム」という名は大いなる覚知ということを表そうとしたものであろう。7）ところでこのケルビムは、一對の二体で計12の翼を持っている。それ故、黄道帯の円周およびそれに従って運行される時間でもって、感覚界が示されているのであろう。36.1)

次の悲劇が自然学的な叙述をしているのも、上記のことに関してであろうと思われる。

「時は疲れを知らず、絶え間ない流れにあふれんばかりに満たされて、おのが子を自ら生みつつ歩んで行く。二頭の熊（の星座）は翼をすばやく羽ばたかせながら、アトラスの軸を見張っている」

（クリティアス『ペイリトリス』断片18ディールス）。

2) ここで「アトラス」とは、もしかすると苦難を被ることのない軸か、もしくはさまようことのない球のことかも知れないが、おそらくは動くことのない永遠性だと考えた方がよいだろう。3) ところで私としては「櫃」（kibotos）はヘブライ語でthebothaと呼ばれることから、また別の意味を表していると解した方がよいと考える。まず（この語は）「唯一なるものが、すべての場所の各々を治めている」意味に解される。ここから「8日目の世界」（ogdoas）あるいは思惟界が、もしくは万物を抱擁する形なく見えもしない神が明らかにされるのかという問題に関しては、いまここで語ることは控えよう。ただ櫃とは、その栄光を讃える諸々の霊を伴った休らいを表しており（イザヤ6,3）、その霊を「ケルビム」という語が表しているのだとだけ述べておこう。4) というのも、彫った偶像は作らないようにと勧告しているモーセが（出エジプト20,4）、彼自身（ケルビムという形で）聖なるものの像を作ることなど決してなかったであろうから。また天には、感覚で捉えられるこのような複雑な作りをした動物など存在しないであろうから。むしろ（ケルビムの）顔とは理性を伴った靈魂の象徴であろうし、またその翼とは、（神の）左手および右手に立つ諸々の力が（列王上22,19）、天の国でなすその勤めと働きの象徴であろう。またその声とは、止むことのない観想における感謝に満ちた讃歌であろう。

37.1)（ケルビムに関して）神秘的な解釈を挙げるのは以上で充分であろう。次に、足まで届く大祭司の衣は感覚界の象徴であり、七つの惑星は五つの宝石と二つの榴石（ラピス・ラズリ）（出エジプト28,17－20）によって象徴的に表現されている。榴石が二つなのは、クロノス（土星）とセレーネー（月）だからに他ならない。なぜなら前者は正午を表し、湿っており土質で重いのに対して、後者は空気のように軽いからである。それ故、月がある人々からアルテミスと呼ばれることもある。これはアルテミスが「大気をよぎる者」（aerotomos）であり、大気は暗いものだからである。2) この世のものの誕生のために協働する天使、すなわち神的な摂理によって惑星の任に与かる天使たちは、胸と肩に座しているとモーセは記している（出エジプト28,12；28,17－20）。彼らに

よって創造の業、すなわち第一の7日間の業が為される。因みに胸とは心と靈魂の住まいである。3) また別の解釈に基づけば、多彩な宝石は救いのあり方の多様性であるのかも知れない。すなわちそのあり方の中で、一部は高次の場所であり、他の一部は救われる肉体全体のうち、より低次の部分にあるわけである。4) また、上着の裾から離して付ける360の鈴（出エジプト28,33-34）は、一年間すなわち「主の恵みの年」（イザヤ61,2；ルカ4,19）を表し、救い主の最も偉大なる顕現を告知知らせ教えるものである。5) さらに、高く尖った金の帽子（出エジプト28,36-37）は、主の王的な権威を表している。それは救い主が「教会の頭である」（エペソ5,23）ことから理解される。38.1) 頭の上にかぶせられる帽子は、最も力ある権威の徴であろう。われわれは他の箇所でも、「キリストの頭は神であり」（1コリント11,3）、「われわれの主であるイエス・キリストの父である」（ローマ15,6；2コリント11,31）と語られているのを耳にする。2) さて胸当ては、業の象徴であるエフォド（出エジプト28,28）と、ロゴスをほのめかすロギオン（出エジプト28,29）からできているが、これはロゴスによって成立した天の似像である。そして天とは、万物の頭であるキリストの下にあり（1コリント11,3）、同一の規則に従って同じように動くのである。3) またエフォドの上の輝くエメラルド石（出エジプト28,9）は、自然の協働者、すなわち太陽と月とを表している。4) 思うに、ここで肩とは腕の始まりである。そして胸の上に四列に配された12の石（出エジプト28,17-20）は、一年間の四季に従った12宮の周期を描いたものであろう。5) あるいはむしろ、主の頭の許に律法と預言者たちが基づかねばならないということを表しているのかも知れない。その預言者たちによって、新旧各々の契約の許にある正しき人々が告げられているわけである。というのもわれわれは、使徒たちは預言者でありまた正しき人々でもあると言いうるだろうからである。なぜなら、すべてを通じて一にして同じ聖霊が働いているからである（1コリント12,11）。6) さて、ちょうど主が世のすべてのはるか上方にいる、あるいはむしろ思惟されるものかなたにあるのと同じように、額当てに彫られた名（出エジプト28,36）は「すべての支配・権威の上にある」（エペソ1,21）のに相応しいものとされた。その名は、刻み込まれた掟を通し、また主の感覚しうる臨在によって記されたものである。7) またこれは神の名とも呼ばれる。なぜなら子は父の善性に目を注ぎながら働きをなすからである（ヨハネ5,19）。かくして、万物の始源である神は救い主と呼ばれる（コサイ1,18）。この始源は、最初のものまた世に先立って在るものとして「目に見えない神」から発し、神に像どって創ら

れたものであり、自らのあとにできたものすべてを形作ったからである（コリ
 1,15 - 16）。39.1) なかでも、預言の胸当て（ロギオン）（出エジプト28,29 -
 30）はロゴスの声にあわせて叫び、来たるべき裁きを告げ知らせる預言を明
 らかにしている。なぜなら預言すると同時に裁き、各々のものを識別するのは
 同一のロゴスだからである。2) また足まで届く衣は、肉による経綸（オイコ
 ノミア）を預言するものと言われる。この経綸によって、かのロゴスがより
 緊密な形で世に顕われたというわけである。3) つづいて（レビ16,4）、大祭司
 は聖化された衣を脱ぐ（ちなみに世と世にある被造物は、創られたものを「善
 きもの」と認める方（創世1,31）によって聖化されている）。彼はさらに体を
 水で浄め、言わば聖にして聖なる別の衣、身に付けて神殿の内陣に入るに相
 応しい衣を改めてまとう（レビ16,4）。4) わたしには、以上のことは次のことを
 表しているように思われる。すなわちレビ人は、言わば他の祭司たちの長と
 して、覚知を経た者でもあるということである。つまり他の祭司たちは水による
 浄めを経て信仰のみを身にまとい、自分だけの住まいを受け継ぐ。これに対
 して、レビ人は感覚される事物から思惟される事物を識別し、他の祭司たちを凌
 駕して思惟界の通りみちへと急ぐ。彼はこの世の事物からの浄めを、もはや水
 によって体験することはない。その方法はかつて、彼がレビ族へと定められた
 際の浄めであった（民数8,7）。いまや彼は覚知の言葉によって浄めを経たの
 である。40.1) 彼はこうして、心のすべてにおいて浄らかな者（マタイ5,8）とな
 り、自らの生をもその極みまで完全な形で打ち樹てている。そして一祭司の背
 丈を遙かに越えて成長し、言葉と生活において全く汚れなきものとなり、栄光
 の輝きを身にまとい、かの霊的で完全な人のみが手にしうる語り得ない遺産を
 受け継ぐ。それは「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもし
 なかったもの」（1コリント2,9）である。かくして彼は子また友となり、顔と顔を
 合わせた観想に満ち溢れる（1コリント13,12）。けれどもここで、ロゴスそのもの
 に耳を傾ける以上のことはあるまい。ロゴスは聖書を通してさらに豊かな意味
 を授けるからである。2) 聖書にはこう語られている。「彼（アアロン）は、
 至聖所に入るときに身に付けていた亜麻布の衣を脱ぎ、そこに置くであろう。
 そして自らの体をかの聖なる場所で洗い、自分の衣を身に付けるであろう」（レ
 ビ16,23 - 24）。3) 思うに主は、感覚で捉えられる者に身をへりくだらせた
 ときに、言わばその衣を脱ぎまた身に付けたと言えよう。であるから主を通し
 て信仰に到った者も同様に、言わば自らの衣を脱ぎ、使徒も述べているような
 「聖化された衣」（2コリント5,2 - 4；エフェソ4,22 - 24）を改めて身に付けるので

ある。4) こうして、大祭司たちは主の似像として、聖化された部族から選ばれる。彼らは、天の国にも預言職にも最も相応しい人々として選り抜かれ、塗油を受けるのである（サムエル上 16,13 ほか）。

Ⅶ. エジプト人も同様に、聖なる事柄を象徴と謎を通して表現すること。

41.1) さてエジプト人たちも、自分たちの許に伝わる神秘を、新参の者に伝えることはせず、神的な事柄に関する知識を不浄な者どもに示すこともなく、実にただ王の座に進み行くことになっている人々、また祭司の中でも訓導・教育・血筋によって最も傑出していると判断された人々にのみ、示したのであった。

2) またエジプト人たちの謎めいた表現も、その隠蔽による方法という点で、ヘブライ人たちのものに類似している。エジプト人たちは太陽を表すのに、ある者は小舟を、またある者はワニを用いる。3) 彼らが意味するところは、太陽が甘美で湿った大気を通して歩みを進め、時を産むということであり、また別の祭司的な伝統によれば、ワニはその時を象徴的に表現するとされるのである。4) 実際、エジプトの町ディオスポリスにおいても「ピュロン」と呼ばれる神殿には様々な象徴文字が彫られている。例えば子供は誕生の、老人は滅びの象徴であり、また鷹は神の、魚は憎しみの、またワニはやや異なった意味において恥知らずの象徴であるとされる。42.1) 総じて象徴表現が表していることは、すべて「おお生まれ来たる者たちよ、また死した者たちよ、神は高慢を厭われる」ということであろうと思われる。2) さて耳や眼に関しては、高価な素材からそれを創る人々は、できたものを神殿に献げ、神々に奉納するという。これは言うまでもなく、神が万物を目にし耳にしているということをはのめかすものであろう。3) これに加えて、彼らにとって獅子は、強さと力の象徴である。同じように、牛は大地そのものや農耕や食糧などの象徴であり、馬は勇気や自由を表し、スフィンクスは、全身が獅子、顔は人間の顔を有しているところから、理解を伴った力を意味する。4) 同様に人間は、理解、記憶、武勇、技術をほのめかすものとして、彼らの神殿に彫り込まれている。43.1) もう一つ別の例を挙げよう。彼らの間で「神々の行列」と呼ばれているものにおいて、彼らは金でできた像を運ぶ。その二つは犬、一つは鷹、一つは朱鷺であり、彼らはこの四つの像の図像が四つの文字を表すものと見なしているの

ある。2) 実に、ここで犬とは二つの半球、すなわち巡り回るものと見守るものの象徴的表現であり、一方鷹とは太陽の比喻である。なぜなら太陽は炎を持ち焼き焦がす力を秘めたものだからである。彼らは悪疫をもたらす病をも太陽に帰す。また朱鷺は月の象徴であり、彼らはその黒い羽毛を月の影の部分に、白い羽毛を輝く部分になぞらえる。3) また、二匹の犬によって二本の回帰線が表されていると解する人々もいる。彼らによれば、犬は南と北に位置する太陽の行路を見守り、門番をするという。そして鷹は高く灼熱の赤道を表し、朱鷺は黄道を意味するとされる。というのもエジプト人にとって、あらゆる動物のなかでとりわけ朱鷺が、数字の観念や尺度の始まりを提供するものと考えられ、同様に円周の始まりをなすのが黄道だとされているからである。

Ⅷ. キリスト教著作家のみならず、様々な著作家、特に詩人 および哲学者たちにあっても、聖なる事柄は象徴的に 表現してきたこと。

44.1) だが今述べた事柄は、エジプト人の中で最も博識な人々に限られたことではなく、哲学に駆り立てられた他の非ギリシア人たちもまた、象徴的な表現を志向したのであった。

2) 実に、シリア人のフェレキュデスが伝えるところに拠れば、スキュタイ人の王であるイダントゥラスは、イストロス川を渡ろうとしているダレイオス王に対して戦闘の威嚇をなすべく、文書の代わりに鼠、蛙、鳥、矢、鋤を象徴として送ったと言われている。3) このことづけに対し、当然のことながら敵陣は当惑した。彼らに対して千人隊長のオロントパタスは、彼らが主権を譲り渡そうとしていると主張した。彼の述べるところによれば、鼠は住居を、蛙は水を、鳥は空気を、そして矢は武具を、鋤は土地を表しているという。4) 一方クセノドレスは別の解釈を唱えた。すなわち彼は「われわれは、もし鳥のように飛ぶのでなければ、あるいは鼠のように地下に、また蛙のように水中に潜るのでなければ、彼らスキュタイ人の矢を逃れることはできないであろう。なぜならわれわれはかの土地を治めてはいないのだから」(フェレキュデス断片 113, 『ギリシア史家断片集』) と述べた。

5) またスキュタイの人アナカルシスは、左手で陰部を、右手で口を抑えて床に就いたと言われている。これは、人間は上の二つを制せねばならないが、快樂よりも舌を制する方が重要であるということをはのめかしたものであろう

（プルタルコス『倫理論集』505A）。

45.1) けれどもわれわれは、ギリシア人たちが大いに隠蔽の方法を用いているということを提示しうる。それ故ギリシア以外の人々のことは以上で充分としたい。

2) まずピュタゴラス派のアンドロキュデスは、『エフェシア』という名で人口に膾炙している呪文が象徴的な意味を含んでいると述べている。例えばまず Askios とは闇を表すものである。なぜならこの語は「陰 skia を持たない」という意味だからである。また光は Kataskion という名で呼ばれる。なぜなら光は陰を照らすものだからである。さらに Lix とは古名で大地を表し、Tetrax とは四季という意味から一年を表す。また Damnameus とは征服 damazein するもの故に太陽を表し、Aisia とは真なる声という意味である。3) であるから象徴とは、神的なものがいかに配されているかを表すものである。例えば闇は光に対置され、太陽は一年間に対して、また大地は自然のあらゆる誕生に対して設けられているのである（アンドロキュデス断片 2 ヲルグ）。

4) また文法家ディオニュシオス・トラクスも『有用な表現について』の中で、車輪の象徴に関しておよそ次のように述べている。「多くの人々は、行為を表すのに成句を用いるばかりではなく、象徴をも用いた。成句の例としては、例えばデルフォイの神託の場合であって、〈度を過ぎずな〉あるいは〈汝自身を知れ〉、その他この類のものがそうである。一方象徴の例としては、エジプト人の許から引かれてきて神々の聖域の中で廻されている車輪や、礼拝する人々に与えられる若枝などが挙げられる」（ディオニュシオス・トラクス断片 2 シュミット）。5) （まず若枝については）トラキアの人オルフェウスもこう語っている。

「地上で人間の心を占める若枝の業に関して言えば、
人の心に定まった天命を授けるものは、そのうち何一つとしてなく、
すべてはぐるりと回転し、一箇所に留まる定めではない。
各々の枝は始めから、等しい分だけの走路を持っている」

（ケルン『オルフェウス派断片集』227）。

6) ここで若枝とは、初期の食物の象徴であるのかも知れない。あるいは大衆が「果樹は総じて長い時間をかけて枝を出しさらに大きく生長するが、人間自身に許されているのはごく僅かな生の期間に過ぎず、それ故に人々は若枝が与えられることを望む」ということを知るとの意図から引かれているのかも知れない。けれども、おそらくまた人々が次のことをも知るとの意図もあろう。それは「若枝が燃やされるように、人間もこの世での生を速やかに

去り、火の業に同化するように」ということである。

46.1) 象徴的な表現のジャンルは、多くの事柄に関して極めて有益である。つまりこのジャンルは、正統的の神学、敬神、理解の証明、簡潔な表現の鍛練、そして知恵の実証に力を発揮する。2) 文法家ディデュモスは語っている。「象徴的な措辞を巧みに用いること、およびその措辞によって表されていることを知るのは知者の業」(ディデュモス『饗宴』断片9シムット)。

3) 実に、子供たちに施される(覆いに満ちた)教えは、四原因に関する表現を含んでいる。4) フリュギア人は、まず水のことをベデュ (bedy) と呼ぶと言われている。それはオルフェウスが

「ニンフたちのベデュが輝く水となって滴り落ちる」

(ケルン『オルフェウス派断片集』219)

と言っているのと同じである。5) さらに祭司ディオンのように思われる。「ベデュを取って両手に流し、腸トに転じなさい」と。6) また喜劇作家フィリュッリオスは、ベデュが生命を与える大気であるということを知っていた。それは次のような表現から知られる。

「救いのベデュを吸い込むようにわたしは祈る。

このベデュは、健康のために最も力をもつ。つまり、

浄らかで濁りのないベデュを吸い込むことが」(フィリュッリオス断片20)。

47.1) これと同じ見解なのが、キュジコスの人ネアンテスである。彼は、マケドニアの祭司たちが祈りの際に自らと子供たちのために恵み豊かなベデュに祈り求めるが、彼らはこのベデュを大気のことだと理解していると述べる(ネアンテス断片27)。2) 一方「寄せ波」(zaps) という語に関して、ある人々は無学ゆえに「沸騰」(zesis) から「火」と解釈する。けれどもここでは、「海」が意味されているのである。それはエウフォリオンが『テオドリダスに宛てた返書』の中でこう言っているのと同様である。

「岩肌に砕け散る寄せ波 (zaps) は、

船に破滅をもたらす」(エウフォリオン断片3パウエル)。

3) ディオニュシオス・イアンボスも同様にこう歌っている。

「海が猛り狂うとき、唸りを上げる寄せ波が響きを轟かす」

(デモンター『ギリシア抒情詩人断片集』II,p.91)。

4) 同様に新世代の喜劇作家クラティノスもこう言っている。

「寄せ波が小エビと小魚を岸边に運んでくる」(小クラティノス断片13)。

5) ロドス島のシンミアスはこう言っている。

「イグネテスとテルキネスの母は、潮の寄せ波」(シミアス断片 11).

6) さて大地 (chthōn) とは地面が広い範囲に広がったものを言う。また「撥」(ばち) (plēktron) とは、ある人々によれば軸 (polon) を指し、また別の人々によればすべてを創り (plēssōn), 誕生また生成へと導き、あるいは万物を満たす (plērōtikos) 大気を指していると言われる。48.1) だがこれらの人々は、哲学者クレアンテスの著作を読んでいない。彼は太陽をはっきりと「撥」(ばち) (plēktron) と呼んでいるのである(クレアンテス断片 502)。日の出のとき太陽は、言わば地球を打つように輝きを維持し、調和のとれた道筋に光を導く。太陽から転じて、彼は他の星をも表しているのである。2) 一方スフィンクス (sphinx) とは、万物の絆でもなければ詩人アラトスの語る宇宙の回転(アラトス『星辰譜』22-24)でもなく、おそらくはむしろ、宇宙を貫き世を包含する霊的な力であろう(クレシッポス自然学断片 447)。3) 霊気 (aithēr) とは万物を包容しつつなぎ合わせる (sphingein) ものだと理解する方がよかろう。それはエンペドクレスが述べている通りである。

「さあ、あなたに語って聞かせよう、
まずすべての始まりである太陽を。
また、そこから生まれ来たったもの、
いま目に見えるもののすべてを。
大地、波多き海原、湿った大気、
はたまたティタン、あるいは万物を環状に
つなぎ合わせる (sphingōn) 霊気 (aithēr) を」

(エンペドクレス断片 38 ティーリス・クラツ)。

4) 一方ケルキュラのアポドロスは、これらの詩行が古い師ブランコスによって語られ、それは彼がミレソスの人々を疫病から浄めたときのことであるとする。ブランコスは民衆に対して月桂樹の枝を蒔きながら、讃歌の音頭を取ってこう歌ったと言われる。

「寿ぐがよい、おお子らよ、かなたより働きかける男神、女神を」。

5) 一方民衆は、リュラに合わせて次のように歌ったとされる。「ベデュ (bedy), ザプス (zaps), クトーム (chthōm), プレクトロン (plēktron), スフィンクス (sphinx), クナクスズビィク (knaxzbich), テュプテース (thyptēs), フレグモ (phlegmo), ドロープス (drōps)」。この逸話に関しては、カリマコスもそのイアンボス詩の中で言及している(カリマコス断片 194.28 Φαίφαρ)。6) さて、クナクスズビィクとは「病気」を意味する派生語で、「引っ

搔く」(knaein)と「疲弊させる」(diaphtheirein)から成っている。またテュプサイとは「雷電によって燃やす」という意味であろう。

7) 一方、悲劇詩人のテスピスは、次のような言葉でもって、今の表現(クナクスズビィク)が別の意味を有していることを示している。

「さあ、あなたのために白い乳(knaxzbich)を注ごう、
淡黄色の乳母山羊からしぼった乳を。
二本の角持つパーンよ、さああなたのために、
固まったチーズ(thyptēs)を赤い蜜に混ぜて、
あなたの聖なる祭壇の許に置こう。
さあ、あなたのために
ディオニュソスの燃える血(phlegmo)を注ごう」

(テスピス不詳断片4)。

8) 思うに彼はここでまず(「クナクスズビィク」という語でもって)、24個の文字から成るような、幼い靈魂のための乳製の食物をほのめかしているのであろう。それに続く食物(「テュプテース」)は、すでに固まった乳である(1コリント3,2)。そして最後に来るもの(「フレグモ」)は、ロゴスというぶどうの木から流れ出す血(ヨハネ6,53-56;15,1;15,4-5)であり、「輝けるぶどう酒」(ホメロス『リアス』1.462)である。彼はこの血を、教えを完成させる最後の歓喜とする。9) ちなみにドロプス(drōps)とは「活動的な」(drastērios)ロゴスであり、これは最初のカテケシス(教えの手ほどき)から「成熟した大人の域にまで」(エフェソ4,13)、人間を燃え立たせまた照らすものである。

49.1) さらにまた、子供のための第三の習字手本があり、それは次のようになっている。「マルプテ(marppte)、スフィンクス(sphinx)、クロープス(klōps)、ズビュクテードン(zbychthēdon)」。思うにこの字列は、文字と飾りの配列によって、われわれがより完全なものの覚知に到らねばならないその道を示していると思われる。というのも永遠の救いは努力と労苦によって得られるものだからである(マタイ11,12)。2) つまりマルプサイ(marpsai)とは「掴む」という意味であり、スフィンクスとは世の調和を意味し、ズビュクテードンとは困難さを表している。またクロープスとは主の隠された覚知(1コリント2,7)とその日(1テモロン5,2;5,4;2ペトロ3,10)を明らかにしているのである。

3) ここで目を転じてみよう。エピゲネスもまた、オルフェウスの詩に関する著作の中で、オルフェウスに特有の言い回しを提示した後で、次のような表現を用いてはいないだろうか。つまり彼は「鋤で」という代わりに「曲がった

なりの稜でもって」と語り、「畦溝に」と言わずに「縦糸に」と言っているのである。また彼は「糸」という語で種を寓意的に表現し、雨を「ゼウスの涙」と述べる。一方「モイラ（運命）」とは月の一部（merē）であり、30日、15日、そして朔日を指す。オルフェウスはモイラのことを「白い衣の」と呼んだとエピゲネスが伝えているのは、モイラが月の一部だからである。4) 同様にアンティオン（anthion）とはその自然的エネルギーの故に春を表し、アルギス（argis）とは休息の意味から夜を表す。またゴルゴニオン（Gorgonion）とは月面に映し出される顔から月を意味し、アフロディテー（Āphroditē）とは種を蒔くべき時期を意味する。神学者（オルフェウス）の書では以上のように語られている（ケルン『オルフェウス派断片集』33）。

50.1) これと同様のことは、ピュタゴラス派の人々も寓意的に表現している。すなわち彼らは惑星を「ペルセポネの犬」、また海を「クロノスの涙」と寓意をもって表しているのである。2) さらに、哲学者や詩人たちによって寓意的に語られている例を探せば、われわれは幾千となくその例を見いだすことができるだろう。さらには、一卷の書物全体が著者の意図を隠された形で表しているという場合もある。例えばヘラクレイトスの『自然について』がそうであり、この書はまさに上で述べた理由から『闇』とも名付けられているのである。3) スュロスの人フェレキュデスの神学も、今述べた諸書と類似する場合である。さらに、詩人エウフォリオン、カリマコスの『アイティア』、リュコフロン『アレクサンドラ』、あるいはこれらの類の書は、解釈の訓練のために、文法学者たちの手に委ねられているものである。

51.1) かくして、われわれがこれから論じようとしているユダヤの哲学にも、神秘的にまた象徴的な表現を用いて預言した事柄があったとしても、何ら驚くには当たらない。それはすでに立証されていることである。2) 例えばモーセが勧告している「豚や鷲、鷹や鳥は食してはならない」（レビ11,7；11,13－14；申命14,8；14,12－13）というような事柄は、実に一般普遍的なことである。3) ここで「豚」とは享樂的で不浄な欲情、食物また性愛への耽溺、汚れに満ち、絶えず刺激し泥沼に陥れ、殺戮と破滅に向けて増長する放蕩を表している（クアンテス断片516）。4) 一方バルナバは、モーセが二つ蹄の獣と反芻動物を食することを勧めていると解する。すなわちバルナバは「主を恐れる人々と共に、また自らが受け取った言葉の意味に関して、心の中で黙想する人々と共に、あるいはまた主の掟を口ずさみ守る人々と共に、また黙想とは歡喜の業だと知っており、主のロゴスを反芻する人々と共に生きるべきで

ある。5) ここで二つ蹄の獣とは何か。それは正しき人、この世を歩み、聖なる衣を身に付ける人である」(『バルナバの書簡』10-11)と語る。6) 次いで彼はこう続ける。「モーセがいかにか美しく律法を定めたかを見よ。だが人々にとって、それらの律法を考えまた理解することはどうして可能だったのだろうか。われわれは掟を正しく解し、主が望んだ通りに伝える。われわれが、自らの聴覚と心に割礼を施したのも、それらのことを理解するためだったのである」(『バルナバの書簡』10,11-12)。52.1) 実に、モーセはこう言っている。「鷲、鷹、隼、鳥は食べてはならない」(申命14,12-16)。一方バルナバはこう語っている。「あのような人々とは交わったり、同化したりしてはならない。彼らは労苦し汗を流して自らの糧を得ることを知らず、略奪と不法によって生活しているのだから」(『バルナバの書簡』10,4)。2) つまり鷲は略奪を、鷹は不正を、また鳥は貪欲を意味しているのである。3) また、こうも記されている。「(神よ、あなたは)無垢な人には無垢な者となり、清い人には清くふるまい、ねじけた人にはあなたも背を向けられる」(詩編17,26-27)。それ故、聖なる人々と交わることが勧められるのである。なぜなら「彼ら(聖なる者たち)と交わる人々は聖化されるであろう」(ローマのクレムス『ローマの教会への書簡』46,2-3)からである。4) ここからテオゲニスもこう述べている。

「有徳の人々からは徳を学ぶがよい。悪しき人々と交わるなら、
あなた自身の精神をも失うだろうから」(テオゲニス35-36)。

5) またモーセはその「海の歌」の中でこう語っている。「主は大いなる威光を現し、馬と乗り手を海に投げ込まれた」(出エジプト15,1; 15,21)。これはすなわち主が、多くの脚をもつ獸的で衝動的な情動、欲情を、馬上で手綱を快樂に手渡す御者とともに「海に投げ込まれた」、すなわちこの世の無秩序の中へと追いやったというのである。53.1) 同様にプラトンもまた『靈魂について』の中で、御者と手綱を離れた馬は墜落すると語っている(プラトン『ファイドロス』247B; 248C)。ここで手綱を離れた馬とは非理性的な部分を指し、それは憤怒と欲情に二分されるという。かくしてファエトンもまた、馬の無節度から墜落した。これは神話が寓意的に語っているところである。

2) 次はヨセフの物語に関してである。まだ幼いにもかかわらず、覚知によって多くの事柄を予見するこの若者を妬んだ兄弟たちは「彼の着ていた紫色の外套を剥ぎ、捕らえて井戸の中に投げ込んだ。井戸はからで、水がなかった」(創世37,23-24)。3) つまり彼ら兄弟たちは、真摯な弟の学問好きによる多彩な知識を蔑視し、律法による信仰のみに拠って、水のない井戸に弟を

投げ込み、神のロゴスのないエジプトの砂漠に売渡したのである。井戸には知が欠けている。その井戸に投げ込まれた弟ヨセフは、自らの知識を脱ぎ捨て、兄弟と同じようになり「忘れ去られた賢者」（*アルム*『古期ストア哲学者断片集』3.541）として、知識をはぎ取られたものようになったのであった。4) また別の意味合いにおいては、この多彩な衣服とは欲情を指し、口を開けた落とし穴へと通ずるものを指すのであろう。5) 「人が水溜めを空けたままにしておくか、水溜めを掘ってそれに蓋をしないでおいたため、そこに牛あるいはろばが落ちた場合、その水溜めの所有者はそれを償い、牛あるいはろばの所有者に銀を支払う。ただし、死んだ家畜は彼のものとなる」（出エジプト21,33 - 34）。54,1) ここで次の預言の句を引くことができよう。「牛は飼い主を知り、ろばは主人の飼い葉桶を知っている。しかし、イスラエルはわたしを知らない」（イザヤ1,3）。2) ここでロゴスは〈あなたから教えられた覚知に到ったが、真理を把握することができずに誤解して道を誤るような者がいないように、ロゴスの用い方に関して誤ってはならず、非理性的な仕方で近づいてくる者には深みに生命を持つ泉を閉ざし（*エレミヤ*2,13）、真理を渴き求める者だけに飲み物を与えるように（黙示22,17）と語っているのである。3) つまり「覚知の深み」（*ロマ*11,33）を受け容れることのできない人々に対しては秘密を守り、この井戸を隠すようにと言っているのである。4) かくして井戸の主、知者その人は罰を受けるとロゴスは語る。彼は躓く者、あるいはロゴスの偉大さに飲み込まれてしまう者に対してその責がある。なぜなら彼はまだ小さなロゴスしか消化しえないから、あるいは主が働き手を観想に赴かせ、またこの理由によって未熟な信仰から離反させたという理由である。「彼は銀を賠償に支払う」（出エジプト21,34）。すなわち全能者の意向の許に弁明と申し開きをせねばならない。

55.1) このようなあり方は、洗礼者ヨハネに到るまで、律法と預言者たちの定まった型であった（*マタイ*11,13）。しかし、洗礼者ヨハネはこのことをもう預言する必要がなく、原初から告げ知らされてきた方がすでに到来しているということ、より一層明確な形で語った。彼はその際に象徴的な表現を用い、「わたしは主の履き物の紐をほどく価値もない」（*マルコ*1,7）と言ったのである。2) というのも、彼は自らがそのような力ある方に洗礼を授けるに値しない者だということをよく知っていたからである。すなわち浄めの人は、肉体および肉の罪から靈魂を、言わば足を鎖から外すが如くに解き放たねばならないのである。3) おそらく彼はここで、救い主のわれわれに対する完全な働き、すなわち直接的かつ臨在による、預言の謎によって隠されたままであった働きを語っ

ているのであろう。なぜなら預言されたことを直接的な幻視によって示した者、彼方より明るみの許へと進み来る方の到来と臨在を告げた者は、真に救いの神託の限界を解き放ち、象徴の意味を顕らかにしたからである。

4) また、ローマ人の間で行われる遺言行為などに関する慣例は、象徴としての意味を有している。例えば司法官の秤、アサリオン銀貨、竿で触れる行為、耳たぶを触る行為などがそうである。第一は裁きが正しく行われるためのもの、第二は財産分与の公正のためのもの、そして最後は、もしある人が責務を負っている場合、通りがかりの人に「立ち止まって願いを聞き、証人となって欲しい」と要請する意味を持つものなのである。

Ⅸ. 何故真理は象徴的な覆いをもって包まれるのが相応しいか、その理由について。

56.1) だが察するにわたしは、実証にはやる心から知らず知らずのうちに、度を過ぎて本題から逸れてしまったかも知れない。わたしには、象徴的な表現を用いた数多くの人々を、悉く提示しているだけの余裕はない。2) けれどもユダヤの哲学の文書には、そのような表現を用いたものが多数ある。記憶を助け、簡明を期し、人々を真理に向かわしめるとというのが、そういった表現の目指すところである。3) というのもユダヤの文書は、その哲学に頻繁に赴き、信仰と生活のすべてにおいて自らの資質を立証した人々だけの手に自らの文書が委ねられることを望むからである。4) もっともそれらの文書は、われわれが解釈者あるいは導き手を必要とすることも期待する。それは、そうあってこそわれわれはそれらの学に対してより大いなる熱意を投じ、その学に適う人々の役に立ち、さらにはわれわれが識者から知識を受け容れるときにも誤謬を犯さなくなるであろうと考えてのことである。5) ここで別の理由を挙げよう。取り分けても何らかの覆いを通してその許に顕れるものは、より偉大で崇高な真理を明らかにする。ちょうど、実りを迎えた果実が水に映されるとき、その姿は何か覆いを付けられると美しさを一層増すのと同様である。57.1) そういうわけで、隠蔽をもって語られた事柄から、さらに多数の提喻表現を取り出すことができる。それはわれわれがすでに行ってきたとおりである。こういった状況の許で、経験の浅い者、無学な者は躓き、覚知に通じた者は理解するのである。2) 実に聖書は、そのすべてが誰にでも全く明瞭に伝えられることを望みはしない。また「その知恵の善を、霊魂においてまったく

浄められていないような者どもと分かち合うことも欲しない。なぜならかくまで大きな苦しみをもって獲得されたものを、誰にでも渡すなどということは許されることではないし、ロゴスの神秘が不浄なる者どもに説かれることも相応しくないから」（イェンブリコス『ピュタゴラスの生涯』75）。3）実に、ピュタゴラス派のヒッパルコスが、ピュタゴラスの教説をあからさまに記したと訴えられて学園から追われ、彼のためにはまるで死者に対するかのように墓碑が立てられたと言われている（ヒッパソスp.108,23-26 ティールス・クランツ）。4）それ故、ユダヤの哲学においても、自らの教説から外れた者や、知性を本性的な情動に従わせてしまった者どもは「死者」と呼ばれるのである（エフェソ2,1）。5）かの神的な使徒は語る。「正義と不法にどんな関わりがあろうか。光と闇に何のつながりがあろうか。キリストとベリアルにどんな調和があろうか。信仰と不信仰に何の関係があろうか」（2コリト6,14-15）。なぜなら、オリュンポスの神々とともに朽ちゆくべき者どもの栄誉とは異なるものだからである（プラトン『法律』717A-D；727E1-2）。6）「〈だから、あの者どもから出て行き、遠ざかるように〉と主は述べる。そして、汚れたものに触れるのをやめよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となるだろう」（2コリト6,17-18）。

58.1) さて、ピュタゴラス派およびプラトンが、多くの事柄に関して隠された表現を用いて語っただけではなく、エピクロス派もまた、エピクロスから伝えられたいくつかの語られえないことがあり、彼の書物を読むことがどんな人にも許されるというわけではないと語っている（エピクロスp.104 ウゼナー）。2）そればかりではなくストア派の人々によれば、創始者のゼノンは、弟子たちに容易には読ませないようないくつかの著作を著したと言われている。つまりこれは、弟子たちが真実に哲学するようになったという証拠を挙げられるまでは、彼らには読ませないということなのである（プラトン『国家』473D2）。3）アリストテレス一門の人々も、彼らに伝わる著作の中に、彼ら内部の者のためのものと一般的で外部向けのものがあると述べている。4）また神秘儀礼の創始者たち、彼ら自身哲学者であった者たちも、自分たちの教説がどんな人にも明らかになるようなことがないように、神話で包み隠した。5）であるから、彼らが人間的な教説を覆い隠し、無学者たちの目に触れるのを妨げたのであれば、真なる実在の真に聖にして至福なる観想が、何にもまして包み隠されることに何の不都合があろうか。6）それはともかく、ユダヤの哲学にせよ、ピュタゴラス派の神話にせよ、あるいはプラトンの数々の譬えにせよ—『国家』に

におけるアルメニオスの子エルの神話（プラトン『国家』614B）、『ゴルギアス』におけるアイアコスとラダマンテュスの逸話（プラトン『ゴルギアス』524A）、『フェイドン』におけるタルタロスの挿話（プラトン『フェイドン』112A）、『プロタゴラス』におけるプロメテウスとエピメテウスの挿話（プラトン『プロタゴラス』320D）、また『アトランティコス』におけるアトランティス人とアテナイ人の戦争の話（プラトン『クリティアス』108以下；『ティマイオス』25B-D）など、これらの名に関して、それらがすべて悉く寓意的に解釈されるべきだというわけではなく、普遍的な意味を表す限りにおいてそう解釈すべきなのであり、そうしてはじめてわれわれは、象徴を通じ、覆いをもって寓意的に意味されている事柄を見出すことができるであろう。

59.1) さらに、ピュタゴラス派の集いは、弟子たちに対する二種類の交わりを有し、多くの者を「聴聞者」、一方真に愛智の業に専心する者を「門弟」と呼び、多くの人々に対しては暗に、

「あることは話し、あることは隠してある」

（ホメロス『オデュッセイア』11.443）

という。

2) おそらくかのペリパトス派による二種類の範疇、すなわち論理における「思いなし」と「学的なもの」と呼ばれるものに関しては（アリストテレス『トピカ』100B19以下）、思いなしを榮譽と真理から隔てていると考えて遠くないであろう。

3) 「また汝（ムーサ）は、死すべき者どもが捧げる

光栄ある名譽の花輪に惑わされて、それを彼らより受取り、かくて
神の掟の許す以上を大胆に語るべからず」

（エンペドクレス断片 3.6 - 7 デイールズ・クランツ）。

4) 実に、イオニアのムーサたちは明白に「多くの見せかけだけの知者たちは、民衆の詩人たちに従い民衆の掟を珍重する」と語る。すなわち彼女たちは、悪しき人々は多く善き人々は少ないが、最も善き人々は名声を追い求めるということをよく知っているのである（ヘラクレイトス断片 104 デイールズ・クランツ；プラトン『ソフィスト』242D）。5) 「すなわち」ヘラクレイトスは語る、「最も優れた人々は、すべての代わりにただ一つ、死すべき者どもの中での永遠なる名声のみを選ぶ。しかるに大半の人々は、家畜みたように満ち足りている」（ヘラクレイトス断片 29 デイールズ・クランツ）。つまり「彼らは、腹や恥部やわれわれの中で最も恥ずべき事柄でもって、幸福ということを計るのだから」（デモステネス『冠について』296）。

6) またエレア派の偉大なる人パルメニデスは、二つの道に関する教えを次のように記し、提示している。

「一つの道は、従順なる真理の静穏な心、
もう一つは、人間どもの思いなしに行き着く道、
そこに真なる信仰はない」（パルメニデス断片 1.29 — 30 ティールス・クラツ）。

X. 信仰の神秘が隠されることに関しての、使徒による見解。

60.1) 実に相応しくも、神的な使徒（パウロ）は次のように語っている。「初めに簡潔に記したように、神秘が啓示によってわれわれに知らされた。あなたがたはそれを読めば、キリストの神秘におけるわたしの考えを理解することができる。その神秘は、以前の世代には、今キリストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されたようなかたちでは、人の子らには知られていなかったものである」（エフェソ3,3—5）。2) なぜなら完成された人々にも、彼らにとっての学びというものがあるためであり、これに関して使徒は『コロサイ人への手紙』の中でこう記している。「われわれは絶えずあなたがたのために祈り、願っている。どうか霊によるあらゆる知恵と理解によって、神の御心を十分に悟り、すべての点で主に喜ばれるように主に従って歩み、あらゆる善い業を行って実を結び、神をますます深く知るように。そして、神の栄光の力に従い、あらゆる力によって強められるように」（コロサイ1,9—11）。3) また彼はこう続ける。「神は、ロゴスをあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになった。それによって、世の初めから代々にわたって隠されていた神秘が、今や神の聖なる者たちに明らかにされた。この神秘がもつ異邦人への栄光の豊かさを、神は彼らに知らせようとされたのである」（コロサイ1,25—27）。61.1) かくして一方には、使徒たちの時代まで隠されており、主から彼らが受けたままに彼らによって伝えられた神秘があり、それらは旧約において隠されていたけれども「今や聖なる人々に明らかにされた」（コロサイ1,26）ものである。また一方には「この神秘がもつ異邦人への栄光の豊かさ」（コロサイ1,27）があり、それはキリストへの信仰また希望であって、これをかの使徒は他の箇所でも「礎石」（1コリント3,10）と呼んでいる。2) 続いて彼は、このことに関する覚知を示そうと熱望するかの如く、次のように記している。「人類のすべてがキリストにおいて全きものとなるように、自分は知恵を尽くして人類全体を諭し、教えている」（コロサイ1,28）。3) ここで彼は、普遍的な意味で「す

べての人間が」と述べているのではない。そうであれば誰一人として無信仰な者はいなくなるであろうから。また信ずる者「すべて」が「キリストにおいて完全な者である」と言っているのでもない。むしろ彼はここで人類全体を、言わば肉体的にも霊魂の上でも聖化された一人の人間（1テロネ5,23）と見なして「人類のすべてが」と言っているのである。なぜなら彼は「すべての人々に覚知が備わっているわけではない」（1コリト8,7）と明瞭に付け加えているからである。4）「この人々が愛によって結び合わされ、理解力を豊かに与えられ、キリストにおける神の神秘を悟るようになるように。知恵と覚知の宝はすべて、キリストの内に隠されている」（コサイ2,2－3）。「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈るよう勧告する」（コサイ4,2）。5）しかるに感謝の行為は霊魂あるいは霊的な善のためばかりではなく、肉体的な善のためにも執り行なわれるものである。62.1）次いで彼は、覚知がすべての人々に備わっているものではない（1コリト8,7）ということを一層明確な形で示しつつ、「同時にわれわれのためにも祈ってほしい。神が、わたしがまさにそのために牢に繋がれているキリストの神秘を語るための門を、われわれに開き、わたしがその神秘をしかるべき仕方でも語り、明らかにすることができるように」（コサイ4,3－4）と語っている。なぜならいくつかの教えは、記されることのないままに伝えられていたからである。2）また彼は『ヘブライ人への手紙』の中でこう語っている。「あなたがたは今ではもう）教師になっているはずなのに」（ヘブライ5,12）、あたかも旧き契約のうちに年老いてしまった者のように「再び誰かに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、また固い食物の代わりに、乳を必要とする始末である。3）乳を飲んでいる者はすべて、義の言葉を理解することができない。幼子であるから」（ヘブライ5,12－13）、すなわち初歩的な教えを信じたままで進歩がないから、と。4）「固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、完徳に達した人のためのものである。であるからわれわれはキリストの教えの初歩を離れ、完徳を目指して歩もう」（ヘブライ5,14－6,1）。

63.1）そればかりでなくバルナバも自ら、異邦人への務めに関して使徒に同意し（使徒行録13,1－4）、次のように述べている。「わたしは、あなたがたがよく理解できるように、なるべく簡単な言葉で書き記そう」（『バルナバの書簡』6.5）。2）続いて彼はより明確な形で、覚知を継承した証拠を提示しつつ、こう語っている。「もう一人の預言者モーセは、彼らに対して何と語っているのか。3）〈見よ、主なる神は言われる。主なる神、アブラハム、イサク、ヤコ

ブの神が誓われたすばらしき地へ入れ。そしてその地、乳と蜜の流れる地を嗣業の地として受け継ぐがよい（出エジプト33,1；33,3）。4) 覚知は何と語るであろうか。こう語られる。学べ、肉のうちにあなたがたの間に姿を顕すであろうイエスに希望を置くがよい、なぜなら人間とは苦しむ大地だからである。なぜならアダムの創造は大地の面からなされたものだからである。5) では聖書にはどう語られているであろうか。〈かの善き地、乳と蜜の流れる土地へ〉（入れ）。兄弟たちよ、われわれの主はほむべきかな。主は、自らの隠された事柄に対する知恵と理性を、われわれのうちに置いたからである。6) というのも、預言者がこう言っているからである。〈主の譬えを誰が理解しえようか、知者、識者、そして自らの主を愛する者の他に〉（箴言 1,6；伊^ヤ40,13）（『バルバの書簡』 6.8－10）。こう言われるのも、これらのことを受け容れられる者が極めて少ないからである（マ^イ19,11）。7) 「なぜなら」ある（エジプト人への）福音でロゴスは語る、「主がこう告げ知らせるのは妬みの故ではない」。「わたしの神秘はわたしのため、またわたしの家の息子たちのためである」（伊^ヤ24,16）（※この句は現行七十人訳の『イザヤ書』の中にはなく、テオドティオンらの版によるものである）。主は自らの選びを、安全で思い煩いのないところでおこなう。それは主が選び取った者どもの財が、妬みを越えたものとなるためである。8) というのも善き方に対する覚知を持たない者は悪しき者だからである。なぜなら「善き方はただ一人」（マ^イ19,17）、父のみなのであるから。しかるに父を知らないことは死である。なぜなら知ることは、朽ちることのない力に与かることにおいて永遠の生命となるのであるから（ヨ^ハ17,3）。そして滅びを味わわないことは、神性に与かることであるが、神に関する覚知からの離反は、滅びをもたらすのである。64.1) また預言者はこう語っている。「わたしはあなたに隠された、闇のうちにあって目に見えない宝を与えよう。それはわたしが主なる神であるということを人々が知るようになるためである」（伊^ヤ45,3）。2) これと類似したことをダビデもその詩編の中で歌っている。「あなたは、真理を愛し、あなたの秘密、あなたの知恵の隠された意味を、わたしに明らかにして下さった」（詩編 50,8）。3) 「昼は昼に言葉を」すなわち記された言葉を「語り告ぎ」、 「夜は夜に覚知を」つまり神秘的に隠された覚知を「伝える」。そして「話すことも、語ることもなく、その声が聞こえることもない」（詩編 18,3－4）。その声とは「人が何かを秘密のうちに行ったからとて、わたしが彼を見つけれないとも言うのか」（エ^ミヤ 23,24）と語る神の声である。4) それ故に教えは、隠されたものを照らす

「光」(2コリント4,4; 4,6) と呼ばれる。櫃の蓋を明かすのはただ師のみである。これは詩人たちが神に関して「(神は) 善きものを入れた壺は閉じ、悪しきものを入れた壺は開ける」(ホロス『イリアス』24.527 - 533; ヘシオドス『農と暦日』94以下) と述べているのとは逆である。5) 使徒は「キリストの祝福の充溢のうちに、あなたがたのところに行くことになるであろう」(ローマ15,29) と言っている。ここで使徒が「キリストの祝福の充溢」と言っているのは「霊的な賜物」すなわち覚知の教えのことである。使徒は自ら赴いて、この賜物を人々と分かち合いたいと望んでいる(ローマ1,11 - 13)。なぜなら、手紙ではこれらのことを伝えることはできないからである。6) 「この福音は、世々にわたって隠されていた神秘を啓示するものである。その計画はいまや現されて、永遠の神の命令のままに、預言者たちの書物を通して、信仰による従順に導くため、すべての異邦人に対して知られるようになった」(ローマ16,25 - 26)。すなわち異邦人たちの中で信じる人々に対して、その福音が告げられた。しかしその中の僅かな人々にのみ、神秘のうちに隠されているものが何であるかが明らかにされたのである。

65.1) また、プラトンが『第2書簡』の中で神について次のように論じつつ述べているのは相応しい。「あなたには、それをほのめかしによって説明せねばなるまい。なぜなら万一海か陸かで手紙の紙片が災厄を蒙った場合、それを読む者が知ることのないためである」(プラトン『第2書簡』312D6 - 8)。2) というのも万物の神は、いかなる言葉、観念、想念をも超越しているため、けっして文書には託されえない。神はその力の故に、語られえないからである。3) これと同じことはプラトンも明瞭に語っている。「だからそのことをよく考えて、今その価値もないのに世に出しているものを、後でいつかあなたが悔やむことのないように用心せよ。そして最も注意すべきことは、書かずに学び取るということだ。書かれたものは、世に出ないというわけにはいかないからだ」(プラトン『第2書簡』314B6-C2)。4) これと類似することを聖なる使徒パウロが語っている。すなわち彼は、預言者的かつ真に古代的な隠蔽を擁護している。実に、ギリシア人たちの間での素晴らしき教説が、この隠蔽によって流れ出しているのである。5) 「しかしわれわれは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語る。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもない。われわれが語るのは、隠された神秘としての神の知恵である」(1コリント2,6 - 7)。66.1) さらにその少し後で使徒は、大衆に対して弁舌を公にする際には十分留意すべきだということを、およそ次のような表現

で教えている。「兄弟たち、わたしはあなたがたには霊の人に対するように語ることはできず、肉の人、つまりキリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように語った。わたしはあなたがたに乳を飲ませたが、固い食物は与えなかった。まだ固い物を口にすることができなかつたためである。否、今でもできない。相変わらず肉の人だからである」（1コリント3,1-3）。2）それゆえ使徒の述べるように、乳が幼児のための食糧であり、固い物が完全な人のための食糧であるのなら（ヴライ5,13-14）、乳とは言わば靈魂の最初の食糧としての「教えの手ほどき」であり、固い物とは（入信の秘跡に与った者の）見神の観想と考えられよう。それはロゴスの肉であり血であって（ヨハネ6,53）、換言するならば神的な力と実体の把握ということになる。3）「味わい、見よ。主が恵み豊かであるということ」（詩編33,9）と聖書には記されている。というのも主は、いま述べたような食物に対して霊的に与かる人々に、自らをそのような仕方で見分ち与えるからである。実に、真理の友プラトンに拠れば、靈魂が自らを育成するのもそのような方法による（プラトン『第7書簡』341C6-D2）。神的なロゴスを食し飲むこととは、神的な実体の覚知に他ならない。4）かのプラトンが『国家』篇第2巻で「子豚ではなく、何か大きなかけがえのない生贄を奉納」したのちに、神に関して探求を行うべきである（プラトン『国家』378A5-6）と述べるのはこのためである。5）一方使徒もこう述べる。「われわれの過越、キリストは屠られた」（1コリント5,7）。キリストとは、真にかけがえのないいけにえであり、われわれのために聖とされた神の子なのである（ヨハネ17,19）。

XI. 精神を、肉の・地上的な事柄からできる限り遠ざけるならば、 真なる神の覚知に到りうること。

これは哲学者たちの権威によっても証明されること。

67.1) さて神に受け入れられる犠牲とは、肉体からのまた肉体にまつわる情動からの、不退転の離脱である。実にこれこそが、神に対する真の敬心である。2) それゆえ、ソクラテスによって哲学が「死の鍛練」と語られている（プラトン『ファイトン』67D6-7; 80E5; 81A1-2）のも相応しいことではないだろうか。というのも、思惟することにおいて視点を逸らすことなく、何か他の感覚を用いることもなく、清浄なる理性のみをもって問題に取り組む人こそ、真なる哲学を追究する人だからである（プラトン『ファイトン』65E6-66A4）。3) 実にピュタ

ガラスが、感覚しうるものごとから離脱し純粋な理性のみによって神的なものを観照するために、弟子たちに勧めた五年間の沈黙も、このことを意図してのことであった...〈欠損箇所〉.. 秀逸なギリシア人たちは、モーセに拠ってこういったことを哲学的に理解していたのであった。4) なぜならモーセは「焼き尽くす献げ物にする犠牲獣の皮を剥ぎ、その体を各部に分かつ」ようにと命じているからである (レビ¹⁶1,6)。つまり質料的な皮をはぎ取られ、肉体的な愚かしさや、虚しき偽りの思いなしが産み出すあらゆる情動から離脱した靈魂は、覚知をまとったものとなる。すなわち肉的な欲望をはぎ取られ、必然的に光によって聖別されるのである。68.1) しかるに大半の人々は、まるで蝸牛のように死滅性を身にまとい、自らの淫乱の周囲にあたかもヤマアラシのように群がり、至福にして不死なる神に関しても、自らに關して思いなしているようなことを考えているのである。2) さて、彼らがわれわれの隣人であるとしても、彼らが気付いていない点がある。それは神が、数限りないことどもを、神自身は関与していないにも関わらず、われわれに賜ったということである。誕生に關して然り、神は生まれざる方である。糧に關しても然り、神は何ら欠けた点のない方である。また成長に關しても、神は常に変わらざる方である。また老年や被死性に關しても、神は不死かつ不老の方なのである。3) それ故、手、脚、口、眼、入口、出口、怒り、威嚇などがヘブライ人の間で、神の情動として語られているとは、決して理解してはならないのである。むしろ、これらの名辞をもって何かより聖性に満ちた事柄が寓意的に表現されていると解されるべきである。このことは、この論考の頁を進めるにつれ、相応しい箇所でも明らかにすることにした。

4) 「実に、知恵とはすべてを癒す万能の薬」(カリマコス『エピグラム』46.4) とカリマコスはそのエピグラムの中で記している。

5) また、バッキュリデスはその『パイアン』の中で記している。

「むかしも今も、知者とは知者の出、
なぜなら語られぬ言葉の戸口を見出すのは
容易ならざる業ゆえ」(バッキュリデス断片5スネル・メラー)。

69.1) またイソクラテスは巧みにも、『パナテナイア演説』の中で「教育を受けた者と呼べるのは誰だろうか」と問うた後、それに次のように答えている。「まずは、日々生ずる出来事に対して、巧みに適応する人。そして状況に適合した判断を有する人。また総じて有益なことを推測する能力のある人。2) 次いで、出会う人々に対して常に相応しくまた正しく関わりを持ち、他の人々

の不快や重荷に関しては、たやすくまた容易に耐え忍び、自らをできる限り身軽にかつ適度に、周囲の人々に対して提供しうる人。3) さらにには快樂に打ち勝つ人々、また災厄に打ち負かされることなく、その中にあって果敢にまたわれわれが与かっている本性に相應しく振る舞える人。4) 第四には、これが最も大きな点であるが、成功によって墮落することなく、あるいはその行き過ぎや傲岸に陥ることもなく、善き思慮をなすものの群れに留まる人。5) 続けて、彼はこの論考の頂点とも言うべき箇所を付け加えている。「これらのうち一つだけにではなく、これらすべてに関して調和の取れた靈魂の状態を維持している人、この人をこそわたしは思慮ある人、まったき人、すべての徳を有している人と呼ぶ」（イソクラテス『パナテナイコス』30—32）。6) 覚知による生活を、たとえいかにしてそれを知るべきかに通じていなかったとしても、ギリシア人もまた神的なものとしていたかを理解されただろうか。だが覚知とは何かということに関しては、彼らはまったく知らなかったのである。

70.1) こういうわけで、もしわれわれにとって覚知がロゴスに由来する食物であるということが同意されるならば、実に聖書の語る通り、真理に「飢え渴く人々は幸いである」（マタイ5,6）。なぜなら彼らは永遠の食物によって満たされるであろうから。

2) 劇場（skēnē）の上で自らの哲学を展開したエウリピデスに目を移すことにしよう。驚くべきことに、われわれが上で語った事柄にきわめて類似したことが、彼によって述べられているのが見いだされる。彼は父と子に関しても、およそ次のような表現でほめかしている。

- 3) 「万物の守護者であるあなたに、わたしは
神酒と奉納の菓子を献げよう。その名は
ゼウスであれハデスであれ、あなたの好む名でよい。
あなたはわたしから、ありとある種の稀な果実で満ちた、
火にかけていない奉納を受け取りたまえ、献げ物として」

（エウリピデス不詳断片 912）。

というのもキリストとは、われわれのための、火にかけていない焼き尽くすいけにえだからである。4) さらに救い主自身については知ることなく、彼は以下で明確にこう続けることであろう。

- 5) 「なぜなら、あなたは天上の神々の間では
ゼウスの王笏を手にし、また
冥界にあってはハデスと支配権を分け合っているのだから」。

6) 続いて、彼はこう明瞭に語っている。

「死者たちの靈魂を地上の光へと送りたいまえ、
 試練を、それがどこから生ずるのか、禍いの原因は何か、
 どの神に犠牲を捧げれば苦難が止むのかを、
 予め知りたいと望む者たちのために」(エウリ^oデス不詳断片 912)。

7) であるから、ちょうどユダヤ人にとっての沐浴の式と同じように、ギリシア人の許で神秘の始まりを画するのが浄めの儀式であるということは理に適ったことなのである。71.1) それに続くのは、教えと将来的準備に関しての礎石を秘めた小さな神秘である。これに対する(事物の)総体に関する大きな神秘に関して、もはやわれわれにさらに学ぶべきことは残されていない。ただ自然本性と存在物に関して観想と思惟を行うのみである。2) われわれは浄化の方法として告白を、また観想の方法としては、第一の思惟に向かって進む分析を採用することであろう。この分析によってわれわれは、その基底にあるものから出発し、肉体から本性的な性質を取り除き、深さに関わる広がりを取り去り、しかるのち広さ、そしてさらに長さを取り除くという方法を採用。なぜならこうして残されたものが、言わばしるしとして場所を有した単一の単位だからである。もしそこから場所を取り去るならば、これは単位として考えることができよう。3) かくしてわれわれは、肉体と非肉体的なものに付け加わっている限りのものすべてを取り除いたならば、自らをキリストの大きさへとなげうち、そこから聖性をもって深淵へと進み、全能者の思惟にまで到り着くことであろう。彼が何であるかではなく、彼が何でないかを覚知することによって。4) 姿、運動、静止、玉座、場所、あるいは万物の父の右あるいは左といったことは、たとえ記されているとしても決して思惟するべきではなく、それら各々が明らかにしようとしていることが、相応しい箇所において示されるであろう。5) 第一の原因は、場所に限定されるものではなく、場所、時間、名称、思惟などを超越するものなのである。それゆえにかのモーセも「あなた自身をわたしに明らかにさせたまえ」(出エ^oプト33,13)と言った。これは、神が人間たちによって教えられるものでも、語られうるものでもなく、ただ神からの力のみによって知られうるものだけということ、極めてよくわかるかたちでのめかしたのである。というのも探究は形なく目に見えないものであり、覚知の恵みは子を通して神から来たるものだからである。72.1) かのソロモンが次のように語って、極めて明瞭な形でわれわれに証言をしてきている。「人間の思慮はわたしのうちにはなく、神がわたしに知恵を授ける。わたしは

聖なる事柄を知っている」（箴言 30,2 – 3）。2）またかのモーセは、神的な思慮を寓意的に表現し、楽園に植えられた「生命の木」と呼んでいる（創世 2,9）。この世もこの楽園たりうる。この世には創造の業によるすべてのものが備わっているからである。3）ロゴスもまた、花を咲かせて（詩編 91,13）実を結び（詩編 1,3）、この世において肉となり（ヨハネ 1,14）、その恵みに与かる人々を活かしたのである（1ペトロ 2,3）。これは、主がわれわれの覚知の及ぶところとなったのが、十字架なくしてではなかったからである。つまりわれわれの生命は、われわれの信仰に向けて十字架につけられたのである。4）ソロモンはさらにこう言っている。「知恵を捉える人にとって、知恵は不死の木となる」（箴言 3,18）。5）それ故、モーセを通してこう語られている。「見よ、わたしはあなたの前に命と死とを置く。すなわち主なる神を愛すること、主の道を歩むこと、主の声を聞くこと、そして生命を信ずることをあなたに委ねるのである。もし、わたしがあなたがたに与えた正義と裁きを冒すなら、あなたがたは滅びる。なぜなら主であるあなたの神を愛すること、これが生命でありあなたの日々の長さだからである」（申命 30,15 – 20）。73.1）また「アブラアムは、神が彼に告げた場所へ赴いた。三日目に彼が目を上げると遙か彼方にその場所が見えた」（創世 22,3 – 4）。2）ここで第一の日とは美しきものを視覚によって捉える日であり、第二の日とは霊魂が最上のものを欲する日である。そして第三の日には精神が霊的なものを識別する（1コリント 1,18）。なぜなら思惟的な目が、三日目に復活した師に向けて開かれたからである。また第三の日が（洗礼の）封印という神秘のしるしでもあるとすれば、この日を通して、真に神である方に対する信仰が成立するのである。3）それ故アブラアムが「遠方より」その場所を目にしたというのは、理に適ったことである（創世 22,4）。なぜなら神の場には到達しがたいからである。この場をプラトンは「イデアの場所」と呼んでいるが（プラトン『ソフィスト』 253D；『ファイドロス』 247C4；『国家』 509D2；517B5）。彼はモーセから学んで、この場を「あらゆるものをすべて含んだ場所」と解したのである。4）それ故、この場所がアブラアムの目には遠方に見えたというのはもっともなことである。彼はまだ生成の途上にあり、天使により秘儀の手ほどきを受けつつあったのだから（創世 22,11 – 12）。74.1）ここから使徒はこう言っている。「われわれは、今は、鏡におぼろげに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる」（1コリント 13,12）。それはただ、汚れなく物的なものにもよらない思惟行為に拠るものなのである。2）そして神に関して憶測することは「対話問答法のうちにお

いて可能である。もし人が、いかなる感覚にも頼ることなく、ただ言論を用いて、まさにそれぞれであるところのものへ前進しようとして、最後にまさに善であるところのものそれ自体を、思惟のはたらきだけによって直接把握するまで退転することがないならば、そのとき人は、思惟される世界の究極にまで到ることになる」とプラトンは述べている（プラトン『国家』532A5－B2）。3）またかのモーセは、多くの場所に祭壇あるいは聖域を設けることを認めているわけではなく、神の一なる神殿を据えるべく命じている。ここでモーセが意味しているのは、まず世が唯一であるということであり、それはバシレイデスも認めていることであるが、さらにモーセが告げている神の唯一性に関しては、もはやバシレイデスは認めていないのである。4）また覚知の域に到ったモーセは、把握しえないものを一定の場所に限定することはなく、畏れ敬うべきものとして神殿の中に像を設置したりはしなかった。すなわち彼は、神が目に見えずまた描き得ないものであるということを明らかにし、ヘブライ人たちをある意味において、神殿に在る神名への敬意を通じて神の正しき想念へと導いたと言えよう。5）実にロゴスは、神殿を建てることや犠牲を捧げることを一切禁じることによって、全能者がいかなる場所にも見いだされないということをはほめかしているのである。それは次の言葉からも理解される。「〈あなたたちはどこに、わたしのための神殿を建てうるか〉。主は言われる。〈天はわたしの王座である〉」（イザヤ66,1）。6）同様に犠牲に関しても「雄牛の血や子羊の脂肪をわたしは望まない」（イザヤ1,11）と語られる。さらに、預言者を通して聖霊が禁じている事柄もこれに加えられる。75.1) かのエウリピデスは、今述べたことに調和するかたちで、いとも美しく次のように記している。

「大工によって作られたいかなる家が、
その壁のひだのうちに神的な体を包むことができようか」

（イウリピデス疑義断片 1130）。

2) また犠牲に関しても、彼は同じようにこう語っている。

「神は、もし本当に神であるのなら、
何一つとして必要とはしない。（犠牲を必要とする）神々など、
詩人たちのくだらない作り話に過ぎない」

（イウリピデス『ヘラクレス』 1345－1346）。

3) プラトンは言っている。「神がこの世界を創ったのは、人間どもや他の神々や神霊たちから敬意を受け取り、われわれからは（香の）煙を、神々および神霊からは相応しい仕えをかり取って、言わば創世による収益を上げると

というような必要に迫られてのことではないからである」（キロスのテオドレトス『キリシヤ人の誤謬の癒し』IV.34；VII.48）。4）『使徒行録』におけるパウロは、この点で最も教えに富んでいる。彼は言っている。「世界とその中の万物とを創られた神が、その方である。この神は天地の主であるから、手で創った神殿などには住まない。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もない」（使徒行録17,24－25）。76.1）また、ストア学派の創始者であるゼノン²は、その『国家』篇において、神殿をも像をも造ってはならないと言っている。なぜならいかなる建造物も、神々に相応しいものとはなりえないからと言うのである。彼はこのことを次のような表現をもって記すことを憚らなかつた。「聖域を建てる必要はなかろう。なぜなら神殿とは、大きな価値あるものでもなければ、聖なるものと見なされるべきものでもないのだから。家づくりや職人の業で、大きな価値をもつものは何一つとしてないのだから」（ゼノン断片264アルム）。2）またプラトンは、相応しくも地球が神の神殿であることを知っていたので、市民たちによって（神の）像が据えられるべき町の場所を彼らに示したと言える。しかし彼自身としては、神々の像を有することを誰にも認めなかつたのである。3）「聖なるものを、誰であれもう一度神々に捧げるようなことをしてはならない。また金と銀は、他の国では個人の家にも神殿にも用いられているが、これらは人の妬みを招きやすいものである。また象牙は、靈魂を失った肉体から取られているのだから、清浄な献納品ではないし、鉄や青銅は戦争の道具である。しかし木製品は、一片の木からできているものなら望みのものを捧げてよいし、また石造品も、同様に一塊の石からできているものなら、望みのものを公共の神殿に捧げてよい」（プラトン『法律』955E7－956A5）。77.1）彼が『大書簡』の中で次のように語っているのも適確なことである。「その事柄は他の学科と違って語ることでできるものではなく、事柄そのものに関してなされる多くの共同研究と共同生活から、言わば飛火によって焚きつけられた光のように突如として靈魂のうちに生じてきて、やがて自分で自分を養うものなのだ」（プラトン『第7書簡』341C6－D2）。2）実にこれは、預言者のゼファニヤによって語られた次の言葉に似てはいないだろうか。「靈がわたしを運び、第五天にまで連れていった。わたしは主と呼ばれる天使たちを目にした。聖靈のうちに花冠が彼らの上に置かれ、彼ら各々の玉座が昇り来る太陽の光のように七重にも輝いた。彼らは救いの神殿の中に住まい、語り得ない至高の神を誉め讃えていた」（『ゼファニヤの黙示録』からの引用。ルナック『古代キリスト教文献史』I.854；II.1.572以下）。

XII. 神は精神によっても、言葉によっても把握しえないこと。

78.1) 「万物の父また創造者を見出すことは至難の業であり、たとえ見出しでもそれを完全に述べ明かすことは不可能である」(プラトン『ティマイオス』28C3-5), 「というのもその事柄は決して、他の学科と同じように語りうるものではないからである」(プラトン『第七書簡』341C6)と真理の友プラトンは語っている。2) ちなみに知恵に満ちたモーセは、思惟されることの頂きにまで到る聖なる観想によって山に登り(出エジプト19,12; 19,20), 「民は誰一人として、自分と共に登ってきてはならない」と告げねばならなかった(出エジプト19,23)。思うにプラトンは、モーセによるこの行動のわけをよく聞き知っていたがために、上のような叙述をしているのだと思われる。3) さらに聖書は「モーセは、神の居場所である闇の中に入った」(出エジプト20,21)と語っている。これは、神が目に見えず語り得もしない方であり、闇がちょうど多数の人々の不信仰と無知に等しく、真理の光にとって障害となるということ、理解しうる人々に対して明らかにしているのである。4) 一方神学者のオルフェウスも、ここに着想を得て次のように語っている。

「その方は一にして自足している。万物はその一者の子孫として
もたらされたもの」

(あるいはここで「本性的に」と記されている版もあるが)、さらに彼はこう付け加えている。

「死すべき人間どもの誰一人としてこの方を目にすることはできないが、彼自身はすべての人々を見ている」。

5) 彼はさらに明瞭な表現で、こう続けている。

「彼自身の姿は、わたしは目にしていない。
なぜならその周囲を雲が取り巻いていたから。
というのは、すべての人間には、その眼の中に
死すべき小さな瞳が潜んでいる、なぜなら
人間には肉と骨が備わっているのだから」

(ケルン『オルフェウス派断片集』245.8-10;14-16)。

79.1) いま述べた事柄を、使徒は次のように証言することになるであろう。彼は言う。「わたしはキリストのうちにあつて、第三天にまで引き上げられた人を知っている」(2コリント12,2)。彼はそこから「樂園にまで引き上げられ、人が

口にするのを許されない、言い表し得ない言葉を耳にした」（2コリト12,4）。ここで使徒は神の語り明かせぬ神秘をほのめかしているのである。ここで〈許されない〉のは、律法のためでも、何らかの形で禁止されたが故の恐怖心のためでもなく、人間の力では神的事は言い表せないがゆえである。それは、たとえ選ばれた靈魂に対して、第三天で秘義を伝えた人々に許されたような形で、その第三天を越えて語り始めるとしてもだと使徒は述べる。2) わたしは、プラトンにおいても天が多数あると考えられているということを知っている（ちなみにギリシア以外の哲学からは、そのような数多くの例を引くことができる。ただ先に約束したとおり、時宜を得た箇所までは留保し、今ここでの論述からは省略することにした）。3) プラトンは『ティマイオス』篇において、世界として考えるべきものが、多数かあるいは唯一かと自問しつつ、その名称に関しては無関心のまま、世界と天を同義語として用いている（プラトン『ティマイオス』28B3—4）。その箇所はこうなっている。4) 「われわれは天を一つのものとして呼んで来たが、それで正しかったのだろうか。それとも、多なるものとして、また無限個のものとしてさえ語るほうが正しかったのだろうか。それは一つのものとして呼んで正しかったのである。それが、範例に則して制作されたことになるのだとすれば」（プラトン『ティマイオス』31A1—4）。

80.1) さらにローマの人（クレメンス）による『コリントの教会への書簡』の中でも、次のように記されている。「人間にとって、大洋は果てしないもの、そのかなたにある世界も同じである」（ローマのクレメンス『コリントの教会への書簡』20.8）。2) これと調べを合わせ、かの神的事な使徒もこう叫ぶ。「おお、神の富、神に関する知恵、覚知の深みよ」（ローマ11,33）。3) したがって、かの預言者（モーセ）が「酵母を入れず、熱い灰の下に埋めて焼いたパン」を作るようにと命じ（創世18,6；出エジプト12,39）、ほのめかして表現しているのも、このことではないだろうか。すなわち彼はここで、創られざる方とその方の力に関しては、真に聖なる神秘の言葉として隠されていなければならない、ということ告げているのである。4) かの使徒はこのことを、『コリント人への手紙』の中ではっきりと確証してこう述べる。「われわれは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語る。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもない。われわれが語るのは、隠されていた、神秘のうちなる神の知恵なのだ」（1コリト2,6—7）。5) また彼は他の箇所でもこう語っている。「知恵と覚知の宝が、すべてそのうちに隠されているキリストのうちなる神の神秘のまったき覚知に到るために」（コサイ2,2—3）。6) このこ

とを、われわれの救い主も、自ら次のように証言している。「あなたがたには、天の国の神秘を知ることが許されている」(マタイ 13,11)。7) さらにまた福音は、われわれの救い主が使徒たちに神秘のうちなる言葉を語ったことを告げている(1 コリント 2,7)。というのも、その神秘に関する預言が「彼の口は比喻のうちに開かれ、宇宙創造のとき以来隠されていた事柄を語り明かすだろう」(詩編 77,2)と語っているからである。8) また主は、すでに酵母に関する譬えを通して、神秘を隠す必要性を明らかにしている。すなわち主はこう言っているのである。「天の国は酵母に似ている。婦人が酵母を取って3サトンのパン粉に隠し混ぜると、やがて全体が醗酵する」(マタイ 13,33)。9) というのも靈魂は三つの部分から成るが、従順によって救われるからである。これはまず、信仰によって靈魂のうちに隠された靈的な力のためである。あるいはわれわれに与えられている、威厳と力に満ちたロゴスの威力の故である。このロゴスは、誰であれその力を受け入れ、自らのうちにおさめる者をすべて、密にかつ隠された仕方でも自分の方へと引き寄せ、その人の構造を完全に一体化する。81.1) このことは、かのソロンにより、神に関連して極めて知恵に満ちたかたちで語られている。

「賢慮を必要とすることのうちでも最も困難を極めるのは、
明確ならざる節度を知ること。これのみが、
あらゆる事柄の限度を担っている」(ソロン断片 16 ティール)。

2) なぜならかの神的なるものとは、アクラガスの詩人(エンペドクレス)が語っているように、

「われわれの眼に見えるところにまでわれわれが近づくことも、
あるいはわれわれの手で捉えることもできない。
これは、人間のこころを捉える説得の最大の道なのだから」

(エンペドクレス断片 133 ティールス・クラツ)。

3) また使徒ヨハネはこう述べている。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」(ヨハネ 1,18)。すなわち彼は、神の見えずそして語りえない特性を「ふところ」と名付けたのである。そしてここからある人々は、神のことを「深淵」と呼んだ。これは言わば神が万物を包含し抱擁しつつも、神自身には到達しえずまた神は無限であるということのためである。4) 実に、神に関するロゴスの中で最も扱い難いのがこの点なのである。というのも、いかなる物事に関してもその根源は見出し難い。とりわけ第一の、そして最も時間的に遡る根源は示しがた

い。この根源とは他のすべてに関しても、その誕生また存立維持の原因となるものだからである。5) 類でも種差でもなく、種でも個でもなくまた数字でもなく、偶有性でもなくまたそこから何か偶然に生ずるというものでもないものが、いかにして語られえようか。それゆえ、神の全体を正しく表現することは、誰にもなしえないことであろう。なぜなら全体とは大きさに従って定められるものであり、神はおよそ万物の父だからである。6) であるから神のいかなる部分も語るべきではない。なぜなら一なるものは分割されえず、それゆえに無限なるものであり、尽きることのない性質に従ってではなく、中断されることのない性質に従って考えるべきであり、限定を有することなくそれ故に形なく名もないからである。82.1) たとえわれわれが神に名を付けようとしても、決して完全なかたちで呼びうることはない。すなわち「一」「善」「精神」「存在そのもの」「父」「神」「創造者」「主」などと呼んでも、それらをわれわれは神の名として引用して語っているわけではなく、貧しさゆえに美しい名を用いているに過ぎない。思惟が他の事柄にさまよわないように、それらの名を支えとしているだけなのである。2) というのも今挙げたその各々は、それぞれ別々に神について指示する力を持つというわけではなく、それらが全体となったときに、全能者の力を表す働きをするからである。なぜなら言葉が語られうるのは、それらに付随する性質から、あるいはそれら相互の関係からだからである。それゆえこれらのうちの何一つを以てしても、神に関して捉えることはできない。3) かつまた証明の力として働く知識をもってしても捉えることはできない。なぜならこの知識というものは、時間的に遡りまたよりよく知られている事項から成立するからである（アリストテレス『分析論後書』71B20 以下）。しかるに生まれざるものに対しては、何事も先行することはない。4) この結果、知られざるものを思惟しうるのは、神の恵みと神から発したロゴスだけによってということになる。それはルカも『使徒行録』の中で、パウロが次のように語ったと記しているとおりである。「アテナイの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰の厚い方であることを、わたしは認める。道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていと〈知られざる神に〉と刻まれている祭壇さえ見つけたからだ。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしは知らせよう」（使徒行録 17,22 - 23）。

**XIII. 哲学者たちによれば、神に関する覚知は神的に
与えられる賜物であって、
特に神的な息吹に相應しい人々に求められるべきこと。**

83.1) さて、名辞の下に置かれるものはすべて、人が望もうと望ままいと、創造されたものである。であるから父自身が、浄らかに生活し、至福にして不滅なる本性の覚知にまで歩んだすべての者を自らの許へと引き寄せるにせよ(ヨハネ6,44)、あるいはわれわれのうちにある自由意志が善の覚知に到り、体育教師の表現を借りれば「溝を飛び越す」にせよ、靈魂は神からの比類なき恩寵でもって翼を得て舞い上がり(プラトン『ファイドロス』246C1; 255D1)、天上にあるものよりもさらに上へと高められ、すべて重きものを取り払い(プラトン『ファイドロス』247B3)、生まれを同じくするものへとその重みを返すのである。2) かのプラトンも、『メノン』篇の中で徳が神の賜物であると語っている。それは次の一節が明らかにしている。「これまでの推論に従うかぎり、メノンよ、徳というものは、もし徳が誰かに備わるとすれば、それは明らかに神的な恵みによって備わるのだということになる」(プラトン『メノン』100B2-3)。3) ここで語られている「神的な恵み」とは、すべてに達しうるあの覚知の状態が象徴的に表現されたものだとは思えないだろうか。4) プラトンは、さらに明瞭なかたちで付け加えている。「もしこれまでの探究と議論の進め方がすべて間違っていなかったとすれば、徳とは、生まれつきのものでなければ、教えられ得るものでもなく、むしろ、徳の備わるような人がいるとすれば、それは知性とは無関係に、神の恵みによって備わるものだということになるだろう」(プラトン『メノン』99E4-7)。5) かくして知恵とは神からの賜物、父の力であり(1コリント1,24)、われわれの自由意志を推進させ、信仰を是認し、選択の際の注意深さに対する報いを内的な交わりのうちに与えてくれる。84.1) さらに、かのプラトン自身がすでに「神の子らは信ずるに値する」と明瞭に語っている箇所を提示したい。それは『ティマイオス』篇の中で、彼が目に見える創られた神々に関して述べている部分である(プラトン『ティマイオス』40D5)。「他の神霊に関して語るとしよう。その生まれを語ったり知ったりすることは、われわれの分際では及びもつかないことであるから、以前にこのことを語った人々を信用しなければならぬ。何しろ、彼らは自称、神々の子孫であり、どうやら自分たちの祖先のことを詳しく知っているらしいのだ。ともかく彼らの話に、何かそれらしい証明や、必然的な証明がなくても、神々の子らに不信の念を抱くことはで

きないのだから」（プラトン『ティマイオス』40D6—E2）。

2) わたしは、われわれの救い主や預言のために塗油を受けた人々、すなわち神の子たちと呼ばれる人々や真正な子としての主が、神的なことどもに関する真なる証人だということをギリシア人たちが確かに証言し得たとは思わない。プラトンも、彼らは神感に満たされた人々であるから、この人々には信を置かねばならないと付け加えているのである。3) もしある人が信ずることを拒んで、

「わたしにこのことを告げたのはゼウスではない」

（ソフォクレス『アンティゴネ』450）

と、より悲劇的な詩句を語るとしよう。その人は、子を通して聖なる書を告げ知らせたのがかの神自身であるということを知るがよい。その「自らに特有なこと」（プラトン『ティマイオス』40E2—3）を告げる方は、信を置くに相応しい方である。なぜなら「主は言われる。〈子と、子が啓示する人をのぞいては、誰も父を知らない〉」（マタイ11,27；ルカ10,22）からである。85.1) 実にこのことに関しては、プラトンの次の証言からも信を置くべきであろう。すなわち「たとえ適合性と必然的な立証がなくとも」（プラトン『ティマイオス』40E1—2）、これらのことは旧約と新約を通して告げ知らされ、語られているのである。なぜなら主もこう語っているからである。「あなたがたはもし信じないならば、自分自身の罪のうちに死ぬことになるであろう」（ヨハネ8,24）。また主はこうも告げている。「信ずる者は永遠の生命を有する」（ヨハネ3,15）、「彼に聴き従う者は、実に幸いである」（詩編2,12）。2) 聴従とは信仰よりも偉大なものである。というのも、例えばある人が、われわれの師とは神の子であるということを知ったとしよう。彼は師の教えが真理であるということを確認することであろう。3) 同様にエンペドクレスによれば「学びは精神を育成する」（エンペドクレス断片17,14 ディールス・クランツ）。それと同じように、主に対する信頼は信仰を増すのである。4) 哲学を罵倒すること、信仰を非難すること、不正を誉め貪欲のままなる生活を幸福だと言うことは、みな同じ類の者どもものなす業だとわれわれは主張する。

86.1) けれども、信仰が靈魂の自発的な同意だとするならば、もちろんそれは諸々の善を産み出す源泉であり、正義に適った行いの礎石でもある。2) またアリストテレスは次のように教え規定している。すなわち「製作する」（poiein）とは理性や靈魂を欠いた動物に関しても語られうる業であるが、「行為する」（prattein）とは人間のみの業であると（アリストテレス『ニコマコス倫理学』1139A20）。それ故、神を万物の「製作者」（poiētes）（プラトン『ティマイオス』28C3）

と呼ぶ人々の誤りは、アリストテレスによって正されるべきである。さらにアリストテレスは、行為 (prakton) とは善であるか必然であるかのどちらかであると言っている (アリストテレス『政治学』1333A32)。しかるに不正を働くことは善ではなく (というのも、何か他の目的のためでなく不正を働く者は誰もいないであろうから)、一方必然的なことのうちに自発的な行ないは含まれない。であるから不正を働くことは自発的な行ないであって、必然的な行ないではない。3) さて悪しき者どもと真摯な人々とを分かつのは、とりわけ選択のあり方と高貴な欲求であろう。というのも靈魂の邪悪さというものはすべて自制の欠如から生ずるものであり、情動に駆られて行為を起こす者は、無自制と邪悪さ故にその行ないをなすからである (アリストテレス『ニコマコス倫理学』1175B26)。

4) こういうわけで、わたしはかの神的な聖書の言葉には、いつも驚きを禁じえない。「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないで他の所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番はこの羊飼いのために門を開ける」(ヨハネ10,1-3)。続いて主はこれを敷衍して述べている。「わたしは羊の門である」(ヨハネ10,7) と。87.1) こういうわけで、人はたとえ偶々ギリシア哲学によって哲学の業に踏み込んだとしても、キリストを通して真理を学び、救われねばならないのである。このことは次のように明瞭なかたちで述べられている。「このことはキリスト以前の時代には人の子らには知らされていなかったが、今や明らかにされた」(エフェソ3,5)。

2) というのも一にして全能なる神の顕現ということは、正しく思惟する人々すべての間で常に本性的なものであり、大多数の人々は、神的な撰理による永遠の慈しみという考えを前もって抱いている。彼らはまた真理に対して全く無知であるというわけでもない。3) 実に、カルケドンの人クセノクラテスは、神に関する理解を普遍的に見いだしうるという希望を棄てておらず (クセノクラテス断片21ハイツェ)、理性を有しない動物に関してもその信念を貫こうとする。デモクリトスも、たとえ彼自身の望むところではなかったにせよその教説の連関に基づいて、クセノクラテスに同意している (デモクリトス、証言79ティールス・クランツ)。そのわけは彼が、神的な実体から発した同一の像が、人間にも理性を伴わない動物にも及んだと理解しているからである。4) 実に、人間が神的な考えとは無縁であるなどということは決して有り得ない。聖書にも記されているように、人間は創造される際に神の息吹きに与かっているのだから (創世2,7)。それ故人間は他の動物よりも浄らかな実体を分有しているのである。88.1) ピュタゴラス派の人々が、理性とは神的な恩寵によって人間の許に来た

るものだと語るのには、ここにその根拠を有している。これにはプラトンやアリストテレスも同意している。2) だがわれわれが「聖霊は信じる者に吹き込まれる」と主張するのに対し、プラトン主義者たちは、理性とは靈魂における神的な恵みの流出であり、靈魂とは肉体に住まうものだと考えている（プラトン『ティマイオス』30B5）。3) 実に、十二預言者の一人ヨエルによれば次のように明瞭に語られている。「その後、わたしはすべての人の上に我が霊を注ごう。するとあなたがたの息子たち、あなたがたの娘たちは預言するようになるだろう」（ヨエル3,1）。けれどもわれわれ各々のうちなる霊は、神のわずか一部分に過ぎぬものではない。4) この霊の分配がいかに行われ、また聖霊とは一体何であるかに関しては「預言について」および「靈魂について」で示されるであろう（『ストロマテイス』1,24,158,1以下；『ストロマテイス』2,20,113,2以下）。5) だが覚知の深み（ローマ11,33）に関してそれを隠すのは、ヘラクレイトスが言うように「善なる不信」である。なぜなら「不信は、知られることを避けようとするから」（169ヘラクレイトス断片86ディールス・クランツ）である。

XIV. ギリシア人は、ヘブライ人の本から 自分たちの教説を借りたということ。

89.1) では次に、ギリシア人がギリシア以外の哲学からおこなった剽窃を、より一層明確に提示しかつ証明せねばならない。

2) まず、実にストア派の人々は、神とは物的なものであり、その本質において息（ pneuma ）であって、それはもちろん靈魂と同様であると述べている（アルニム『古期ストア哲学者断片集』2.1035）。こういった類のことはすべて、聖書のうちに明確に見いださうものである。ここでいまわたしが、かの覚知の真理が伝えるようなかたちでの、寓意による方法を述べているとは思わないで頂きたい。すなわち知恵ある拳闘士たちのように、あることを告げながら別のことを示しているのではないかとはいえないで頂きたいのである。3) だが彼らストア派が、神とはあらゆる実体を貫通するものだと主張する（アルニム『古期ストア哲学者断片集』2.1035）のに対して、われわれは、神とは創造者であって、それもロゴスによる創造者であると呼んでいる。4) 彼らを誤り導いているのは、『知恵の書』に語られた次の言葉である。「（彼は）その浄らかさの故に、すべてを貫き、すべてを受け容れる」（知恵7,24）。彼らはこの箇所が、神によって最初に創られたものとしての知恵に関して語られているということをも

理解していない(シラ1,4). 5)「それはそうであろう、だが」、他の人々は言う。「哲学者たち、ストア派やプラトン、ピュタゴラス、それにペリパトス派のアリストテレスさえも、質料を諸始源のうちには置かず、また唯一なる始源をも認めていない」と。6) 彼らは、彼ら自身によれば「量なく」(アルニ『古期ストア哲学者断片集』2.300,301)「形なき」(アルニ『古期ストア哲学者断片集』2.311)ものと呼ばれている質料が、すでにプラトンによって大胆にも「非存在」(プラトン『国家』477A2-4)と語られていることを知るべきであろう。7) おそらくプラトンは、極めて神秘に満ちた思考の中で、真に存在する始源が唯一のものであるということを知っていたのではなかったか。彼はそれを次のような表現で語っている。「しかし、今はとにかく、次のように言わせていただこう。すなわち、すべてのものの始源というか、諸始源というか、あるいは好きなように呼んでもらってよいのだが、ともかくそうしたものに関しては、今は語るべきではないということである。それは他でもない、ただ、今の叙述の仕方では、われわれの見解を明らかにするのが難しいということのためである」(プラトン『ティマイオス』48C2-6). 90.1) 特に、預言書の「大地は見えず、姿なく」(創世1,2)という箇所が、哲学者たちに質料的な実体を導入する根拠を提供したのである。

2) 次いで、エピクロスは「空の空、すべては虚しい」(コヘト1,2)という詩句を正しく理解しなかったために、偶然的な生成という発想に到っている。3) 一方アリストテレスが、摂理は月までにのみ及ぶという発想に到ったのは、次の詩編に基づいてのことである。「主よ、あなたの憐れみは天に、あなたの真実は雲にまで届いている」(詩編35,6)。というのも預言的な神秘の証しは、主の到来以前には未だ明らかにされていなかったからである。

4) また一方、死後の罰や火による懲らしめに関しては、あらゆる詩的な文芸ばかりでなく、ギリシア人の哲学もまた、ギリシア以外の哲学からその説を借りている。5) 実にプラトンは『国家』の最終巻において、まさしく次のような表現を用いている。「するとそこには、猛々しい男たちが、火のような形相をして待ちかまえていて、その咆哮の声の意味を了解し、彼らを両側から驚掴みにして連れ去った。しかしアルディアイオスとその他の何人かに対しては特別に、その手と足を縛り上げ、投げ倒して皮を剥ぎ、刺の上で羊毛を梳くように、道に沿って外へ引きずって行った」(プラトン『国家』615E4-616A2)。6) この箇所での「火のような形相をした男ども」とは、不正なる者どもを捕らえて懲罰する天使たちを表現したものである。聖書にはこう語られている。「(神

は) 風を自らの天使とし、燃える火を自らに仕える者とする」(詩編 103,4). 91.1) この言葉は「靈魂は不滅である」ということを意味している。なぜなら、感覚の中で懲らしめあるいは教育を受けたものは、たとえ「苦難を被っている」と言われるにしても生き続けるからである。2) けれどもどうだろうか。プラトンも火の河や大地の深みということを知っていたのではなかろうか。彼はユダヤ人によってゲヘンナと呼ばれているもの(ルカ 12,5) を詩的にタルタロスと名付け、さらにコキュトス、アケロン、ピュリフレゲトンなどという、人間を教化し矯正するための懲罰の場所に言及しているのである(プラトン『ファドゥン』 111 - 113)。3) さて聖書によれば、小さき人々、最も小さき人々の天使たちは、神の顔を仰いでいるとされる(マタイ 18,10)。さらに、取りなしをする天使たちを通じてわれわれの許に遣わされる取り計らい(ヘブライ 1,14) に関しても、プラトンは躊躇することなくはっきりとこう記している。4) 「すべての靈魂たちが生涯を選び終えると、みなは籤の順番に整列してラケシスの許に赴いた。この女神は、これからの生涯を見守って選び取られた運命を成就させるために、先にそれぞれが選んだダイモンをそれぞれの者につけてやった」(プラトン『国家』 620D5 - E2)。5) またおそらくソクラテスにおいても、ダイモニオンとは上と同様のものを寓意的に表現するものであったと思われる(プラトン『ソクラテスの弁明』 31D1)。

92.1) 実に哲学者たちは、宇宙が創られたものであるということをモーセから受容して、教説として提示している。2) かのプラトンが、次のように明瞭に述べているのである。「宇宙は、生成の出発点というものが全くなくて常にあったものなのか、それともある出発点から始まって生成したものなのだろうか。それは生成したものなのである。というのも、それは見られるもの、触れられるもの、身体を持ったものだからである」(プラトン『ティマイオス』 28B6 - 8)。3) また彼は次のように述べている。「万物の創造者また父を見出すのは至難の業である」(プラトン『ティマイオス』 28C3 - 4)。彼はこのように語って、この世界が創られたものだとばかりではなく、世界が神の許から言わば息子のように生じ、また神が世界の父と呼ばれ、言わば世界が唯一なる神によって、非存在から成ったものだとことを表しているのである。4) ストア派の人々もまた、宇宙は創られたものだとしている(アルム『古期ストア哲学者断片集』 2.574)。

5) さてギリシア以外の哲学によれば、諸悪霊の首領たる悪魔がいるとされるが、これが悪しき働きをなす靈魂であるということ、プラトンは『法律』

篇の第10巻で次のような表現を用いて述べている。6) 「どこにあるのであろうと、動いているものにはすべて靈魂が宿っていて、これを統括しているのだとすると、靈魂は天をも統括していると言わざるを得ないのではないだろうか。それはそうだ。そうしているのは、一つの靈魂であろうか、それとも多くの靈魂であろうか。多くの靈魂である。わたしの方で、あなたがた二人に代わって答えよう。とにかく、二つよりも少なくはないということにしておこう。すなわち、善いことをなす靈魂と、それとは反対の状態をつくり出すことのできる靈魂との二つよりもということである」(プラトン『法律』896D11－E7)。93.1) プラトンは同様に『ファイドロス』篇の中でも次のように記している。「確かに他の悪もある。しかしその大半に対しては、悪魔とも言うべきものが束の間の快楽を混ぜ入れてしまう」(プラトン『ファイトロス』240A9－B1)。

2) そればかりでなく、プラトンは『法律』篇第10巻においても、次の使徒の言葉を明瞭に反映した発言をしている。「われわれの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸靈を相手にするものなのだ」(エペソ6,12)。つまりプラトンは次のように記している。

3) 「というのも、われわれ自身の間ではすでに、この宇宙には数多くの善いものがある反面、その反対の悪しきものもあり、しかも後者の方が数の上では多いということが同意されていたのだから、悪しきものに対するそのような戦いは、われわれに言わせるならば終わることのないものであり、並々ならぬ守護を必要とするものなのだ」(プラトン『法律』906A3－6)。

4) さてギリシア以外の哲学もまた、思惟界、感覚界、原初界、その像をなすいわゆる範例界の別を知っていた(プラトン『国家』592B1－2; 『ティマイオス』28A5－29B4)。そしてこの哲学によれば、第一の世界は思惟されるものであるという点でモナス(1)が当てられ、感覚界にはヘクス(6)が当てられる。なぜならピュタゴラス派の考えによれば、6という数字は「産み出す数」という意味において「婚姻」と呼ばれるからである。5) そしてこの六という数字は、その単一性のうちに不可視の天、形なき大地、そして思惟的光を統合する。なぜなら「初めに神は天と地を創った。地は未だ不可視であった」(創世1,1－2)からである。94.1) 聖書記者はさらにこう続けている。「そして神は言った、〈光あれ〉と。すると光があった」(創世1,3)。だが、感覚しうる世界の創造において主は堅固な天を創り(堅固なものは感覚しうる故)、さらに目に見える大地と光を創造したのである(創世1,6－8; 1,9; 1,14－17)。

2) 実にかのプラトンが、諸生物の種類を思惟されうる世界に置き、また思惟さ

れうる種族に従って、感覚しうる諸種のもを創造したのは（プラトン『ティマイオス』30C5—D4）、以上述べたことに立脚してのことだとは思えないだろうか。

3) プラトンが「土製の幕屋」と呼んでいる肉体（プラトン『アキオコス』365E5；366A1）を、モーセは相応しくも土で創られていると述べ、理性の備わった靈魂を、上天から神によって顔に息を吹きかけられたものと言っている（創世2,7）。4) というのも（ギリシア人）によれば、支配的な座というものはここに据えられているとされるからである（プラトン『ティマイオス』45B1—2；90A）。彼らは、最初に創られた人間にあっては、靈魂の注入は感覚器官を通じて行われたと解する。こうして「人間は（神の）像また似姿となった」（創世1,26）と言われる。5) なぜなら、神の像とは神的にして王的なロゴス、情動を被らない人間であり、人間の精神は「像の像」である。6) ここでもし「似姿」という語を別の言葉の意味に取ることを望むのであれば、モーセにあって、この語が「神に随き従う」ことを表す語彙として用いられているのが見いだされるであろう。すなわちモーセは「あなたがたは、あなたがたの主、神に随き従い、その掟を守らねばならない」（申命13,5）と言っているのである。思うにすべて有徳の人は、神の従者であり神に仕える人であろう。95.1) 哲学の目的を、ストア派の人々が本性に従って生きることだと語り（アルニム『古期ストア哲学者断片集』3.6）、プラトンが神に似ることだと言ったのは（プラトン『ティマイオス』176B1—2）、ここにその論拠を有している。このことは『ストロマテイス』第2巻でも述べた通りである（『ストロマテイス』2.19.100.3）。2) ストア派のゼノン（ゼノン断片223アルニム）は、プラトンに倣いまたギリシア以外の哲学に立脚して、「善き人々はすべて、互いに友愛で結ばれている」と述べている（ゼノン断片223アルニム）。3) というのも『ファイドロス』篇の中でソクラテスは次のように語っているからである。「まことに運命の定めは、悪しき者が悪しき者と真の友となることも、さらに、善き人が善き人と友にならずにいることも、決して許さないのである」（プラトン『ファイドロス』255B1—3）。これと同じことをプラトンは、『リュシス』篇においても十分に立証している。すなわち「不正や不法のうちにおいては、友愛はけっして報われることはない」（プラトン『リュシス』214A2—D7）と。4) アテナイからの客人も同じようにこう語っている。「神に愛され神に従う行為とは、ただ一つ、古の言葉が当てはまるものであって、節度をわきまえた者の場合は〈似た者は似た者に愛される〉のに対し、節度をわきまえぬ者は、お互い同士の間でも、節度をわきまえた者との間でも、愛されることはない。そしてわれわれ人間にとっては、万物の尺度は、何にもまして神であろう」（プラトン『法律』

716C1 - 5). 96.1) その少し後で、彼はさらにこう付け加えている。「すべて善なる者は善に似る。同じ論理によって、神に似る者は、すべて善と神の友となる」(プラトン『法律』716D1 - 2; 『リュシ』214C6 - 7)。2) ここでは、次に掲げる箇所を思い起こすことができよう。すなわちプラトンは『ティマイオス』篇の末尾に近い部分でこう語っているのである。「観察する側のものを、観察される側のものに似せて、前者をその最初の本然の姿に帰さねばならない。またこのようにして似せることによって、神々から人間に、現在に対しても未来に対しても課せられた最も善き生を全うしなければならない」(プラトン『ティマイオス』90D5 - 9)。3) 次に掲げるものは、今引いた箇所に似た箇所と言えるものであろう。「探し求める者は、見出すまでその行為を止めない。見出したとき彼は驚嘆し、驚嘆して王となり、王として休らうことであらう」(『ヘブライ人の福音書』断片 16 ハトマン)。

4) さて、ここでタレスのことを思い起こしたい。タレスは、次に掲げる聖書の箇所に基づいて発言しているのではないだろうか。すなわち彼は、われわれが「神を世々とこしえに誉め讃えること」(ガラテヤ 1,5)、および神を「人の心を知っておられる方」とすること(使徒行録 1,24)の意味を解釈しているのである。実に彼は「神性とは何であるか」と問われて、「初めも終わりも持たない者」と答えた。また他の人が「人の行いは神性に知られぬことがありうるか」と訊ねられ、彼は「どうしてそのようなことがあり得ようか、なぜなら人が考えているときですら、神の目を逃れおおせてはいないのだから」(タレス I, p.71 デイルス・クランツ)と答えたと言われる。

5) 実際、ギリシア以外の哲学は唯一なる善美ばかりでなく、幸福に到る上で十分な徳を知っていた。それは次のように語られる箇所から理解される。「見よ、わたしはあなたの目の前に善と悪、生命と死を置いた。生を選び取るがよい」(申命 30,15; 30,19)。6) つまりここでロゴスは生命を「善」と呼び、その善を選び採ることを美しきこと、一方逆の選択をなすのを悪しきことと言っているわけである。ここで善と生命には唯一なる目的がある。それは神を愛する者となることである。なぜなら、真理に向かうものを愛すること、それが「あなたの生命であり、長命をもたらす」(申命 30,20)ものなのだから。

97.1) だが次に述べることはさらに明確である。すなわち救い主は神と隣人とを愛せと命じ、この二つの掟のうちに律法と預言者のすべてが基づいていると述べているのである(マタイ 22,37; 22,39 - 40)。2) この教説に関しては、ストア派が繰り返し述べているし、彼ら以前にもソクラテスが『ファイドロ

ス』篇の中で次のように祈っている。「おおパーンよ、そしてその他の神々よ、このわたしが、内なる心において美しき者となることをかなえたまえ」（プラトン『ファイドロス』279B8－9）。3）『テアイテトス』篇においても、彼は明瞭に「美しく語る人は美しくまた善き人なのだ」（プラトン『テアイテトス』185E4－5）と記している。4）また『プロタゴラス』篇においても、もし最も知恵あることが最も美しきことなのであれば、アルキビアデスよりも美しき人に出会うことがありうるということを、著者はその仲間たちに同意して述べているのである（プラトン『プロタゴラス』309C－D）。5）というのも彼が言うには、徳とは靈魂の美であり、逆に悪とは靈魂の恥だからである（プラトン『国家』444D8－E2）。6）ストア派のアンティパトロスは「プラトンによれば美のみが善であるということ」に関する三巻の本を著したが、彼はプラトンにおいても徳が幸福にとって自足的であるということを実証し、この他にもストア派の教説と一致するプラトンの説を多く提示した（クルソスのアンティパトロス断片56）。7）一方、プトレマイオス・フィロメテルの頃に生きたアリストブロスは、マカバイ一族の歴史の要約（『マカバイ記』）を編纂した人物が言及する人物であるが（2マカバイ1,10；2,23；※B.C.160年頃、アレクサンドリアの王子付教師兼枢密顧問官を勤めたユダヤ人）、彼によって数多くの書物が残されており、それを通して彼はペリパトス派の哲学が、モーセの律法と他の預言者に基づいているということを証明している。

98.1) このことに関しては以上としたい。われわれが兄弟であり（マイ23,8）、言わば一人の神、一人の師に属する者であるということに関しては、プラトンもまた次のような表現を用いて明確に語っている。2）「かくして、君たちこの国にいる者のすべては兄弟どうしなのであるが—とわれわれは物語を続け、彼らに向かって言うだろう—、神は君たちを形作るにあたって、君たちのうち支配者として統治する能力のある者には、誕生に際して金を混ぜ与えた。それゆえにこの者たちは、最も尊重されるべき人々なのである。またこれを助ける補助者としての能力ある者たちには銀を混ぜ、農夫やその他の職人たちには鉄と銅を混ぜ与えた」（プラトン『国家』415A2－7）。3）ここから彼は「そのような人たちは、知が関わるころの対象を愛好し、愛着を寄せるのであり、他方、先に言われたような人たちは、思わくの対象となるものをそうする」のが必然となると言っている（プラトン『国家』479E7－480A1）。4）つまりおそらく彼は、かの覚知が追い求める選り抜かれた本性を預言しているのであろう。たとえそれが、ある人々の憶測しているように、ユダヤ人には銀、ギ

リシア人には第三の、また王的な金が混ぜ合わされているキリスト教徒には聖霊といった、三つの本性・三通りの生き方を提示しているのではないとしてもである。5) さらに、彼が『テアイテス』篇の中で強調を込めて記しているのは、キリスト教徒の生活のことである。「われわれの歌舞の音頭をとる者どもに関して語ることにしよう。といっても、哲学の業に虚しく時を費やしている者どもについては何を語ることがあろうか。6) 彼らはまず、アゴラへ行くにはどの道を行くかということを知らず、また裁判所だとか議会だとか、何か他にも国家公共の会議所となっているところのものも知らずにいるような模様である。また法律や書き留められた決議を見ることもなければ聞くこともない。7) それに、権勢の地位を目当てに徒党を組んでどんちゃん騒ぎをやるとか、そういったことは彼らの夢にもなそうと思わぬことである。そして国内の人の生まれの善し悪しであるとか、その汚点の何であるとか、そういったことはいわゆる〈海の水は何クース〉ということよりも、なおさら彼らの与かり知らぬことなのである。8) のみならず、これらすべてをこの種の人は知らぬということすら知らずにいる。むしろ事實は、ただその肉体がここに置かれ寄留しているというだけであって、ピンドロスの言うように、その運動は〈天の外にも地の下にも〉(ピンドロス断片 302b^{バウ}) 及ぶものであり、全体的な本性を全体として探求しつつも、彼ら自身は宙を飛んでいるという有り様なのである」(プラトン『テアイテス』173C6 - 174A1)。

99.1) さて、主の言葉「あなたがたは〈然り、然り〉〈否、否〉とだけ言うがよい」(マタイ5,37)には、次の言葉を対置させるべきであろう。「偽物をそのままにしておいて、真物をくramsすということは、断じてわたしには許されないことである」(プラトン『テアイテス』151D2 - 3)。2) また誓いの禁止(マタイ5,34; 5, 36)に関しては、(プラトンの)『法律』第十巻に見られる次の箇所が意を同じくしている。「あらゆることに関して、誉め言葉も誓いも遠ざけよ」(プラトン『法律』917C3-4)。3) (また、アリストブロスによれば)「ピュタゴラス、ソクラテス、プラトンはみな神の声を聞いたと言う(プラトン『ソクラテスの弁明』31D3; クセノフォン『ソクラテスの思い出』1.4)。彼らは万物の成り立ちを観想し、それが神の手で精密に創られ、中断することなく保持されていると考える(クセノフォン『ソクラテスの思い出』4.3.13)。これは彼らが〈神は語った。するとそうなった〉(創世1,3)と語るモーセの声を聞いたためである。モーセは、神の言葉が業でもあるということを示しているからである」(イウゼパス『福音の準備』13.12.3以下)。

4) さて人間が塵から創られたという論（創世 2,7）に立脚して、哲学者たちは肉体を常に「土でできた」ものと呼んでいる（プラトン『アグソス』 365E5）。一方ホメロスは、呪いの箇所においてこう語るのをためらわない。

「だがおまえたちはみな、水と土になりはてしてしまえ」（ホロス『イリアス』 7.99）。

6) これはイザヤが「彼らを泥のように踏みにじれ」（イザヤ 10,6；41,25）と言っているのと同様である。100.1) カリマコスもまた、明瞭に記している。

「それは、鳥も、海に棲むものも、四つ足の獣も、
みなプロメテウスの泥と同じように声を挙げた年であった」

（カリマコス断片 192,1 – 3 ファイター）。

2) また別の箇所で、同じカリマコスはこう歌っている。

「もしプロメテウスがあなたを造り、
あなたが別の泥から創られたのでなかったならば」

（カリマコス断片 493 ファイター）。

3) ヘシオドスもパンドラの箇所でこう語っている。

「（ゼウスは）ヘファイストスに命じて、急ぎ土を水で捏ね、
それに人間の声と体力とを注ぎ込んだ」

（ヘシオドス『農と暦日』 60 – 62）。

4) 実にストア派の人々は、自然本性を「技を秘めた火であって、秩序をもって生成に向かう」ものと定義している（ゼノン断片 120；124 アルム）。一方聖書においても、火と光はそれぞれ神また神の御言葉として、寓意をもって表現されている（出エジプト 3,2；ヨハネ 1,4）。

5) さてここでホメロスに目を転じてみよう。ホメロスもまた、水の大地からの乖離および乾いた土地の出現（創世 1,7；1,9）を、テテウスとオケアノスを語る箇所でこう述べているのではないか。

「すでに二人が、互いにベッドと情愛から
遠ざかって久しかった」（ホロス『イリアス』 14.206）。

6) さて、ギリシア人の中で最も博学の人々もまた、すべてのものに及ぶ力を神に帰している。例えばエピカルモス（ピュタゴラス派であった）はこう語っている。

「何物も、神的なるものを逃れおおせることはできない。
あなたは次のことをよく心に留めておかねばならない。
すなわちわれわれの監督者は神自身であり、神に不可能なことは
何一つないのだということを」（エピカルモス断片 23 ティールス・クランツ）。

101.1) またかの叙情詩人（ピンダロス）はこう歌っている。

「神にはできる、黒き夜から汚れなき光を興すことも、
黒雲に包まれた闇で、清らかな陽の輝きを隠すことも」

（ピンダロス断片 98bバウラ）。

（彼は、太陽が照っているときに夜をもたらすことができるただ一人の方、それが神その人なのだと言っているのである）。2) また『星辰譜』と題された詩のなかで、アトスもこう語っている。

「ゼウスのことから歌いはじめよう」

彼はこう語り始めてさらにこう歌う。

「人間どもよ、
われわれはゼウスのことを語らずに済ますことはできない。
道という道、また人々の広場はすべてゼウスに満ちており、
海にも港にもゼウスが充ちている。われわれはすべて、
あらゆることにおいてゼウスを必要としているのだ」

3) また彼はこう続ける。

「なぜならわれわれはゼウス一族なのだから」。

例えば、創造に関しても、

「ゼウスは人間には優しく、
幸あるしるしを示し、民をその仕事に駆り立てる。
なぜなら彼は天に幾多のしるしを据え、
諸々の星を区別したのだから。ゼウスは年々歳々
星座を見張る。星座は、わけても季節毎に定められた務めを
人間に示す。すべてが大地から生え出るように。
すべては最初にまた最後にゼウスを呼び求める。
いざ父よ、偉大なる驚異、人間にとっての大いなる助けよ、
力を賜らんことを」(アトス『星辰譜』1-15)。

4) また彼に先立ってホメロスも、ヘファイストスの手で楯が作られる場面で、モーセに倣い、宇宙創造の次第を、

「そこに神（ヘファイストス）は大地、天、海を創った」

と語り、また

「そこには天空を彩る星がすべて描かれている」

（ホメロス『イリアス』18.483,485）

と歌った。というのも詩歌あるいは散文の中で歌われるゼウスは、思惟を神に

まで高めるものだからである。

102.1) すでに、かのデモクリトスが次のように記している。「人間どもの中で」言わば〈光の許に〉「ある人々はわずかである」。すなわち「両手を、今われわれギリシア人たちが〈大気〉と呼んでいるところに差し出す人は、ゼウスはすべてを語り明かし、すべてを見そなわし、与えかつ奪う。この方は万物の王である」（デモクリトス断片 30 ディールス・クラツ）。2) かのポイオティアの人ピンダロスはピュタゴラス教的な発想から、次のように一層神秘的に表現している。「人々の種族も、神々の種族も一つ、どちらも一なる母から息吹きを受けた“われわれ”なのだ」（ピンダロス『ネア祝勝歌』6.1—2）。すなわちこれは質料を同じくしているという意味である。さらに彼ピンダロスはわれわれの創造者一人を立て、その至高者を「至高の創造者にして父」（ピンダロス断片 48 バウ）と呼び、各人の進捗を相応しく神性へと高める方と見なしているのである。3) わたしはプラトンに関しては沈黙を守ろう。彼は『エラストスとコリスコスに宛てた書簡』の中で、詳細は判りかねるがヘブライ人の書物から影響を受けたと見え、父と子の関係に言及しているように思われる。彼はおよそ次のように勧告している。4) 「下品に墮さない真面目さと真面目さの姉妹たる戯れとをもって誓い、かつ万物の原因にして指導者、原因者の父たる主なる神にかけて誓わねばならない。この父たる神のことに、もし真に哲学に勤しむなら、知ることができるであろう」（プラトン『第2書簡』323D1—5）。5) また『ティマイオス』篇における挿話は、創造者のことを父と呼び、次のように語っている。「神々よ、わたしがその父またその業の創造主となった方々よ」（プラトン『ティマイオス』41A5—6）。103.1) プラトンはまた次のように語っている。「すべてのものの王をめぐってすべてのものはあり、またその王のためにすべてのものはあり、またそのものはすべて美しきもの原因である。しかし第二のものをめぐって第二のものどもはあり、第三のものをめぐって第三のものどもはある」（プラトン『第2書簡』312E1—4）。この言葉は、わたしには他ならぬ聖なる三位を語ったもののように聞こえる。すなわち聖霊が第三位であり、第二位は子であり、この子を通し、父の意向に従って「すべてが成った」（ヨハネ1,3）のである。2) さてその同じプラトンは『国家』篇の第十巻で、パンピュロス族の血筋を受けるアルメニオスの子エルについて言及しているが、このパンピュロスとは実にゾロアストレスのことなのである。3) 実に、かのゾロアストレス自身がこう述べている。「アルメニオスの子ゾロアストレスがこれを記す。生まれはパンピュロス族で（プラトン『国家』614B3—4）、戦闘に

おいて生涯を終えたのち、ハデスにおいて神々から学んだ限りのことどもを」(プロクロス『プラトン国家篇注釈』II,p.111,12s.クル)。4) 実に、このプロアストレスに関してプラトンは、彼が薪の上に横たえられてから12日目に蘇ったと記している(プラトン『国家』614B6-7)。これはおそらく、まずは復活を表したものであろう。あるいは12の宮が、靈魂の上昇のための道となるという信仰をもほのめかしているのかも知れない。そして彼自身、その同じ下り道が誕生の際の道ともなると言っている(プラトン『国家』621B3-4)。5) これと同じ仕方で、かのヘラクレスの功業が十二であるわけも理解すべきであろう。すなわちこの数の功業を経た後に、靈魂はこの世のすべてからの解放に与かることができるのである。6) エンペドクレスをも省くことはすまい。彼は自然における万物の刷新に言及しており、彼によればいつの日か、火の実体に向けての転化が生ずるとされる(ティールス『哲学者詩人断片集』92頁)。104.1) エフェソスの人ヘラクレイトスも、極めて明らかにこの見解の持ち主である。彼は、永遠なる世界と朽ちゆく世界があることを認める。しかし彼は、秩序正しきあり方における後者は、あるあり方における前者と何ら異ならないということを前提としているのである。2) もっとも彼は、この世界が個々に固有なあり方でもって、あらゆる実体から成り立っており永遠であるということを知悉しており、そのことを次のように明確にして述べている。「この世界はすべて、神にせよ人にせよ誰が創ったものでもない。むしろそれは永遠に生きる火として、決まっただけ燃え、決まっただけ消えながら、常にあったし、あるし、またあるだろう」(ヘラクレイトス断片30ティールス・クラツ)。3) 彼はさらに、世界が生まれ、朽ちゆくものであるということを教説として述べる。これはテキストの続く部分が告げている。「火の転化、先ず海、次に海の半分は土、その半分は雷光」(ヘラクレイトス断片31aティールス・クラツ)。4) つまり彼は意味的に、次のようなことを語っているわけである。「火は、すべてを治めるロゴスと神とにより、大気を経て水に変容する。この水とは世界秩序の種子とも言うべきものであり、これを彼は〈海〉と呼ぶ。この種子から再び大地、天、そしてそれらを取り囲むものが生ずるのである」。5) さらに、再生と燃焼が如何にして新たに生じるかを、彼は次のような表現をもって明瞭に示している。「土は溶ければ海、そして計れば、以前それが土となる前にあったのと同じ割合になる」(ヘラクレイトス断片30bティールス・クラツ)。彼は他の諸元素に関しても同じように語っている。105.1) これとほぼ同様のことを、ストア派の中で最も評判の高い人々も、大炎上や世界秩序、世界や人間の個的性質、それにわれわれの靈魂の継続的存立

に関して論じる際に、教説として提示している（アルム『古期ストア哲学者断片集』590）。2）またプラトンは『国家』の第七巻において、この世での日を「夜の」と呼んでいる（プラトン『国家』521C6）。思うにこれは「この闇の世の支配者」（エフェソ6,12）の故であろう。また彼は、靈魂の肉体への下降を「眠り」また「死」と名付けている（プラトン『ゴルギアス』493A1－3；『ファイドン』95D1－2）。これはヘラクレイトスと同様である（ヘラクレイトス断片21 ティールス・クランツ）。3）また次の表現は、霊が救い主に関して、ダビデを通して語った際に預言したことと同じではないだろうか。「わたしは身を横たえて眠り、また目覚めよう。主がわたしを支えていて下さる」（詩編3,6）。4）これはつまり、眠りからの目覚めとしてのキリストの復活だけではなく、主の眠りとしての肉体への降下をも寓意的に表現しているのである。106.1）また救い主自身、「目覚めているように」（マタイ24,42）と勧告している。すなわちこれは生命を気づかい、靈魂を肉体と分かつことに専心せよという意味である（プラトン『ファイドン』67D3－4；80E3－8；81A6）。2）プラトンは『国家』篇第十巻において、主の日に関する予言を次のような表現でもって語っている。「さて、牧場に集まった靈魂たちのそれぞれの群れが七日間を過ごす、八日目に彼らはそこから立ち上がって、旅に出ねばならなかった。そして四日目に彼らはある地点に到着した」（プラトン『国家』616B2－4）。3）ここで「牧場」とは静かで柔らかな土地、敬虔なる者たちの場所という意味で、揺らぐことのない球のことであると解せよう。一方「七日間」とは七つの球各々の運動、究極の休らいへと急ぐあらゆる創造の業だと理解されよう。4）しかるにその歩みは、さまよう惑星を越えてさらに天へ、すなわち第八の運動また八日目へと伸びている。テキストには〈靈魂は四日間旅をした〉と語られているが、これは四元素の間を巡ったということの意味しているのであろう。

107.1）第七の日が聖なるものであるということは、ヘブライ人ばかりではなくギリシア人も知っていた。彼らによれば、生命ある動物・植物のすべてが棲まう全宇宙は、この七日間という周期で巡っているのである（イウゼパス『福音の準備』13.12.13－16）。2）ヘシオドスもこの日に関して次のように語っている。

「朔日、四日、七日は聖なる日」（ヘシオドス『農と暦日』770）。

また

「七日の日、この日には再び太陽の光が輝く」

（ヘシオドス断片362 ムルケルハッハ・ウェスト）。

3) 一方ホメロスはこう語っている。

「さて七日目の日、聖なる日がまたやって来た」

(偽ホメロス、キンケル『ギリシア叙事詩断片集』I.75).

また、

「七日目は聖なる日である」

(偽ホメロス、キンケル『ギリシア叙事詩断片集』I.75).

あるいは、

「七日目となり、この日にすべての準備が整った」

(ホメロス『オデュッセイア』5.262).

あるいはさらに、

「七日目の明け方に、われわれはアケロン¹の河を後にした」

(偽ホメロス、キンケル『ギリシア叙事詩断片集』I.75).

4) また、詩人カリマコスもこう記している (イウビ²オス『福音の準備』13.12.13 - 16).

「七日目の明け方に、すべての準備が整った」.

あるいは、

「第七日、また第七の血筋は吉兆」.

また、

「第七日は最高、第七日目は完全」.

はたまた、

「星ちりばえる天には全部で七つが作られた。

年が始まるに当たって円形に輝きを放って」

(イウビ²オス『福音の準備』13.12.13 - 16).

108.1) 同様にソロンが残したエレゲイア詩も、第七という数字をいとも聖なるものとしている (ソロン断片 27テイル).

2) では、次の例はどうであろうか。聖書には「正しき人をわれわれの許から退けよう。われわれには邪魔だから」(知恵 2,12) と語られている。これと同じようなことを、かのプラトンも語ってはいないだろうか。彼は『国家』の第2巻で救いの経綸を預言し、こう述べているのである。3) 「正しい人間というものが、先に言われた如くであるならば、彼は鞭打たれ、拷問にかけられ、縛り上げられ、両眼を焼かれてくり抜かれ、あげくの果てにはありとあらゆる責め苦を受けたすえ、磔にされるであろう」(プラトン『国家』361E4 - 362A1)。4) またソクラテス学派の人アンティステネスは、「主は言われる、

〈お前たちはわたしを誰に似せようというのか〉（イマヤ40,18；40,25；46,5）という預言者の言葉を敷衍して、こう述べている。「神は何者にも似てはいない。それ故誰も、神をその像から学び尽くすことはできない」（アンティステス断片24）。5）これと類似したことは、アテナイの人クセノフォンも次のような表現で述べている。「実に、すべてを動かした静止させ、偉大にして力ある方、その方は明らかである。だがその姿に関しては、目に見えない。実際、誰の目にも明瞭に思われる太陽でさえ、自らの姿を見られうるものとはしない。むしろ、もし誰かが傲岸にも太陽を見ようとでもしようものなら、その人は視力を失うであろう」（クセノフォン『ソクラテスの思い出』3,13－14）。

6）また、シビュッラは次のようにはっきりと述べている。

「実に、誰か肉の身にして、天上にあって真実な
不死なる神、天軸に居ます方を眼で見うる者があろうか。
誰一人、太陽の光とまともに面して立ちうる人はいない。
死すべき身の者なれば」（『シビュッラの託宣』断片1.10－13）。

109.1）さてコロフォンの人クセノファネスは、神が唯一にして非物的であることを巧みに教え、こう語っている。

「神は一なり。神々と人間のうちにおいて最大なる者、
死すべき人間にはその体躯においても思慮においても
比類なき者」（クセノファネス断片23 デイールス・クラツ）。

2）また別の箇所では、

「だが死すべき人間どもは、神々が産み出されるものと信じている。
神々が自分の衣服、声、体躯を持っていると考えて」

（クセノファネス断片14 デイールス・クラツ）

と述べ、3）さらに別の箇所では、

「だがもし牛や馬やライオンが手を持ったり、あるいは人間たちのように、彼らの手でもって絵を描いたり、作品を作ったりできれば、馬は馬に、牛は牛に似た神々の姿を描き、またそれぞれのものがちょうど自分で持っているような姿の肉体を作ることだろう」

（クセノファネス断片15 デイールス・クラツ）

と歌っている。

110.1）では叙情詩人バッキュリデスが神について語っている言葉に耳を傾けてみよう。

「神々は忌まわしい病に打ち負かされることもなく、

咎なき身である。人間どもにはまったく似てもいない]

(ハッキュリデス断片 23 スル・メラー).

2) またストア派の人クレアンテスもまた、その詩の中で神に関して次のように記している。

3) 「あなたはわたしに、善とはいかなるものかと問いただすのか。では聞くがよい。秩序立ったもの、正しきもの、敬虔なもの、敬心の念、克己心、有益さ、美、義務、厳しさ、端的なこと、常に役立つこと、恐れのないこと、苦しみのなさ、有用性、害のなさ、益あること、心地よさ、安全性、友愛、高貴さ、同意の成立、…、名高さ、傲慢に陥らないこと、注意深いこと、優しさ、激しさ、時間をかけること、非難の余地のなさ、絶えず辛抱すること」

(クレアンテス断片 557)。

111.1) だがその同じクレアンテスは、多くの人々の偶像崇拜に関しては沈黙を守ることによって攻撃しつつ、こう付け加えている。

「世評に視線を向ける者はすべて、不自由なるもの。

その世評から、自らが何がしか善いことから成っていると錯覚しているのだから」(クレアンテス断片 560)。

2) であるから神に関して憶測するのは、もはや大衆の思惑に従ってのことではないと言えよう。

3) 「というのも、わたしには想像もできないからだ、卑劣な男の姿をそっくり真似て、ゼウスが人間のようにあなたの寝床に忍び込んだとは」(エウリッデス『アンティオパ』断片 210)

とアンフィオンはアンティオペに語っている。4) 一方ソフォクレスは率直にこう記している。

「確かにゼウスはこの者の母親をめとった。

黄金に身を変えることなく、またプレウロン¹の地の娘(レダ)を孕ませたときのように白鳥の羽毛に覆われもせずに、完全な人間の男として」(ソフォクレス疑義断片 1026)。

5) 続いて、彼はこう加えている。

「足早にその姦夫は乙女の部屋に通ずる踏み段の上に立つ」

(ソフォクレス疑義断片 1026)。

6) さらに彼はより明瞭な形で、神話上のゼウスの淫らさをこう付け加えている。

「馳走にも手洗いの水にも触れず、彼は心を情欲に嘯まれて臥床へと向かった。そして、かの一夜じゅう交わりを重ねた」

（ソフォクレス疑義断片 1026）。

7) 芝居の下らない台詞に関しては以上としたい。さて、かのヘラクレイトスは次のように明瞭に語っている。「常に存在しているこのロゴスに関して、人間どもは決して覚らない。それを聞かされる前にも、あるいは一度それを聞かされた後にも」（ヘラクレイトス断片 1 デイールス・クラツ）。

112.1) また叙情詩人メラニッピデスは、自作の歌の中でこう語っている。

「おお父よ、人々の畏れよ、常世に生きる靈魂の守護者よ、
わが祈りを聞きたまえ」（メラニッピデス断片 6 デイール）。

2) 一方かの偉大なるパルメニデスは、プラトンが『ソフィスト』篇で伝えているように（プラトン『ソフィスト』237A4）、神性について次のように記している。

「実に、その方は創られざる身にして滅ぶこともなく、
すべてにして唯一、動くことなく創られざる方」

（パルメニデス断片 8,3-4 デイールス・クラツ）。

3) またヘシオドスも、

「というもかの方は、
万物の王にして不死なる神々の支配者。
いかなる他の者も、力においてあなたと争うことはできない」

（ヘシオドス断片 308 アルケルガッ・ウェスト）

と言っている。

4) 実に悲劇もまた偶像崇拜から脱却して、天に眼差しを向けるようにと教えているのである。

113.1) 歴史書を編んだヘカタイオスの『アブラハムとエジプト人』によると（偽ヘカタイオス断片 18）、ソフォクレスは舞台上で公然とこう叫んだと言う。

2) 「天空と広大な大地と、海原の灰青色の波と荒々しい風を創ったのは、
唯一の、真理に立つ一柱の神である。

しかし、われわれ心誤れる多くの人間は、災厄の慰めとなるように、
石造りの神々の偶像を、あるいは青銅の、あるいは黄金作りの、
そしてまたあるいは象牙の像を捧げた。

犠牲と空しい祝祭の場にこれらの偶像を立てめぐらし、
それをわれわれは敬神と見なしている」（偽ソフォクレス断片 1025）。

114.1) またエウリピデスはその同じ悲劇の劇場（幕屋）に関してこう書いて

いる。

「あなたには見えるか、いと高きところにある限りない大気が、
 湿った腕のうちに大地をぐるりと抱いているこの大気が、
 この大気をこそ神と考えよ、これを神と見なすのだ」

(エウリピデス断片 941)。

2) 彼エウリピデスは『ペイリトオス』という悲劇においても、次のように記している。

「汝はそれ自体で存在し、天空のロムボスの中にある汝は
 万物の生成を編み込んでおり、汝をめぐって光はめぐり、
 漆黒の夜も、さらにはどれがどれだかわからない星々の群れも、
 休むことなく回転する」

(エウリピデス『ペイリトオス』断片 593；

クリティアス『ペイリトオス』断片 19 デイールス・クランツ)。

3) つまり創造主はそれ自体で存在しており、あとから来るものを秩序正しく統御して、光と闇という相対立するものはその内にある、と詩人はここで語っているのである。4) またエウフォリオンの子アイスキュロスは、神に関して荘厳にこう語っている。

「ゼウスとは大気、ゼウスとは大地、ゼウスとは天。
 ゼウスとはすべてであり、そのすべてに勝るもの」

(アイスキュロス『ヘリアデス』断片 70)。

115.1) わたしはまたプラトンが「一つのもの、ひとりそれのみが智であるもの、それはゼウスの名をもって呼ばれることを望みもしないし、望みもする」(ヘラクレイトス断片 32 デイールス・クランツ) というヘラクレイトスの見解に同意しているのを知っている。2) また他の断片でヘラクレイトスはこう言っている。「法とは、唯一なる者の望みに従うことである」(ヘラクレイトス断片 33 デイールス・クランツ)。
 3) あなたが「聞く耳を持つ者は聞くがよい」(ルカ 14,35) という聖句を引こうと思えば、エフェソスの人(ヘラクレイトス)が次のように述べているのが見いだされるであろう。「理解力を持たぬ者が聞いても、耳聞こえぬ者に等しい。彼らに対する証言は、次の神託である。〈いてもいない〉」(ヘラクレイトス断片 34 デイールス・クランツ)。

4) またあなたはギリシア人たちから、始源は唯一であるということを感じたいと望むであろうか。ロクリスの人ティマイオスは、その自然学に関する論考の中でおよそ次のように語っており、わたしの証言者となるであろう。

「万物の唯一なる始源は作られざるものである。もし創られたものであるとすれば、それは既に始源ではなく、そこから始源が生じたところのものであろう」（プラトン『ファイドロス』245CD）。5) というのも、そこから真なる判断が溢れ出るからである。「主は言われる。〈聞けイスラエルよ、主なるあなたの神はひとりである、ただその方だけに仕えよ〉と」（申命6,4；6,13）。

6) 「見よ、この方はすべての人に明らかで、
誤つことがない」（『シビュラの託宣』断片1.28）

とシビュラは語っている。

116.1) またすでにホメロスも、先見に満ちた予見の才を備えていたと見えて、父と子に関して次のような表現をもって語っている。

「もし本当に、誰もお前が独りでいるのへ乱暴をしたのでなければ、
ゼウス大神から来た病気なのだ、どうにも避けようがあるまい」

（ホロス『オデュッセイア』9.410－411）。

「なぜならキュクロプスたちは、山羊皮楯をたもつゼウスなど
気にもかけないのだから」（ホロス『オデュッセイア』9.275）。

2) また彼に先んじてオルフェウスも、この事柄に言及し、次のように述べている。

「偉大なるゼウスの子、山羊皮楯を持つゼウスの父よ」

（ケルン『オルフェウス派断片集』338）。

3) 一方カルケドンの人クセノクラテスは、ゼウスのことをある時は「至高の」、またある時は「最も低い」と呼び、父と子の意味の相違をほのめかしている（クセノクラテス断片18）。4) さらに最も意外なことには、ホメロスは神々を人間的な感情を持ったものとして描いているところから、神性の性格を知っていたように思われるが、このホメロスに対して、エピクロスはそれほど畏怖の念を抱いてはいない（エピクロス断片228ウゼナー）。117.1) ホメロスはこう言っている。

「何故に、ペーレウスの子よ、わたしをその駿足で追いかけるのか。

そなたは死すべき身、わたしは不死なる神。ではそなたはわたしが

神であるということを知らなかったのか」（ホロス『イリアス』22.8－10）。

2) つまり彼は、神的なるものが、死すべき人間にはその足や手や目、はたまたその全身をもってしても、捉えることも掴むこともなしえないものであるということをはっきりとしたのである。3) 「お前たちは、神を誰に似せようとしたのか。あるいは神を何の像に似せようとしたのか」（イザヤ40,18）。4) 「職人

は偶像を鑄て作り、あるいは金箔を作ってそれにかぶせるではないか」(イザヤ 40,19) と聖書には語られている。

118.1) また喜劇作家エピカルモスは、その『国家』篇の中で、ロゴスに関して次のように明確に記している。

「人間の生活は、理性 (logismos) と数字とを大いに必要とする。
数字と理性に従って生きよう。なぜならこれらが
死すべき人間を救うのだから」(E^o カモス断片 56,57 テイルス・クラツ)。

2) これに続いて彼ははっきりとこう付け加えている。

「ロゴスが人間を導き、相応しい仕方で救うのだ」
(E^o カモス断片 56,57 テイルス・クラツ)。

3) さらに、もし

「人間に理性が備わるならば、神的なロゴスも備わる。
前者は人間にとって、その一生の転換期に与えられる。
だが後者は、術知に関して神的なロゴスがすべての人々に
伴わせるもの。ロゴス自らが常に、彼らに対して何を益あることとして
なすべきかを教える。なぜなら人が術知を発見するのではなく、
神がその術をもたらすからである。実に人間のロゴスとは、
神的なロゴスから生まれ出て来るものなのである」

(E^o カモス断片 56,57 テイルス・クラツ)。

119.1) 実に、預言者イザヤを通して霊が叫んでいる。「お前たちのささげる多くのいけにえが、わたしにとって何になるうか、と主は言われる。雄羊や子羊の脂肪や雄牛の血の燔祭にわたしは飽きた、もう望まない」(イザヤ 1,11)。次いで彼はこう続けている。「洗って、清くなれ。悪をあなたがたの靈魂から取り除け」(イザヤ 1,16) というように。2) 喜劇詩人メナンドロスは、次のような表現をもって語っている。

「おおパンフェロスよ、犠牲を捧げるとすれば、
たくさんの雄牛や子山羊などをだ、あるいはゼウスにかけて、
そのような類の動物を、または建物など。
金色や紫色の外套を織り、
はたまた象牙やエメラルドで小像を作り、
そうすると神の好意を取りつけることができようと考えて、
彼は迷い、軽薄な心を抱いている。
なぜなら人間は生来善き性格を持つべきもの、

処女たちを墮落させたり、かどわかしたりしてはならず、
金銭のために盗んだり、人をあやめたりなどしてはならぬ。
また針の糸を欲したりしてはならぬ、パンフュロスよ。
なぜなら神は君の傍らにいて、そなたを見守っているのだから」

（偽マンドロス断片 1130 コック）。

3) 「わたしは近づく神であり、遠くにいる神ではない。人が何かを秘密のうちに行ったからとて、わたしが彼を見つけられないとでもいうのか」とエレミヤを通して神は語っている（エレミヤ 23,23-24）。

120.1) またこのメナンドロスは、聖書の「主に義の献げ物を奉献し、主に希望をかけよ」（詩編 4,6）という言葉を使い換えて次のように記している。

2) 「おお愛する者よ、ゆめ他人の針一本すら欲してはならぬ。
なぜなら神は正しき業を喜ばれ、不正な好意は厭われるのだから。
神は、自らの生を高めようと努力して
昼夜大地を耕す者に任される。
常に身を正しく保って神に犠牲を捧げよ。
衣服も心も、華美であってはならぬ。
たとえ雷を耳にしても、逃げてはならぬ、
そなたの良心に恥じるところがなければ、おお主よ。
なぜなら神は君の傍らにいて、そなたを見守っているのだから」

（メナンドロス断片 1130 コック）。

3) 聖書にもこう記されている。「あなたが語るとき、わたしも語ろう。見よ、わたしはここにいる」（イザヤ 58,9）。

121.1) また喜劇詩人ディフィロスは、裁きに関して次のように語っている。

「おおニケラトスよ、あなたは知っているか、
死した人々、生命ある間にあらゆる放蕩を重ねた人間は、
知らない間に神性から離れているということ。
正義の女神ディケは眼を持っている、万物を見そなわす眼を。
またわれわれは、ハデスの館に二つの道があると考えている、
一方は正しき人に、もう一方は不敬な者に定められた道が」

（偽フィルモン断片 246 コック）。

さらに続けて彼は言う。

「もし大地がこの二つをいつでも隠しているのであれば、
立ち去り、強奪せよ。盗め、奪え、混乱に陥れよ。

決して迷うな。ハデスにも裁きは存するのだ。
 万物の支配者である神がその裁きを行い、
 その恐ろしき名を語ることは、わたしにはなしえない。
 彼は罪人たちに長き生を課するのだ」。

- 2) 「もしある人が日々、神々には知られることなく何か悪しきことを
 なしおおせていると考えるならば、彼の悪は重く、重罰に
 捉えられるように思われる。正義の女神が時宜を得てやって来られる
 際には」(イリピ^oデス『フリクス』断片 835)。
- 3) 「あなたがたのいかに多くが、神は存在しないと信じ、
 無思慮にも二重の誤りを犯しているか分かるであろうか。
 神は実際に存在するのである。もし、人が生来悪人でありながら
 栄えることがあれば、今のうちにいい目を見るがよい。
 いずれ後で罰を食らうであろうから」(イリピ^oデス疑義断片 1131)。

- 4) また次に挙げる悲劇作品は、次のような詩句でこれに同意している。

「というのも次のような時がやって来るであろうから。
 火に満ちた宝庫を金の眼を持つ大気が割き、
 育まれた炎が地上にあるもの、空中にあるものすべてを
 狂ったように燃やし尽くす時が」(ソフォクレス疑義断片 1027)。

- 122.1) 続いてその少し後で彼(ソフォクレス)はこう加えている。

「それがすべて止んだとき、海の深みが残らず消え失せ、
 大地は支えを奪われ、燃えさかる空はもはや
 翼ある輩を受け容れることはないであろう。
 その後、先に滅ぼしたあらゆるものを元通りにするであろう」

(ソフォクレス疑義断片 1027)。

- 2) これと同様のことは、オルフェウスの詩の中にも見出すことができる。そこにはこう記されている。

「ゼウスはすべてのものを隠し、聖なる心から
 歓喜の光のうちに再び取り上げる、このおぞましき業の為し手は」

(ケルン『オルフェウス派断片集』21a)。

- 3) だがもしわれわれが敬虔にかつ正しく生を送るならば、この世においては幸いのうちに、またこの世から取り去られた後には一層至福のうちに生を送りうるであろう。すなわちわれわれは時間のうちなる幸福を手にするばかりでなく、永遠のうちに休らうことができ、

「不死なる他の神々と共に住まい、食卓に就いては
人間の苦悩に与かることなく、破滅の憂き目を見ることもない」

(エンパドクス断片 147)

とエンパドクレスの哲学詩が語っているとおりになるであろう。

4) かくして、誰しもギリシア人が語るように裁きを免れるほどに偉大な者はなく、また人の記憶から消え去るまでに些細な者もいなくなることであろう。

123.1) かの同じオルフェウスはこうも語っている。

「神的な言葉に眼を向け、その傍らに座を占めよ、
心の聡明なる深みを正して、小道を巧みに歩み、
ただ宇宙の支配者、不死なる神のみを見つめよ」

(ケルン『オルフェウス派断片集』246)。

2) これに続き、彼は神に関して、「目に見えぬもの」と語り、ただ一人カルデア族のある人間にのみ知られたと述べる。その人がアブラアムであったにせよ、その息子であったにせよ、彼はこう語っている。

「ただ一人の人、カルデア人の族から発した、
かの上からの人を除いて、彼は星の歩みを知悉し、
天球が大地の周りを、どのように円周を描き、
また自らの軸の周囲をいかに等しく巡るかに通じ、
さらには霊が、大気や波をいかに操るかを見抜いていた」

(ケルン『オルフェウス派断片集』247,23 – 27)。

124.1) これに続いて彼は、言わば「天はわたしの玉座、地はわが足台」(イザヤ 66,1) という箇所を言い換えるような形で、

「神自身があらためて、偉大なる天、金の玉座の上に
おのが身を据え、大地をその足許に踏みしだく。
神はその右の手を大海の果てにまで伸ばし、
山々の台座は神の怒りの中で震え、
その巨大な力を維持することもできない。
神はまったく天上に居まして、地上ではすべてを完成する。
神は自ら始め、中央、そして終わりを掌握しているからである。
あなたに対して、これ以外の言い方をすることは不敬である。
わたしはそれを考えただけでも四肢が震える。神は高みから
その力を振るい..」(ケルン『オルフェウス派断片集』247,29 – 35.38 – 39)

といった句を加えている。2) というのも、こういった表現でもって、彼はか

の預言者の語ることをすべて明らかにしているのである。(預言者はこう語っている)、「もしあなたが天を開けば、山々はあなたゆえの震えに捕えられ、溶けることであろう、あたかも蠟が火の前で溶け去るように」(イザヤ64,1-2). 125.1) またイザヤを通してこう語られている。「誰か手の幅をもって天を測り、手の幅をもって全地を測りうる者があるか」(イザヤ40,12). これに対してオルフェウスはこう語っている。

- 「澄気、黄泉、大海、そして大地の支配者たる方よ、
雷電もてオリュンポスの固き御座を揺さぶる方よ。
あなたには神霊たちも震撼し、神々の群れもあなたを畏れる。
あなたには運命の女神たちも従う、容赦なき女神たちだとは言え、
- 2) 滅ぶことのない方、母にして父なる方よ、
あなたの怒りに万物は震える。
風を動かし、すべてを雲で覆い、
雷光もて広き大気を分かちつ方。あなたの規律は
変わらざる命もて走り、星辰にも及ぶ。
- 3) 火のごときあなたの御座の傍らには、倦むことなき天使たちが
控える、すべてが人間の間で完遂されるよう計りつつ。
あなたの春は、紫の花のうちに新しく輝きを放つ。
あなたの冬は、凍てつく雲を伴ってやってくる。
またぶどう酒の実りをもたらす秋も、あなたのもの」

(ケルン『オルフェウス派断片集』248a).

126.1) 続いて彼ははっきりと神を「全能者」と呼び、こう述べている。

- 「朽ちることのない、不死なる、不死なる者どもにのみ
語られうるものよ、来たれ、神々の中で最も偉大なる神よ、
すべてに溢れる力をもって。恐れ多く、負けることなく、
偉大にして朽ちることなく、霊気が取り巻く方よ」

(ケルン『オルフェウス派断片集』248b).

2) つまり「母にして父」(mētropatōr) という語でもって、彼は非存在からの生成を表しているばかりでなく、(唯一者からの) 発出という発想を取り入れる人々に対して、おそらくは神の配偶者を考える根拠をも与えたのだと思われる。3) また彼はいくつかの預言者の書を敷衍している。その一つはホセアによるものである。「わたしが雷を奪い、風を創る」(アモ5,13). その手は天の軍勢、モーセの兵に礎を与えたものである」(ホセ7,13,4). 4) 「見よ、見よ、わ

たしこそそれである。わたしをおいて他に神はない。わたしは殺し、また生か
しめる。わたしは傷つけ、また癒す。わたしの手を逃れうる者は、一人もいな
い」（申命 32,39）。

- 5) 「かの人自身が、死すべき人間どもに対して
善から悪を、凍りついた戦争を、そして涙に満ちた苦悩を
産み出すのだ」（ケル『オルフェウス派断片集』248b）

とオルフェウスは語っている。

127.1) また、パロス島のアルキロコスには次のような詩を歌っている。

「おおゼウスよ、父なるゼウスよ、天の支配権はあなたのもの、
あなたは人間どものなす業を見そなわす、
悪しきことも、掟に適ったことも」（アルキロス断片 177 ウェスト）。

- 2) では、再びトラキアの人オルフェウスに歌ってもらおう。

「神は四方から、その右の手を大海の果てにまで

伸ばした。大地はその足許に伏した」（ケル『オルフェウス派断片集』246）。

- 3) この詩句は、明らかに次の預言者の句から取られている。「主は人の住ま
う町々を救う。そしてその手で、全世界をあたかも鳥の巢のように捉える」
（イザヤ 10,14）。あるいはまた「主はその力でもって大地を造り、その知恵のう
ちに全世界を建てた」（エレミヤ 10,12）というエレミヤの句によるものであろう。

- 4) さらに、これらに加えてフォキュリデスは天使たちのことを「神霊」と呼
び、そのある者は善き天使たちであるが、ある者は悪しき天使たちであるとい
うことを、次のような詩句をもって語っている。というのもわれわれでさえ、
背教者となったある人々を知っているからである。

「だが実に、神霊たちは人間に対し、さまざまな接し方をする。

神霊たちのあるものは、悪が襲ってきたときに

人間をそこから解放する」（フォキュリデス断片 16 デイール）。

- 128.1) 喜劇作家フィレモンも、次のような表現をもって偶像崇拜を断罪して
いる。

「われわれには運命の女神などいない。そうだ、いないのだ。

むしろ、各々の者に生ずる出来事が、生ずるままに

〈運命〉と名付けられているのだ」（フィレモン断片 137）。

- 2) また悲劇詩人ソフォクレスも、こう言っている。

「神々ですら、万事が自分の望みどおりにゆくわけではない、

ゼウスを除いては、物事の終わりとまた初めもこの神の手のうちに

あるからだ」(ソフォクレス疑義断片 1028).

3) またオルフェウスも、

「一なる力、一なる神がある、偉大にして天を照らす方。
万物を一となす方、その一なる方の中に万物は包含される。
火も水も大地も」(ケル『オルフェウス派断片集』168,6-8)

と歌っている。129.1) また叙情詩人ピンダロスも、あたかもバックスの狂気に憑かれたかのように、こう率直に歌っている。

「神とは何か？ それはすべてである」(ピンダロス断片 129 バウラ)。

2) また他の箇所では、

「死すべき人間のために万物を創った神」(ピンダロス断片 130 バウラ)

と唱っている。3) さらに彼は、

「なぜあなたは知恵を望むのか。知恵において、
ある人と他人との差はほとんどない。神々の意向を究めよ、
これは人の心には難しきこと。なぜなら人の心とは、
死すべき母から生まれたものゆえ」

(ピンダロス断片 50 バウラ)。

と歌っているが、これは次の箇所からその発想を引いたものであろう。4) 「主の思いをだれが知ろうか。あるいは誰が主の忠告者となろうか」(イザヤ 40,13)。5) 彼ばかりではなく、ヘシオドスもまたその詩の中で預言書に同意している。

「地上に生きる人間どもの中には、誰一人として
楯を保つゼウスの意図を知りうるような予言者はいない」

(ヘシオドス断片 169 ムケルハッハ・ウエスト)。

6) かのアテナイ人ソロンも、そのエレゲイア詩の中で実に適確にこう語っている。それはヘシオドスに倣ったものである。彼によれば

「人間には、不死なる神々の心はまったくもって見えざるもの」

(ソロン断片 17 デイル)

である。

130.1) またモーセは、女がその墮罪の故に、苦難と労苦をもって出産せねばならないであろうことを預言したが(創世 3,16-17)、名声をもって聞こえる詩人(ヘシオドス)はこう記している。

「(人間たちは) 昼も夜も労役と苦難に苛まれ、
その止むときはないであろうし、

神々は（人に）苛酷な心労の種を与えることであろう」

（ハシトス『農と暦日』176—178）.

2) またホメロスは、

「父なる神は自ら金色の秤を平らにした」

（ホメロス『イリアス』8,69；22,209）

と語っているが、これは神が正しき方であるということ告げるものである。

3) 一方喜劇詩人メナンドロスは、神が善き方であることを説明しつつ、こう述べている。

「神はどんな人間に対しても、その誕生の折から直ちに
その傍らに立ち、生の導き手となる、
善き方であるから。なぜなら悪しき神霊、
高貴な生を害する神など考えてはならないのだから」

（メナンドロス断片 550 コック）.

4) つづいて彼はこう付け加える。

「神、すべてにおいて善きもの」（メナンドロス断片 551 コック）.

ここで詩人は、神とはそのすべてが善きものだと言っているのか、あるいはむしろ、善き神はすべてのもののうちに潜むと語っているのである。

131.1) また悲劇詩人アイスキュロスは、神の力を表す際に、次のような言葉でもって、神を至高なる者と呼ぶことをためらわない。

2) 「神を、死すべき人間から分け隔てよ、己と

等しく肉から成るものと思ってはならない。

君は神の正体を知らない。ある時には火の姿をとって現れ、

その迫れる火の勢いには近寄りえない。ある時は水、

ある時は暗闇となって現れる。

また、自らが獣、風、雲、それに稲妻、雷、雨に似た形となる。

3) 神にとっては海、岩、また

どの泉も、集まり合う水も僕である。

主君の険しい目が向けられるときには、

山々が、大地が、海の広漠とした深淵が、

山々の高くそびえる峰がおののき震える。

至高の神の栄光が万象に力を及ぼすからである」

（アイスキュロス疑義断片 464）.

4) 実にこれは、かの「主の御顔の前に大地は震えおののく」（詩編 113,7；

67,9) という聖句を言い換えたものだとは思われぬであろうか。

132.1) さらに、かの預言を極めるアポロンは、神の栄光に対して証しをなし、アテナのために次のように語ることを余儀なくされた。すなわちこれは、メディア人たちがギリシアに向けて兵を進めつつあったとき、アテナがアッティカのためにゼウスに祈り嘆願したためである。2) その神託とは、

「パラス（アテナ）がいかほど言葉を費やし、賢しき才覚を用いて嘆願しようとも、オリュンポスなるゼウスの御心を動かすことはかなわぬ。またその神により劫火に委ねられるべきあまたの神殿は、すでにいま恐怖に戦いて汗をしたたらせている」

（ヘロドトス『歴史』7.141,140）

などというものであった。

133.1) テアリダスは『本性について』の中でこう記している。「あらゆる存在物の原初は、少なくとも真に実在するものに関しては、唯一である。なぜならその原初とは初めに存在し、一にして唯一だからである」（テアリダスp.201 テスレフ）。

2) 「偉大なる王を除いて、他のいかなる者も存在しない」

（ケルン『オルフェウス派断片集』245,13）

とオルフェウスは述べている。3) 彼に従い、喜劇詩人のディフュロスも、極めて警句的なその文体で、こう歌っている。

「万物を治める〈在る方〉、
この父なる方だけを常に崇敬せよ。
かくまで豊かな善きことどもの

発見者にして創造者である方を」（偽ディフュロス疑義断片138）。

4) プラトンが「最もすぐれた素質を持つ者たちをして、われわれが先に最大の学問と呼んだところのものまで到達せしめるように、つまり、かの上昇の道を登りつめて〈善〉を見るように」（プラトン『国家』519C8－D1）習慣づけようとしたのも理に適っている。5) 「思うにこのことは、陶片の転向とはわけが違ふだろう。これは靈魂を、何か夜を交えたような昼から転向させて、真実の昼へと向け変えることなのであって、それがつまり、真実在への上昇ということであり、これこそまさにわれわれが、まことの哲学と主張するであろうところのものなのだ」（プラトン『国家』521C4－7）。6) そして彼は、この真なる哲学に与かる人々を〈金の種族〉として分かち、「君たちはみな兄弟である」（プラトン『国家』415A4.2.3）と述べているが、この金の種族に属する人々こそ、最も正確な意味でまたいかなる点においても兄弟だとされているのである。

7) さてすべてのものはあらゆる点において、万物の父そして創造者である方に対し、本性的にまた教えられることなくながしかの関係を有している。すなわち生命を欠くものは動物と共感のうちにある。一方生物のうち、あるものは日々その業をなしている不死なるものとして生き、また死すべきものうちあるものは、まだ恐れのうちであり母によってなお胎内に宿された状態で、一方あるものは自らの意志と理性で生きている。8) さて人類はすべて、ギリシア人と非ギリシア人とに分かたれる。もっとも農夫であろうと遊牧民であろうと、あるいは市民であろうと、いかなる種族であっても、より偉大なものへの信仰によって予め守られていない限り、何処にも居住することはできない。9) それ故、東の岸辺また西の岸辺に接し、また北あるいは南側の民族は、権威を打ち樹てた者に関してみな唯一かつ同一の観念を抱いていると言える。それは彼の力が、万物に対して等しく、極めて普遍的に及ぶからである。134.1) しかしギリシア人の中で探究に燃える人々、智を愛する者たちは、ギリシア以外の哲学から刺激を受け、不可視、唯一、最も力あり、最も業に長け、最も美しきことどもの根源たるものに対してさらなる大きな優位性を与えた。だがその結果するところに関しては、われわれから教えの手ほどきを受けるまでは知ることがなく、神そのものに関して、本来どのようにして思惟されるべきかということを知らず、ただ、すでにわれわれがしばしば言及してきたように、真理の輪郭を描いて思惟していたのであった。2) 使徒は相応しくもこう語っている。「神とはただユダヤ人だけのものだろうか。ギリシア人にとっての神でもあるのではないだろうか」（ローマ3,29）。ここで使徒は、ギリシア的宗教から信仰をもつに到ったギリシア人が神を知っているということを預言的に述べるばかりではなく、たとえ主が力において万人の神であり、真に万能なる方であるとしても、万人の知識において神であると認められるわけではないということをも語っているのである。3) というのも彼らは存在するものも、主や父や創造者がいかにあるかということも、真理に関する他の摂理も、かの知識を通して学んだこと以外には知らなかったからである。

135.1) 同様に預言者たちの言葉も、使徒と同じ意味を伝えている。まず『イザヤ書』にはこう語られている。「もしあなたがた（ユダヤ人）が〈われわれは自分たちの神である主に信を置く〉と言うのであれば、いま、私（ラブ・シャケの）主君であるアッシリアの王（センナケリブ）と交わりを持つがよい」（イザヤ36,7-8）。さらにはこう述べられている。「いま、われわれ（アッシリア軍）はこの地を滅ぼすために、主なくしてここへやって来たはずがある

うか」(イザヤ36,10)。2) 一方、自らが預言者であったヨナも、同じ意味のことを次のような表現を用いて語っている。「船長はヨナの許へやって来て言った。〈なぜ寝ているのか。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神がわれわれを救い、われわれが死なないように〉」(ヨナ1,6)。3) ここで「あなたの神」という言葉は、確かな覚知による知者に対して語りかける表現であるが、「神がわれわれを救うように」という表現は、まだ信仰を持たない異邦の民が、全能者に対して心を向け、共感を有しているということを表している。4) さらに『ヨナ書』ではこう語られる。「ヨナは船乗りたちに言った。〈わたしは主の僕であり、天の神にして主なる方を畏れる者だ〉」(ヨナ1,9)。136.1) そしてこう続けられる。「ついに、船乗りたちは言った。〈ああ主よ、この男の生命のためにわれわれを滅ぼすようなことは、決してなさる給うな〉」(ヨナ1,14)。2) また預言者のマラキは、神がはっきりと次のように語っていると告げる。「わたしは犠牲をあなたがたの手から受け入れはしない。日の昇る所から日の沈むところまで、わたしの名は異邦人たちの間で崇められ、到るところでわたしのために犠牲が献げられている」(マラキ1,10-11)。3) さらにこう述べられている。「〈なぜなら〉、主なる全能の方が言われる。〈わたしは大いなる王で、わたしの名は異邦人たちの間にあまねく知れ渡っているからだ〉と」(マラキ1,14)。どのような名であろうか。信じる人々の間では「父を告げ知らせる子」であり、またギリシア人の間では「創造者たる神」(プラトン『ティマイオス』28C3)であろう。4) プラトンは(神の)自由意志を次のような言葉で表現している。「徳は何物にも支配されない。徳を尊ぶか、蔑ろにするかによって、人は各々徳に対してより多く、あるいは少なく与かることであろう。責任は選ぶ者にある。神にはいかなる責もない」(プラトン『国家』617E3-5)。なぜなら、神は悪に対する責任をけっして負わないからである(プラトン『国家』379B-C; 380B)。5) 叙情詩人(パッキュリデス)は唱っている。

「おお、徳の友であるトロイア人たちよ、
 高きに居まして治めるゼウス、万物を見そなわす方、
 彼には死すべき人間どもの被る大いなる苦悩の責はない。
 だが彼はあらゆる人間にとって、汚れなき正義に到り、
 聖なる秩序、思慮ある掟に従うための門に座している。
 彼を見出し、共に住む者とする者は幸い、至福なる者の子孫」

(パッキュリデス15.50-56 スネル・メラー)。

137.1) またピンダロスは、テミスと共に住むゼウスの姿を明瞭に描き、王で

あるゼウスを正しき救い主と解釈し、次のように語っている。

「まずゼウスは、天に住まう賢慮に満ちたテミスを
金でできた馬車に乗せ、オケアノスの泉から
オリュポスの崇高なるすそ野まで、モイラに引かせ
輝く道を通して運んだ。救い主ゼウスの古き妻として。
そしてテミスは、金の髪飾りをつけ美しき実りをもたらすホーライ、
真理を司る女神たちを産んだ」（ピンダロス断片 10 バウ）。

2) さて真理に従わず、人間的な教えのために高慢になっている者は不幸なる人間であり（1 テテ 6,3 - 4）、エウリピデスによれば、次のように憐れな者でもある。

「彼はこのような見方の故に神を知らず、
占星術者たちのよこしまな欺瞞を自ら投げうつことをしなかった。
彼ら占星術者たちの災い多き舌は、目に見えぬことどもをめぐって
でたらめなことを語り、思慮にはまったく与からない」

（エウリピデス典拠不詳断片 913）。

138.1) では、自ら望みつつ真なる学知に到った者は、エレアの人パルメニデスが約束する次のことに耳を傾けるがよい。

「汝は、アイテールの本性とアイテールの中なるすべての
微と輝く太陽の清らかな松明の、眼も眩むばかりの働きを、
またそれが何処より生じ来られるかを知るであろう。
さらに、丸顔の月の巡り行く働きと本性とを学ぶであろう。
そしてまたわれわれを取り巻く天が何処より生じ、
またそれをアナンケが如何に導きつつ、もろもろの星の限界を
保持するように強制したかをも知るであろう」

（パルメニデス断片 10 ティールス・クラツ）。

2) メトロドロスもまた、彼自身エピクロス派であったが、神感を受けて次のように語っている。「メネストラトスよ、思い起こせ。お前は死すべき本性の身で、限られた生しか享けていないのに、靈魂において永遠の世にまで昇り、ものごとの無限性と〈未来のこと過ぎ去ったこと〉（ホロス『イリアス』 1.70）を目にしたのだ」（メトロドロス断片 37 ケレ）。3) さてプラトンによれば「われわれが幸いなる合唱隊とともにあるときに、われわれはゼウスに従いつつ、他の人々は他の神々に従いつつ、祝福された観ものと光景を」目にした。「それは数ある秘儀の中でも、類なく祝福されたものと言うことが許される秘儀に参与した

ときのことであった。その秘儀を祝うわれわれ自身、全き姿のまま、後にわれわれを待ち受けていた数々の悪をまだ身に受けぬままであった。それはまた全き姿の、純一な、荘重な、祝福に満ちた聖像を、明るく清らかな光の中に啓示され、それによって奥義を伝授されながら、この秘儀を祝ったときのことであった。そのとき浄らかな光を見たわれわれもまた浄らかであった。そしてそれは、肉体と呼ぶこの靈魂の墓、つまり、いま牡蠣のようにその中にしっかりと縛りつけられたまま身につけて持ち回っているこの汚れた墓に、未だ葬られずにいた日々のことであった」(プラトン『ファイドロス』250B6—C6)。

139.1) またピュタゴラス派の人々は、天を「対地物」(ピュタゴラス派無名者断片 27-37a ティールス・クランツ)と呼んでいるが、それはエレミヤによって次のように語られた「地」に根ざしてのことである。「わたしはあなたを子らのうちに置き、あなたに全能の神の嗣業の地、選り抜きの土地を与えよう」(エレミヤ 3,19)。この嗣業を受け継いだ者たちが、地を治めることであろう(詩編 36,11)。

2) このようなことどもは、数限りなく付け加えられるほどにわたくしの脳裏に浮かんでくるが、論考の長さを考慮すると、このあたりでこの記述を終えるべきであろう。かの悲劇詩人アガトンの批判をわれわれも被ることがないようにするために。

「われわれは副業を本業と錯覚し、

本業を副業としてのみ扱うのに苦慮した」(アガトン典拠不詳断片 11)。

140.1) 以上で、ギリシア人たちが主から盗人と呼ばれた(コリネ 10,8) ことに関して、どのように理解すべきかを、明確に示すことができたことわたしは考える。なお哲学者たちの教説に関しては、意図的に省略した。2) というのももし彼らのテキストまでも逐一検討するならば、その膨大な注解の類をも収集する結果、ギリシア人のあらゆる英知が、ユダヤの哲学から取り入れられたのだということを示すことになろうからである。3) その観想に取り掛かるならば、必然的に、事物の原初に関してギリシア人の間に伝えられている教説を論ずることになろう。4) もっともわれわれは、いかなる方法でギリシア人の書物に接するべきかということに関しても、その書籍の波のうちを泳ぐことのできる者に対して、すでに述べたことに基づいて、事情の許す限り提示することになろう。5) 実に、エンペドクレスによれば、

「神的な理解という富を獲得した人は幸いである。

だが神々に関する闇多き思いなきが心にかかる人は哀れである」

(エンパトクレス断片 132 ティールス・クランツ).

彼はここで、覚知と無知を、幸福と不幸の境界として神的に明示したのである。6) というのもヘラクレイトスによれば、「哲学者は数多くの事柄によく通じた人間でなければならない」（ヘラクレイトス断片 35 ティールス・クランツ）からであり、まさしく

「優れた人物たらんと欲する者は、多くの遍歴を経る」

(フォキュリデス断片 13 ティール)

ことが不可欠だからである。141.1) さて、すでにここまで述べられた事柄によって、神の善き業が永遠なるものであること、および初めから始まりなく、本性的な正義が万物に対して全く等しく及んでおり、それは各々の種に相応しい仕方ではなされ、決して始まりがないということが明らかになったであろう。2) というのも神は、主であることおよび善であることの始めを有するものではなく、いまある姿は常に在る姿であって、たとえ神がそれぞれのものに終滅をもたらすとしても、神自身は決して善をなすことを止めないからである。3) われわれは各々、神のこの善き業に、それぞれの希望に応じて与かっている。その際に相互の違いは、それぞれの召され方に適わしい選択と靈魂の鍛練が産み出してゆくものである。

4) 以上をもって、われわれの『真なる哲学による覚知に基づいた覚書き』第5巻を終えることにしたい。

注

- 1 「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）—全訳—」, 筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』57, 1—82, 2010.3; 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第1巻—全訳—」, 同『文藝言語研究 文藝篇』59, 1—62, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第2巻—全訳—」, 同『文藝言語研究 言語篇』59, 1—74, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第3巻—全訳—」, 筑波大学大学院人文社会科学研究所古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号, 25—76, 2011.3.
- 2 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第1巻—全訳—」, 筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』63, 63—163, 2013.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第2巻—全訳—」, 筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』63, 147—223, 2013.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』」

- ス』（『綴織』）第3巻—全訳—」，筑波大学大学院人文社会科学研究所古典古代学研究室刊『古典古代学』第5号，27－93，2013.3，「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第4巻—全訳—」，筑波大学大学院人文社会科学系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』65，2014.3，「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第6巻—全訳—」，筑波大学大学院人文社会科学系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』65，2014.3，「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第7巻—全訳—」，筑波大学大学院人文社会科学研究所古典古代学研究室刊『古典古代学』第6号，35－113，2014.3. 第8巻については，本第5巻の改訳と同時に訳出を企図している。「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第8巻—全訳—」，筑波大学人文社会科学系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』66，87－115，2014.10 刊行予定.
- 3 アレクサンドレイアのクレメンス『ストロマテイス』第5巻（上智大学中世思想研究所編訳／監修『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』283－416），平凡社，1995.2.
 - 4 M. Akiyama, “Il significato di “segno” nell’interpretazione biblica di Clemente Alessandrino”.